川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和五十八年七月二十五日　印刷
昭和五十八年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六七五号

日川協加盟

No. 675

八月号

尼緑之助喜寿・句集発刊
句碑10周年

祝賀川柳大会

日時　昭和58年9月25日（日）11時
会場　出雲市商工会館
お話　西尾栞
兼題　生きる　橋高薫風選
　　大地　野村太茂津選
　　練る　河村日満選
　　本場　八木千代選
　　音　柴田午朗選
　　熱　津川紫吻選
　　各題2句
会費　四千五百円（句集・発表誌呈、昼食祝宴費共）

主催　いずも川柳会
後援　川柳塔社

※大阪から三泊四日（車中一泊）のバスツアーは30名で締切らせて頂きます。お申込みは本社・板尾岳人、高杉鬼遊まで。
日程等は7月号31p参照。

洗練された嗜好遍歴は、
リザーブへ向かわせる。

ひと口、含んだだけで、揺ぎのない味に触れることができる。豊潤にして毅然たる味。リザーブを飲んだ方は、大人の洗練、都会のエレガンスを感じとることだろう。

サントリーリザーブ
標準的な小売価格3,200円　製造・販売　サントリー株式会社

紫陽花や色即是空昼の雨

紫陽花に朝の放屁のはばからず

頬杖に紫陽花色をかえる雨

紫陽花の美事な変身我愚直

西尾　栞

寒疣

七月二日、日本川柳協会の常任理事会が、国鉄大阪保養所で開催された。色々の議題の一つに、去る五月十五日に放映された「すばらしき仲間」の一シリーズの・おもしろ川柳大会のことであった。この問題は去る六月十二日の日川協主催第七回下田川柳大会の東西合同常任理事会の席上でも喧々囂々であったそうだが、それは当然のことである。川柳という立派な文学を、よくもまあ冒瀆するにも程があると憤慨やるかたなきものであった。宗匠風のいでたちの藤本義一氏が、宿題「春の蠅」席題「芽、たれる」を出して〝発句〟に入りますという言葉で始められた。川柳会では発句とは言わない。俳句会でも、いちいち発句に入るとは言わないが、発句という言葉は俳諧の最初の句のことをいうので、同氏が川柳と俳句のけじめも知らずに宗匠ぶっているところが、これまた漫画の域を出ていないが、川柳というジャンルがこんなにも低俗なものかと、何も知らない人に認識されては実に寒疣のたつ思いであった。

これについて当日の理事会の意見を纏めると、①抗議文を出すこと、②要請状にすること、③理事長所感として反省を促すことなどと言々区々の意見が述べられたが、相手は視聴率を目的としたスポンサー付の仕事だからということで、第一回は日本川柳協会なるものが歴然とあるということを認識さすことと、川柳はもっと次元の高いものであるという認識を促すことにして理事長所感ということに一致をみて閉会した。

当日は日川協常任理事の参議院議員仲川たけし氏も出席されて、政治家からみた意見を開陳されたことは誠に幸いであった。

何れにしても川柳の前途は多事多難である。心してにこそ。

座右の句

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ　（葭　乃）

私の句

貧乏が私（わたし）磨いてくれました　中西兼治郎

川柳塔　八月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

寒疣……西尾栞……（1）
ねぶた夜話……工藤甲吉……（2）
川柳塔（同人吟）……西尾栞選……（4）
自選集……（30）
■川柳太平記(63)《川柳の群像》吉川雉子郎……東野大八……（34）
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（十二丁）……（36）
水煙抄……黒川紫香選……（38）
秀句鑑賞┌同人吟……傍島静馬……（33）
　　└水煙抄……小林由多香……（59）
黒川紫香自選百句……（52）
谷垣史好自選百句……（54）

ねぶた夜話

工藤甲吉

ねぶた囃子津軽えみしの血を沸かせ

八月の津軽は最大の祭り「ねぶた」の季節である。一面の夜空をまんどろ（語源―万燈籠―すばらしく明るい）に焦がして一日からは津軽十万石の城下町、弘前の「ねぷた」、三日からは港町、青森の「ねぶた」が始まり共に七日の七夕でフィナーレとなる。

ねぶたの起源は定かでないが、文禄二年、津軽藩祖為信が京都に逗留中、盆の行事に大灯篭を出したのが大評判になったのが始まりとも言われるが、絢爛であり豪華である。

青森のねぶたは武者を主にした人形灯篭。弘前のねぷたは扇型。武者を鏡絵にして美人を送り（背面）絵にする。

火の神をねぶたのゆれるときに見る

世界的板画家で青森市生まれの棟方志功画伯は、ねぶたについて、生前

ネプタは大きい宗教なんだ。人類あげてのファイア・フェスティバル（火祭り）だ。―このネプタにこめた祈りは、今まで南から北へ向かっていた文化を北から南へ向かわせることなんだ。北の文化を開く〝天の磐戸〟なんだ。

愛染帖……橘高薫風選…(56)
八月の空……西尾栞…(60)
高橋操子川柳作品展に寄せて……植山武助…(62)
旅で拾った「テン」と様にならない話……黒川紫香…(64)
はねぶとん―田中淑子遺句集―……白岩文衛…(71)
「コース」……柳楽鶴丸選…(72)
一路集「夢」……岩田美代選…(72)
「竹」……古谷節夫選…(73)
初歩教室……本田恵二朗…(74)
柳界展望……(76)
第19回路郎忌本社七月句会……(77)
各地柳壇（佳句地10選／石垣花子）……(86)
編集後記……薫風・酔々・鬼遊・史好…(97)

座右の句

振り向くに長すぎはせぬ鶴の首　（薫　風）

私の句

台風にへちま辛抱し通した　山根いつを

と言い、率先、花笠に揃いの浴衣、赤襷に腰巻、白足袋のねぶた衣装で群舞する老若男女の中に飛び込み、夢中で踊りまくったネプタ馬鹿の一人で面目躍如たらしめた。

ところでこの文中には「ねぶた」と「ねぷた」の二つがあるが、これは青森が「ねぶた」弘前が「ねぷた」に固執しているためである。第三者にはまことにくだらない小事ではあるが、そこはその津軽のじょっぱり（意地っぱり）

頑の生まれは津軽十万石

で、両者は今尚、綱引きのままである。弘前ねぷたは「進軍」のねぷたといわれ

進軍のねぷたらんらん燃えに燃え

で、運行も囃子も勇壮。青森ねぶたは

凱旋のねぶた絢爛競い合い

のとおり「凱旋」のねぶたで華麗。

かくてこの間、津軽衆は年に一度の〝地上最大のショー〟に踊る者、見る者共々、一挙にエネルギーを爆発させ

海は漆黒はしる華麗なねぶたの灯

と、最後の圧巻、海上運航で幕をとじるがそのときねぷたの背面の美人には

ねぷたのうしろすでに秋風

が吹く。こうして津軽の短い夏は、あっという間に過ぎ、月おくれのお盆がくるとリンゴが色づき始め、十和田湖の紅葉が終われば又、長い長い白魔の冬がやってくるのである。

西尾栞選

岡山市　時末一灯

刑のごと渡る深夜の歩道橋
健康にまさる幻追っていた
コマーシャルソングの方を購うている
銀婚式最優秀助演賞
長期予報さりげなくまた裏切れり
ため息もついて確かに生きている
庭の土わたしの土に芽ぶくもの

倉敷市　野田素身郎

スプリンクラー雀がおりてくる日照り
待つことにも馴れて通院一ヵ月
なによりのもてなし花壇の花を切り
酒の席だがそこまでは許されぬ
数学ができ確率を重んじる
癒えることはない母の寝息へ二時がなる
会ったのはさる日さる時さる所

岸和田市　高橋操子

ガラス食器の色へ涼しさ盛ってみる
両の手で追うな倖せ逃げるから
生きている感激謎がまた解ける
堪能をすれば涼しい夏の風
やまいには負けてはならぬ筆をもつ
喜寿米寿へ夢をつないで老い楽し

奈良県　香川酔々

山彦が戻る他人の声をして
偶然に拾ったものに柿の種
肩叩く刺客が不意にやってくる
信玄袋がすこし湿って母の倉
内閣がどう変わろうと鳶の笛
周五郎好きで全集・単行本

八尾市　高杉鬼遊

八月の日記と重く生きのびる

原稿紙買うかっこうはよろしいが
えらいこと言うてしもうて寝つかれず
下町の市場に売ってない鰯
アサヒマチ一間間口で酒を売り
昭和一桁出されたものはみんな食い

松原市　谷垣史好

貝割菜なぜ逞しく生まれこぬ
二階から見る葬式の喜劇めく
糟糠の妻と男が思うだけ
軍艦マーチも場末暮らしが身について
三つ目の辻で迷いが深くなる
幸福な視野を横切る黒い猫

桜井市　岩本雀踊子

目覚しのネジは妻が握ってる
千羽鶴一羽帰らぬ原爆忌
士族という表札今もある故郷
雑踏が好きな遊牧民がいる都会
対岸の虹がきれいな渡し舟
悲しみの解る男の風車

大阪市　小出智子

つりがね草咲くふる里は捨てられぬ
歳月やひとりで歩く京もよし
砂糖壺やさしい妻をこころざす
アイスクリームが言い訳をしてくれる
それも言うなら親が元気でいるうちに
お隣のことはいわない定年後

米子市　八木千代

兄の闇父の闇へと歩き出す
絵の奥のなみだが足を釘付ける
糸ぐるま逆に廻せるものならば
火の彩に紡ぐと止まる糸車
わがマーチ短音階もありぬべし
ひとり暮しの掟の線を太く引く

松原市　玉置重人

大ジョッキ子のボーナスにおごられる
離れればあんなにきれい都会の灯
人格はとっくに捨てているラッシュ
かりそめの平和煙はまっすぐに
ドクターストップビールが冷えてます
妻だけは味方の筈の四面楚歌

伊丹市　樫谷寿馬

楢山のカラスは人の声で鳴く
楢山に坐ると横に妻がいた
楢山へ確実に着く宅急便
楢山へ目覚し時計持ってゆく
楢山に在った麻薬と黒眼鏡
楢山行最後の夢にとっておく

岡山県　嘉数兆代賀

曇りない鏡に約束ごとがある
あの時の悔蔑心の桶として
も一人のわたしから来る果し状
見栄捨てた日から素直な絵が描ける

税務署でドアーの軽さに戸惑いぬ
雑草でよし雑草の夢をもち
下関市　国弘半休門

慈悲もろうて還らぬ旅へ招かれる
孫の手も放れて弥陀の手にすがり
几帳面な方だが年はあらそえん
正直な癖して本当をよう言わず
両輪の一課と二課で軋り合い
黒幕に黒子役者は七変化
大阪市　川口弘生

赤ちゃんの純な瞳に見透され
満員車百の心が揺れている
筍を掘りにお出でと過疎便り
親の夢娘の夢の婿えらび
逆コース突き当られる事多し
晩年の夢になかった神経痛
和歌山市　西山幸

自己暗示かけ今日の日へ立ち向かう
ひとり塗るぬり絵くすんだ色ばかり
買い被られて嘘が大きくなってくる
人の裏見える眼鏡も併せ持つ
負けておく勇気が深い皺にある
自画像もおんな独りの我を通す
今治市　越智一水

人生の旅雲になり風になり
百姓も小犬も走る梅雨の空
共稼ぎだろうか風鈴だけが鳴り
夕立が蟻の団結かき乱し
黒光りしてみ仏はありがたい
身のこなし女らしさを引き立てる
鳥取県　川崎秋女

ひとり旅仁王のやさしい瞳に出合う
やさしさがほしくて故郷へ切符買う
帯低う結んで今日から姑となる
底抜けに明るい女がくれた花
弱虫を装う愛がほしいから
思考ゼロで矢印ばかり歩く
大阪市　中川滋雀

雨ニモマケズ心豊かな靴である
シャボン玉消えぬ思いを追うばかり
ハーモニカ胸を焦がした譜をぬくめ
お祝いを届けに軽い朝の風
人形の吐息が熱いガラス越し
キッチンと言うには遠い時代色
松江市　小林孤呂二

加減乗除までの父でも父が好き
今日を伝えるひとつひとつを書き記す
贅沢といえるラインは妻がひく
おんなが主役わらい袋を身につける
ベンチウォーマー窓ぎわに掛け声もせず
父の日を黙っていつもの刻に出る
島根県　小砂白汀

朝霧投網ひろがる湖の彩
冗談ととられそうなりひっこめる
良心も誇りも忘れた狂い咲き
氷壁のザイルへ五人ぶら下がり
生兵法花芽も斬って自若たり
一人佇つ墓地に降る雨秋の雨

米子市　小西雄々

喪の帯へ涙はすぐに乾かない
主導権やがては奪う嫁がくる
外車には道ゆずります国産車
本心は寄付の嫌いな小糠雨
スタイルは褒めず帯の柄を褒め
娘の婿を五百羅漢から探す

京都市　都倉求芽

働きすぎた訳ではないが扁平足
展望のきかない頂上だった汗
結び目へ女の指がみな動く
はしなくも自分の値段知った事故
仁王さん門閉まってもまだ威張り
大仏の大きさだけを説くガイド

島根県　堀江正朗

淋しさを見せまいとする脱線か
往診を頼んだ日にも腹は減り
時代の差耳を疑いたくもなり
指先に触れた温みを信じたい
もう馴れて音ほどひたい痛くない
口下手な僕でもお喋りしたいとき

島根県　堀江芳子

青写真年は数えぬことにする
ヤンハァトナァー唄えば踊りだす夫と
糸継いで継いでわたしを縫っていく
だから恐いんだよと噂に教えられ
回覧板カレーくんくん匂うてき
一合でこんな寝息のでる平和

吹田市　藤村〆女

梅雨しとど身の上話長くなり
愚痴聞いて欲しいコーヒー濃く入れる
浜木綿の白さにささやく海の恋
角砂糖ゆっくり沈みささやきぬ
京言葉とてもきれいなひとに会う
やりくりは子に覗かせぬ母の独楽

堺市　高橋千万子

吸いだめをしたいみどりに深呼吸
票集めにも職業の袈裟をかけ
姉さんと違うつとめの眉を描き
こだわっていないと刺のある返事
ぬいぐるみ犬も汚れてとしをとり
かんしゃく玉破裂受話器でつつがなし

岸和田市　植山武助

昔取った杵柄ステップふむ若さ
後悔のない風船をふくらます
賑やかな人に魅かれて行く無口

おねえちゃんがまたまたママの役をする
阪神が勝った日にする訪問記
私の時間を素顔で逢いに行く

大阪市　津守柳伸

フィナーレを飾る微笑に男棲む
飲み放題性は悲しい二日酔い
健康の自信が今日の自己暗示
むき出しの妬心が愛を過去にする
目標をつらぬくまでの他人舟
鍵あけて待つときれいな月あかり

和歌山市　浦野和子

下田にて

紫陽花とお吉の一生重ならぬ
地唄舞決めるはん女の帯の位置
正論を通し三角波に逢う
弁解をするから噂いぶり出す
防波堤貴方の胸で眠りたや
本人は真空地帯に居る噂

大阪市　西出楓楽

ありきたりの女に続く細い道
コーヒーの話題にしている更年期
雨降ってわたしの午後にしてくれる
新緑の中を歩くと風になる
砦くずす如くに預金解約す
熟年の坂はしがらみ引きずって

七尾市　松高秀峰

人生の停電ですと手術台
笑わせて泣かせて芸の一人前
実印を押せば便箋価値が出る
印相の実印買ってから不運
父の日の父句会あり碁会あり
ああそうかそうかで養子と間違われ

米子市　政岡日枝子

置きざりにされてる棚の当りくじ
本心が破れた風呂敷からのぞく
少女のカンするどくなってた梅雨の咳
つながりの輪から抜けてく楢山よ
やがて楢山誕生石は持っていく
傷ふたたび繕う針に耳がない

吹田市　西川景子

沈む陽に男の厚い胸をみる
接着剤持ってきましたお菊さん
入道雲ジェットコースター受けとめる
えらそうに言えばこわがるかと思い
男好きする顔だちで黒ごのみ
逃げ水を追う失恋づいた靴

諫早市　原田明春

大臣を操れる紐を造らんか
婚姻届に処女と書ける欄がほし
新団地満艦飾の五月晴れ
変る世に変らぬ妻の温かみ
野次馬に消防士が指図され

酔ってなどいません他人の靴をはき
大阪市　江城修史

親ばなれ子ばなれ別れ住む運命
共稼ぎおなじ心を温め合い
一期一会記憶の中の心の灯
主義ひとつ流転の過去が生きている
セールスの苦労しみじみ昨日今日
楯となり女の匂い捨てた妻
富田林市　岩田美代

友だちも私もまじない信じてる
相槌を打つ所詮どうにもならぬ事
夏の雲とんぼ見つけた日の安堵
古い女で横坐りしか知らぬ
食欲があり雑音には馴れている
陽にかざす摑みそこねた手のひらよ
八尾市　高橋夕花

点滴の夫の線が細すぎる
病床の夫にきかす子守唄
このままに朽ちてはならぬ葱きざむ
病院の坂をのぼると灯が点り
約束をかなえてくれた千羽鶴
一枚の絵を書き終る梅雨の中
八尾市　納糸葉

世渡りのそれは上手な苺皿
足の裏主役になった事がない
枯野行く母の袂は風ばかり
恍惚の血の濃さからは逃げられぬ
時々は記憶の戻る桜餅
母よ母よ昔話から出ておくれ
大阪市　天正千梢

ボールペン答安易に求めすぎ
波の音母の誤算のひとり言
真実を綴れば乱れる筆の先
上村松園姉さま遊びのらちを越え
ご照覧あれ吾は不動にひれ臥せり
しあわせは近くにあったお豆腐屋
堺市　大道美乙女

病床で嫁を見直す看護の手
嫁もろてだんだん他人めく息子
決断へこころがゆれる丸木橋
脇役へ送る拍手は惜しまない
原色が褪せて男の背なが冷え
子守唄男つぶやく飯場の灯
島根県　錦織文子

影法師お前も少うし曲りかけ
亡母の忌へ母を泣かせた顔が寄り
戸をくれば花の女人か水芭蕉
きっぱりと未練を捨てた花椿
春愁や花は音なく散るものぞ
葉桜や後姿にある未練
米子市　菅井とも子

ことわりの電話コードが手にからみ

松園のモデルが見たい遺作展
貧しくて貧しいことが言いだせず
機関銃の様に帰省の娘はしゃべり
亡母の帯しめて出番を待っている
父母の墓冷たい風に撫でさせぬ

米子市　野坂なみ

安らぎは枕枕の子の寝顔
枕木もれんげ菜の花恋しがる
指貫が一番似合う母の指
箸の先の軽さに咽ぶ亡母の骨
パパ欠けた綱引だから負けとなり
末期の水ひとつの罪が昇華され

高知県　松岡三吉

百姓を継ぐ子一番やさしい子
北向きの枕にもなる船の旅
鉢の水だけは忘れぬ物忘れ
笑ったら目のないお方親しまれ
別居する親のリズムと子のリズム
女三人寄れば阿呆なことを言う

岡山市　花田たけ志

やり直しきかぬドラマは神が書き
ヒーローは私と決めるドラマあり
ひとりには周りがさせぬお人柄
魂胆がある水割りの水加減
人柄はよいがとその他は悟れかし
影絵から気まずい憶測してしまい

米子市　石垣花子

網たぐる腕に見とれる鰯雲
スピードに酔う若者が散りいそぎ
藍がめを守る十指も藍に染み
園遊会人の背見て来た袋帯
一人っ娘巣の真中へ置いておこ

米子市　林瑞枝

ユダの髭ほどの噂が後を引く
山積みの本の谷間で唖となる
ドレミファを唱う椅子なら引き寄せる
バックミラーに乾いた心見抜かれる
人の落ち目に少うし派手な社長印

米子市　増田竹馬

退院の今日大の字に青畳
美しく乱れて本心打診する
本心を酒が言わせたミステーク
踏台を老妻が押えて棚を吊る
母だけが知ってるわたしの背のアザ

米子市　桑原伊都

ため池へ平和みつけた水すまし
記念樹と共に我が家の歴史のび
土地の無い貧しさ山がけずられる
父と子の夢でふくらむ鯉のぼり
少女たちよ明日の空はきっとブルー

米子市　青戸田鶴

いさぎよく引いて花道などいらぬ

島紬織って本土をまだ知らず
貧しさをぶっつけあって今日も暮れ
ノスタルジア松園の画に佇ち尽す
アイドルへ少女一途につっ走る
米子市　雑賀美世

一燈を守って積木くずせない
孫みんな少女でわが家美しい
宝石も知らずに死んだ母の指
粉ひいた昔もあった老母の臼
いつの間に父へきびしい少女の瞳
米子市　田中亜弥

住みついた蛙が母の声でなく
かくれんぼ鬼は目ざとく指をさす
手話の指母との距離が近くなる
父の墓母の墓へと花を植え
夕暮れの海はきびしい顔になり
米子市　寺沢みど里

水切りに二度のいのちを貰う花
落書きの絵にそれなりの自尊心
タイムカプセル埋めて記念日温める
テーブルの花が貧しさカバーする
爪跡を残して津波振り向かず
岸和田市　福浦勝晴

スランプに机の位置を替えてみる
サラ金が無かったころの一六屋
豪勢に騒いでヒッソリ胃が痛み
中曽根もおれもおんなじ縞のシャツ
声のないラストシーンに泣かされる
岸和田市　島崎冨志子

女づれ食べてしゃべって旅終る
無学でも母は心でするしつけ
空梅雨に庭のアジサイ化けられず
不器用に生きたが借りのない人生
サラ金の悲劇紙面のきのう今日
岸和田市　古野ひで

小走りでついて来る妻ほっとけぬ
素晴らしい笑顔の嫁のお味噌汁
亡母の齢越したが及ばぬ事許り
相槌にうっかりのった日の不覚
雨だれにひとりをかこつ夜の底
岸和田市　原さよ子

反省の自分を悔いる夜が更ける
子育てのあじさいめいた泣き笑い
呼び合って聞える距離に孫らいる
耕耘機の土の匂いを風運ぶ
おしめ取る手つきも巧み三人目
岸和田市　福島せつ子

み仏の加護へ感謝の日々を生き
今日も無事唄口ずさむ終い風呂
母の会独自のポーズでファッションショー
あの人もこの人もよし老いの日々
ふる里の面影消えて家が建ち

授戒を受けて

岸和田市　清野こう

礼拝の足の痛さに泣く三日
仏壇の新調慶ぶ生き仏
不用意に放った言葉で悔いを抱き
宝くじもしやもしやと買い続け
嫁に泣く話に感謝する吾が身

岸和田市　狭間希久志

寝そべってジャワの日食見てる幸
今聞いて又も聞いてる酔っぱらい
堂々と酔って寝ている粗大ゴミ
噂など妻が消してる耳かきで
園遊会よくぞこれまで我慢した

岸和田市　芳地狸村

優しきが仏の十指にあふれている
水郷の昔のままを自慢する
逆境を支えてくれた易の本
愛の血を見知らぬ人にうけて生き
想い出の符号が残る古手帳

和歌山市　若宮武雄

スペアタイヤよあなたは目立ってはならぬ
今の事責めず嗤わず石仏
音のない闇で怯えている邪念
一癖のまっすぐ生きる意地がある
フォードアに替えておっとりする主張

和歌山市　堀端三男

浮くような世辞聞かされて失語症
人形の箱には鍵をかけず置く
投函の音に決意を促され
底辺の汗が人柄丸くする
喪の帯を解けば遺産を考える

和歌山市　垂井千寿子

真相はダルマの片目が知っている
晩年を似た者夫婦にしてくれる
人の癖捜す一癖持っている
病院の待合室で聞く手相
ロボットになって波乱を乗り越える

和歌山市　福本英子

しおらしい秘密に妻の体重計
善人の笑顔のままで店じまい
遠ざかる亡夫呼び戻す七回忌
花の寺日照りつづきの墓洗う
老い二人それこれあれで用を足し

和歌山市　松原寿子

振り向けば訣れの闇が迫るから
抱擁のなかで許せぬ線がある
人形の白い掌にあるさだめかな
神様も素顔の裏で恋をする
一本にはならない愛の糸ぐるま

和歌山市　内芝登志代

吉日の雨へ巧みな褒め言葉
定まらぬ心へ雨が降りしきる

草花に語りかけてる老いひとり
積み荷する活気へ映える大夕焼
禁煙の自信がついた青い空
和歌山市　細川稚代

欠席の返事へ波紋呼ぶ身内
御近所の様にはいかぬ事もあり
ぎりぎりの家計がきしむ慶弔費
いっときの憂さは流れにそうて捨て
雨傘へ女忘れぬ色をより
和歌山県　天満三千代

叱らない母の笑顔に責められる
歳月に小さな罪はきえていた
音たてて小銭が入る貯金箱
蚊一匹詮方なくて老いと居る
山の児に海を悪魔にした津波
松江市　恒松叮紅

充ち足りた暮らしを襲う神経痛
長命な家系羨む煙草盆
焚火して背を向けている仕掛人
贅沢な暮らしに馴れた不感症
ひらめきが蛍光燈に似て老化
松江市　柳楽鶴丸

寮生の中にE・T型もいる
ロボットにせめてレディーの名前つけ
哀しく聞える日もある風のうた
美人の不器用はカバーされ
スターよサラ金へ笑顔売ったのか
松江市　舟木与根一

小癪にも孫の鼾は育ち過ぎ
木偶人形ロボットらしい動きする
片道の切符も医者は売りにくる
過去帳の位で寺は修理され
転作のあたりへ蛍帰ってくる
松江市　梅本登美也

さまざまな思想で揺らぐ九段坂
ライバルをやっと分析した手帖
OKと答えスカートひるがえし
笑ったり泣いたり空も演技する
これという役も付かない儘枯れる
松江市　竹内寿美子

華やかに花片が散る兵の墓
コンパスのまるに親子が居る暮らし
錦着て故郷を恋うてる土ふまず
笑うとも泣くとも見える埴輪の目
華やかな笑顔をつくる涙壺
大阪市　西森花村

目分量で花屋も負けとくかすみ草
投票日握手した手と名が違い
小遣いの秘密は妻も触れずおく
乳児院エンゼルみたいな足の裏
阿呆かいな我が生涯を振り返り
大阪市　河井庸佑

皮肉だと知ってわからぬ素振り見せ
したただけの事はあったと悔いもなし
立場上言うたひとことひっかかる
お互いに傷には触れぬ思いやり
一線を画して気持安まらず

大阪市　神夏磯　道子

紫陽花になってあなたを欺したい
心経をあげるいっとき無心なり
ひた走り丸みを帯びて来たタイヤ
焦茶色似合ってくるまで焦茶着る
標的にされて横へ曲れない

大阪市　本間　満津子

遠まわりだけどこの道好きな道
終幕の主役になるとき慌てまい
ばあちゃんの物差しはまだくじら尺
老けてゆくにぶい痛みを抱いている
風になに聞いたか水面騒ぎだし

大阪市　黒田　真砂

騙されてだまして夫婦坂登る
合掌をすれば御仏の慈悲の中
父の日の父の背に見る孤独感
人を恋う独りの夜の小ジョッキ
熟年と言われて拭う春鏡

大阪市　藤田　頂留子

雲の都合注文どおりにゆかぬ梅雨
浅学のペン消しゴムにささえられ
昔なら起りそもない事故の記事
ものまねの鸚鵡半分あきらめて
薬代はらわないのに残らない

桜井市　河合　茂雄

順番に嫁いでほしい親の夢
どの花も人に好かれる色で咲き
冗談で泣いても女救われる
鼾かく同士は先に寝るが勝
勢をつけるとラインから外れ

大阪市　那須鎮　彦

賢明な父でデッカイ耳を持つ
父よりも上の視野持つ肩車
また一つ妻に重ねるうまい嘘
俺の血を継いだ息子のバカ笑い
平凡に生きて身近に友が居る

大阪市　横地　雅風

受診待ちだんだん長くなる余生
徴税課がっぷりもらったボーナス日
見下ろされ無礼と言えぬビル林
タレントが格を下げてるコマーシャル
世界中たった一つの我が家庭

大阪市　柳原　静香

六十路坂どんどん転げてゆく怖さ
病気勝ち他人の咲かせた花を買う
みどりの風に憧れて病んでいる
年金へ大きな財布買うてくれ

聴こえない母に払わす電話料

大阪市　北　勝美

大声で喋っているのも企みか
あじさいの花を嫌った律義者
俊徳丸歩いた道も露地の裏
高安山朝日気になる東窓
好き嫌いなくてよかった同居の膳

大阪市　欄　蘭

我ながら方向音痴の地下出口
攻勢に転じ心に余裕出来
人生はこうもありたいホームラン
洗濯狭みでよかった七階から落とし
賽銭に一円玉を残しとき

大阪市　大野武太

病院の椅子で辛抱あたためる
病状をいたわりおうてる長廊下
寝る前の一錠妻に指図され
自重して九時に消灯する日課
その中のひとつだけ読む週刊誌

大阪市　橋元美恵

鯉のぼり恐い風には恐い顔
たまらなく抱かれたくって海へ行く
亡父の墓かなわぬことを一ついう
振り向かす罪の匂いの黒いバラ
絵の花に夢でも蝶は止らない

大阪市　山根いつを

早起の母頼られて頼られて
陸路にも大波小波打ち返し
舞う蝶に一日なって乱れたい
雨ななめ妻子の肩がぬれそうで
子の末に虹が見せたい見たい夢

大阪市　杉本智慧子

藍染めの浴衣しっとりと手に馴染み
髪染めて私一つの秘密持つ
夏山のプランに加えるランプ小屋
カイツブリ八丁もぐり御愛嬌
金環食見事決まった椰子の空（六月十一日）

大阪市　中西兼治郎

待ち合せわざと遅れて行く自信
新婚の愛情弁当箱へつめ
誘惑に勝ってわびしい夜の闇
地下足袋を脱ぎ晩酌で今日終る
ちぐはぐの暮しが離婚のはめになり

大阪市　長谷川春蘭

酒の口みんなしゃべった腹の底
知恵遅れ愛の絆をもろに受け
ホステスの昼の素顔が素顔なり
熟年が過去の足跡怖く見る
靴の紐過去型となる語り草

大阪市　岡田ふみ

良い季節長女も次女も旅に出る
電話ベルとったら金を買わないか

古稀の賀に息子がくれた志摩の旅
和田金で食べて空しい貧乏性
我が家程良いとこはなし腰伸ばす

大阪市　鈴木節子

亡母の針箱にしつけ糸ばかり
冥土へ着いたと便りまだ来ない
冥土から父が呼んだか死に急ぎ
言い過ぎはなかった亡母の糸ぐるま
あかね雲反省の色鮮やかに

大阪市　鍛原千里

三角が四角になっても好きは好き
雨が止んだら私だけの旅に出る
子育てもまあまあでしたとフルムーン
我が家にも線一本引く日が近くなる
指先でつまんだ愛が重くなる

島根県　西村早苗

勝った夜の不安独りの灯におびえ
解禁のまぐれかビクに鮎の数
ゆきずりの別れ上りと下り線
夏の風邪ともかく旅の仕度する
天引きの貯金にすがる気が動き

島根県　榊原秀子

少しずつ枇杷熟れてゆく昨日今日
イメージを変えた女のクラス会
小抽斗の鹿の子丸髷一度結うたきり
そのわけはいわずだまって引き下がる
リラ冷えを何を羽織ろう独り言

島根県　大森孝華

四面楚歌裏目か人生見失い
裏切りへ心の窓は閉じたまま
もらい泣き千両役者の汗光る
茶柱へ嬉しい誘いの電話来る
ワンピース旅の心に派手を選る

島根県　栂みどり

花を描く心は花のつゆとなる
下駄の音ならして旅のみやげ買う
夏祭り子等のゆかたの揚おろす
雨に泣く子等へ千代紙おりながら
永眠の父の冷たき髭おとす（養子の父死す）

島根県　岸本輝水

不沈空母が軍艦マーチで迎えられ
使用ずみの核燃料に似た社長
何回忌お寺手落ちのない知らせ
犯罪がかけた保険の桁はずれ
桃一つ水子地蔵の石の上

島根県　松本はるみ

橋のない川は孤独を問いつめる
激論の果ての夕日は赫すぎて
汗も涙もただこれだけの土と家
ふつふつと想う事のみ夏の雲
幼な子のこの手がなにをしでかすか

島根県　木村はじめ

適マーク命の保障などはせぬ
コンマ以下卑下して七十五となりぬ
栄転も左遷も同じ汽車の窓
サミットで亦カラフルな言葉撰る
アセアンのつけは庶民に回される

島根県　松本文子

賭けてみるあしたあしたはまだあした
こだまするだけの夫婦は長生きで
税金の額に眼鏡かけなおす
金下ろすアバラ骨一本折れる音
又それを言う飲みすぎた時のぐち

倉吉市　奥谷弘朗

盃の底に菩薩と夜叉が住み
鼻声の女の罠が見通せず
よく回る舌三寸に丸められ
喝采の無い花道で夢がさめ
ペチャクチャと舌が回ると手がお留守

倉吉市　渡辺菩句

僕の貌した退屈が書架にいる
コースから外れたコースに石仏
過去形の冗談で見送ってくれる
一匹の鬼で隙見せてる月夜
ピラニアの貌が孤独の底にいる

倉吉市　渡辺独歩

七色の光の中にある吹矢
背を向ける造花は吃度狐いろ
新しいママがだんだん好きになる
植木屋の鋏は不況の音がせぬ
追うすべも無い八月とまた出会う

倉吉市　野中御前

ひょっとこの面で通った花畑
エンストはおこせぬ冬の男坂
首の無い水子地蔵へ花吹雪
点滴をじっと見つめる命の灯
窓際の席で世間が見えてくる

竹原市　小島蘭幸

子よ伸びろひまわりの種蒔いておく
明日がある姉妹げんかのすさまじさ
俺のボーナスもう銀行も来てくれぬ
蛍飛ぶ義理人情に厚き里
蛍飛ぶ女の熱き眼を思う

竹原市　森井菁居

いざという時に無口が頼られる
逆説に真理を見つけ貝になる
おっとどっこい正論だから切り返す
火薬詰めかえて男の曲り角
路地裏に住む僕だけのお客さま

岡山市　川端柳子

寄ってくる犬にも一期一会の和
ふるさとの祭は遠し父母遠し
筆まめと言われ恋文見当らぬ
別れ難き出会い人形又増える

二通目が追いかけてくる嬉し泣き
岡山市　井上柳五郎

庭一杯咲かせた花を部屋に活け
忘れずにことしも藤棚野鳩の巣
式次第埋めるロボットバラをつけ
腕白に似ぬやさしさをちらり見せ
反骨の孫頼もしい目が温い
岡山県　直原七面山

気掛りは娘の仕草にある色気
上役を酒の肴に酔い潰れ
病名を知ってる妻の沈み勝ち
手を振って子は元気にも手術室
親は子を子は親を捨てる世の乱れ
岡山県　岩道博友

ドアホーン押せばロボットらしい声
退職の話に関節刻む音
古寺の住持の話も旅に組む
国訛り出して値引きに失敗す
薄化粧順応性と胸に秘め
岡山県　白岩文衛

日めくりを剝ぐときょうの日笑顔する
何べんおんなじことを言う父か
各論に入り三角な顔になる
銭の音好きだと言えばさげすまれ
学のあるお方ばかりではかどらぬ
鳥取市　小林由多香

若返る人事おちおちしておれず
満月にみにくいいくさのぞかれる
ふところ手した友情に救われる
俺の顔井戸の底からのぞかれる
北風に耐えて還らぬ島を待つ
鳥取市　森田熊生

本心の書ける日記はまだ白い
ネクタイをはずしてうまい酒がある
負け犬になるから歩幅まだ保つ
外野席責任のない手を上げる
裏の裏読んで眠たくなってくる
鳥取県　鈴木村諷子

情報過多机上たちまち紙津波
天かけよ親のない子の竹とんぼ
典範令よりも身近か軍歌集
わが村も住めば都と言えようか
異母兄姉ある運命に生れて来
鳥取県　清水一保

面影を一杯抱いて宵の星
愛は平等なものと子つばめ信じ
メロドラマ僕も主役の坐で眺め
一年中本場所という我が土俵
進化論私もロボット化へ進み
鳥取県　林露杖

久方の雨に紫陽花身を捩る
灼熱の恋の爛れか黒牡丹

歯に衣被せぬ男の風当り
どうしても言えぬ一言苦い酒
妻と居て語ることなしテレビみる

鳥取県　森田布堂

約束を果たせぬままの友の墓
手料理をほめぬ夫と添いとげる
父の日に父の味方は妻でした
長寿国養老院で実る恋
ロボットが故障つかんで離さない

京都市　松川杜的

上州路の旅に

裸同士で撮りあうもよし露天風呂
紫陽花の露さえ七色の色を持つ
合掌のその手へくちなしが匂う
ある日の日記箸紙が貼ってある
土の上歩いて白鳥絵にならず

京都市　山本規不風

躊躇いの背を押す夜の花時計
狐雨に紫陽花嫉妬の彩になる
ライバルの陽気な声を羨まず
花園の果てに男女の嘘の花
勝たされた女孤独を思い知る

兵庫県　遠山可住

金持ちの旅に混った日の誤算
忍者部隊には程遠い秘書の顔
団体をはずれてお地蔵さんに会い
遠い国となら穏やかに話しあえ
お地蔵さんも家族に入れてあるだんご

兵庫県　河原みのる

アセアンの旅で九条勉強し
エライさん空からこわごわ地震視る
気象異変うれしい雨を襟で受け
ホトトギス行革に似て声ばかり
冷凍の鰹青葉でごまかされ

兵庫県　辻文平

四人目の子が腹にいる葱坊主
働いて吾が身で学ぶにぎり飯
麦笛にむかしむかしが馳けてくる
蛍追う手首にからむ重い紅絹
父を恋い師を恋い中年の詩心

兵庫県　大江秋月

喜びを包んで帰る里がえり
朝飯がまずい阪神負けていた
溝掃除蟹を土産に持ち帰り
当らないものと決めても宝くじ
待っていた甲斐あり良縁訪れる

兵庫県　藤後実男

定年の歩幅へ社会の風厳し
合鍵を女も持っている鈴の音
家計簿の赤字忘れた化粧ビン

関係があるから一寸寄ってみた
緑又一つ消されてビルが建ち

兵庫県　中田白李

明日の台詞を考えている枕
初夏の芽が萌えると疼く里心
定退後叱ってくれる人がない
下積みのうっぷん晴らすかくし芸
指切りをしてから痛い指となる

藤井寺市　児島与呂志

俺惚れた女三人とも死んだ
パチンコも麻雀も負けるからしない
年寄りの匂いがすると妻は言う
他人の事言うまいだんだん老いになる
一歩出た時から老いを庇う杖

藤井寺市　吉岡美房

暈の月薄き香りの時を抱く
限界を知らずおんなにある演技
遊ぶ金ほしさが動機とはわびし
本心は余白の中に埋めてある
大輪の牡丹を仏から貰う

藤井寺市　中原比呂志

妻に似て別の角度は俺に似る
物わかり良い妻となる怖くなる
五線紙のオタマジャクシが我が人生
罪人も金持も出ぬ男すじ

コンパスの角度を変えて和を保つ

倉敷市　稲田豊作

屑かごへ恋をすて恋を捨て
祈っても鳩にはなれぬ烏の子
資本家とロボットの仲疑わず
窮すれば通じた過去は過去のもの
終焉の灯が遠く見え近く見え

倉敷市　藤井春日

新緑の匂いにむせぶ車椅子
目に青葉野鳥の恋の季節です
花活けて老母に楽しい日々がある
コップ酒自棄で飲んでる訳でなし
耳遠い老妻連れて気がつかれ

倉敷市　小幡里風

叩かれて西瓜は赤を主張する
いい事へ髪を染め髭をそり
あのひとを想うあじさい競い咲き
友の訃を聞く時計のねじをまく
親に叛く言葉を雨に叩かれる

八尾市　大路美幸

だんだんとぼけぬ恐さよ高齢化
午前十時の病院埋める高齢化
三代の子に背かれて高齢化
同情を拒むベレーの高齢化
高齢化朝はお粥にして元気

近頃の歩調へ四股を踏んで見る
掘り下げた話はしないコップ酒
諦めてしまうと軽くなるペダル
ひまわりの向く方に居る水着
ハーモニか上手に吹いて花言葉

八尾市　飯田悦郎

七月の健康診断をやめる話
ジョッキの泡流れる流れる宵月夜
七月の波に逆らうビキニ着る
経理課のクーラーだけがよく冷える
男とのプランは大きめな袋

八尾市　宮西弥生

洗礼を母子で受ける知恵おくれ
戦いの一日だった茶を立てる
生いたちをたどれば罪の橋が見え
約束をまたしてしまう別れ道
八月の広島の空ピカソ展

神戸市　中村ゆきを

心晴れぬ日に梅雨入りと気象台
もやもやの心灰皿受けとめる
お茶室へ衿と足袋との真白なる
ワイングラスで二人の詩を綴る夜
紅バラは死ぬ日のことは思わない

神戸市　山口美穂

田植唄とどきいなごの孵化つづく
ざくろ咲く息子はきっと帰らない
いじさい見てる心変りの悲しくて
観光バス着くと水車が回りだす
仲が良いのかたよりないのかいつもペア

寝屋川市　江口度

終戦の頃は団子も美味かった
鈍いのに一つ素早い女癖
鈍い子に大器晩成の夢を盛る
自惚れて見ると鏡も嘘をつく
夫の嘘馬鹿馬鹿しいが聞いてやる

寝屋川市　宮尾あいき

呼び捨てにしてとちょっぴり拗ねている
縁うすき女が亭主持った罰
つくばいに眠り雀の影うつる
夏は来ぬ唄へパーマが伸びている
青虫の執念くちなしへしがみつき

寝屋川市　柴田英壬子

せめて番犬エリートに育てまい
妻と女をプールサイドで考える
風鈴に慕情を呼んだ大文字
良縁を唯ただ待って三姉妹
母のハミング髪染めて来たらしい

寝屋川市　稲葉冬葉

宮仕え今日もロボットねじを巻く

和泉市　西岡洛酔

高速道文明の使者ひた走る
電話口それから冷汗油汗
寺巡りこんな歳かと振り返る
女はいいなあ何と涼しい服を着て

和泉市　岡井やすお

サミットで守るも攻むるもご一緒す
証拠にもされぬ証拠で悪あがき
私鉄なら運賃安くなお黒字
組長の犬は流石に暴れ犬
ビアガーデン夜景になってトイレ込む

出雲市　原独仙

おばあちゃんおしんの時間と孫が呼ぶ
天地(あめつち)の恵み八十年呼吸
息子もう他人娶って他人じみ
同情はしても立場が許さない
襟足の白さ位に傾かず

出雲市　板垣夢酔

水面へ血の一滴が散る花火
紙テープ別れの中に佇たされる
ほめられた料理を続け叱られる
日曜の早起き妻のいや味聞く
神様に突き放されて口ごもる

出雲市　吉岡きみえ

年金で回す小さな夫婦独楽
黒を着るおしゃれなカラス水かがみ
職場から糸屑つけてひるのめし
蝶々と日長を語る葱坊主
自堕落な女が夜目に化粧の濃き

出雲市　園山多賀子

空回りしながら夫婦にそつがない
娘につなぐ虹の架け橋穏せてくる
迂闊にもこけしが聞き耳立てていた
直線を撰れば楯山近くなる
思秋期の女の射程にある死角

出雲市　石倉芙佐子

涙腺を枯らして薊なおも咲く
葱坊主泣かせて泣いた遠い日々
組し易い女と見たか南風
旅人に別れがつらいバラ館
温もりが欲しくて肩へ止まる蝶

東大阪市　斉藤三十四

ボスとして昼と夜との顔をもち
童心にかえる男の顔素直
目くばせをして他人様で済み
生きるだけの小さな自信ならもつ
定退の今日は主役の床柱

東大阪市　竹中綾珠

言い負けても心に止めぬ年になり
やり込めても決して愉快になりません
肩書が取れると肩こり起こらない

お若いと言われ一瞬背を伸ばす
皺の数程過去に悔いを持つ
東大阪市　崎山美子

老舗の意地伝統は曲げられぬ
菊づくり生甲斐にして古稀近し
太陽が真上にあるという安堵
大穴をあてて人生狂わせる
約束を破る理由を考える
守口市　羽原静歩

ピアノ連弾積乱雲が透いて見え
神様の前で弱気になってくる
マンションの鍵持つ時の孤独かな
横顔がきびしい主役の昨日今日
神経痛句座に哀しき影法師
守口市　野呂右近

湯浴みして知る藍の香の肌ざわり
判らない方が良さそう余命表
老人の世界にもある落ちこぼれ
落韮漬け梅漬け女満ち足りる
一株を剪定御隠居めいて来る
西宮市　野呂鵜汀

ガラス越し語る仕ぐさに聞く仕ぐさ
常識を知らぬところが学者とか
立ち話他人の不倖をききたがり
良妻は昼寝へ音も立てず居る
寝返りをうって夜明けを待つ歳か
西宮市　林はつ絵

憶う絵に子鹿の群れと峰走る
良心の揺れかげろうのせいにする
母のピアノ音色にやはり狂いない
まどろみが終着駅の灯に覚めぬ
駅までのアドバイスなら持っている
西宮市　妹尾春江

大ジョッキ近頃妻がリードする
流行より銀髪に合う彩を着る
血圧へ約束ごとが多すぎる
血筋より女は愛にもろくなる
宝石箱にとっておきの嘘がある
富田林市　和田維久子

右足の負傷を業と思うまい
傷の事問うて主治医におどかされ
この傷は自業自得とさりげなく
同病を憐む傷のひとりごと
聞えない振りして女聞き上手
富田林市　中村優

絵馬堂の絵馬は孤独のまま眠る
悪友と折紙つきのコップ酒
風鈴の音色をかえた青い風
建前と本音で迷うアンケート
ひとテンポ遅い正義の立回り

唐津市　仁部四郎

また同じ話題実家の母と妻
はやり唄あの頃総理誰でした
見舞客時計の読めぬ人もあり
見舞客職場のウサを捨てていき
巻き添えの事故に本名うろたえる

唐津市　田口虹汀

手を触れりゃふんわり動く烏賊の肌
湯に浮かぶ菖蒲家には母がいる
止り木の鷹雑兵を振りむかず
類なき妻の背中を擦る日々
夕凪ぎの鯉は真直ぐ縦に寝る

唐津市　浜本義美

黒部立山能登北陸バスの旅

母となる黒部のダムはまだ眠り
倖せはいで湯の窓で陽を拝み
千里浜の汀へバスがよくはずみ
百万石の威信兼六園にみせ
観光も五日目バスで寝て通り

唐津市　浜本久仁於

焼物の町の帰りを湯にひたり（有田陶器市）
ひさびさに逢えばお若いことばかり
人間がいいので年をとりこぼし
からませた小指へ嘘のないあした
言いわけをすれば心の嘘になる

奈良県　村上春巳

赤い湯に首までつかり有馬だな
慰安会労使本音が少し漏れ
せんべいを焼く目で観光客見られ
幽霊の足跡税務署見逃がさず
野良犬にアスファルト道路焼けて来る

奈良県　森田カズエ

永久に使えますよとコマーシャル
花束を孫から受ける祝賀会
用意したビールが足らぬ祝賀会
宿命と悟り木魚は耐えている
敵味方かかわりなしの自動ドア

平田市　久家代仕男

0・01秒差です世界新
茶を淹れて微細に穿つ裏ばなし
怨念は川風となりいくさ原
菜の虫を潰す根気は祖母が持ち
ひらめきを持たぬおんなの竹箒

羽曳野市　塩満敏

嫁った娘の名前が生きてるクレジット
公約を見ればほれぼれするばかり
善人が枕へ軽くうそをつき
さりげなく銀行のカメラ追ってくる
十時です最敬礼の百貨店

大田市　藤田軒太楼

老練な運び熟年をほめ齢をほめ
逆境の友を明かるくして帰し
足並みの乱れライバルに感付かれ
野暮用の成程野暮用パイの席
この辺が妥当ひとまずけりをつけ

宝塚市　傍島静馬

プライドを捨てて肩の荷軽くする
いつ死んでもよいのがよく食いよく眠り
温泉横丁女房忘れた宿浴衣
狭心症いつまでつづくクスリ漬け
そりゃ困るこまると困った顔でない

松山市　谷真風

伊予柑一つ車窓に置いて青い海
人の訃やあの時あそこで会うた人
ベレー帽が似合わぬ男のベレー帽
痛風の痛さへ悪魔奴が嗤う
落ちたかと思う雀に羽根があり

豊中市　安藤寿美子

父を焼く火よ天までも立ち昇れ
想い出すのは逆ろうた事ばかり
夫婦の日課娘の家へ電話する
くちなしの白さに祈り深くする
紫陽花の青あざやかに南禅寺

宇部市　平田実男

爪染めてないホステスにちとひかれ
平和論爪を研いでることは伏せ
クレヨン画一色違う虹もあり
神主の子だけは受かって欲しい神
風見鶏ガラスの城ではばたけず

柳井市　弘津柳慶

つつじ満開妻頬笑んで墓の中
妻供養過去をたどれば限りなく
意地消えて悔悟だけが深くなり
背伸びしたまんま積木が崩れ出し
兄の死へしばし仏壇へ正座する

笠岡市　松本忠三

患者の質問的を得てやかましい
拝まれてどうにもならぬご同様
老人の戯言親身に聞いてやり
そのうちに厄介になる檀那寺
黙っていれば分らぬものを代理なり

堺市　藤井一二三

谷村京子ちゃん（五句）

馴れそめは黒い帽子がむすぶ縁
今朝もまた笑顔に逢える靴を履く
思いのままのクレパス躍る鯉のぼり
かりそめの父の笑顔を真似てみる
しのびよる別れへつらい指を折る

美祢市　安平次弘道

そう言えば兆しはあった結果論

勤勉か惰性か父の定期券
諸行無常金が頼りになりますか
明日解禁わたしを鮎が眠らせず
解禁日カメラに釣果のぞかれる

綾瀬市　大山と金

葬式も所詮他人事悔みまで
この顔もやがて梅干婆になる
春雨に濡れて泥水刎ねられる
決意したほどには意志が固くない
スタートは同じく裸や運不運

藤井寺市　吉岡美房

手みやげの不沈空母は大きすぎ
不幸だと思えば不幸掌の表裏
頭下げた分だけ当選そりかえる
異端者となりたくなくて旗を振る
傷心を癒す酒とは甘えてる

新宮市　川上渓水

肩書きがついて名刺を出し渋り
内緒だと初めに念をおす話
来てほしく無いのが早うに来て座り
例えばが上手で保険屋らしい人
落選のポスター笑顔の似合う人

海南市　牛尾緑良

そっくりの夫婦に老いてゆく絆
指切りの重さ少女は信じきる
噂から名前が消えてゆく老化
弁解を聞かされている赤電話
笑顔そえて酔醒めの水差し出され

仙台市　川村映輝

アメリカが軍艦マーチで煽ってる
孝行が逆さ子供に仕える世
酒煙草止めて八十歳に挑戦す
目出度くもあり目出度くもなし八十歳
肉プラス葱が美味しく食べさせる

玉野市　小谷仙山

親と子の会話茶の間にバラ開く
削られて削って丸い夫婦愛
山肌を削られ故郷を遠くする
心の目開いて昨日の敵許す
遮断機が憎いと思う負け戦さ

橿原市　岩井本蔭棒

忠義まだここでは言える泉岳寺
戦友よ哭くのか雨の九段坂
価値観を煮詰めて恋に突き当たり
賃上げのデモの帰りは自家用車
スイッチをひねれば巨人勝っている

大東市　土岐トク子

命日の亡父を慕って書留便
言えばソレ黙って胸をなでおろす
雑草のようで気弱なとこが好き

一日を幸せに生きて掌を合せ
ルンルンの気分に遠く居る私

町田市　竹内紫錆

乗る齢は過ぎたりジェットコースター
ソフトフレーム子も宮様のような齢
老体は無料庭園いま緑
言っとくが再発すれば即アウト
CMで入れ歯の物理教えられ

香川県　岡田拳法

報復力なくして日本被爆した
抑止には遠い気休め自衛隊
抑圧よさらば亡命ハイジャック
自由化も地元のためなら阻みます
気がつけば公僕民主主義を食い

高槻市　田崎あき子

マネキンの着ている素適な服を買う
空虚なる月日流れて一周忌
嫌な世の流れの底で貝になる
葉の裏で蛹は蝶の夢を見る
物忘れしても好きだと茗荷植え

枚方市　栗林光夫

あじさいの信号青から赤になり
鯉のぼり身をすり寄せるほどの風
同じことしたのにわたしだけ違反
縁かいなラッシュに肌の触れた女
右向けば左を向いた影法師

浜田市　佐々木裕

出世せぬ巡査ガリ版上手くなる
酒徳利利き手の方に置き替える
あじさいの七色悲しい色で果て
一筋の涙に九十九の不孝
社内報身内ばかりの自画自賛

境港市　細木歳栄

童心にかえるおかしさ旅仕度
定まらぬ心定める針を持ち
みだれ髪上げる二の腕ちらと見え
勢いに押され善人小さくいる
無芸だが何処でも眠れる術を持ち

河内長野市　井上喜酔

自動ドアー蠅も一緒について来る
子の名前消えて淋しい保険証
太陽が届かぬビルの冷暖房
人格が途端に落ちる嫌な酒
陽炎の傍でうっとり野の仏

高知県　赤川菊野

美しくみえて富士にもある起伏
望郷へ鳴子の音の鳴りやまず
足跡は波に消されて一人旅
十字路で迷いを持たぬ母の鈴
山茶花の唄が身にしむ一人酒

尼崎市　奥山美智子

愛という文字のころがる女坂
一本の曲がった釘を持てあます
独り住む耳にダイヤが光ってる
追憶へガラスの靴が欲しくなる
中年の夢は尽きない梅漬ける

松原市　北野久子

此の家で一人になった日を思う
孫来れば身振り手振りもババである
市場篭他所の暮しと比較する
そわそわと祖父は年金出しに行き
オープンが済んで客足気にかかり

羽咋市　三宅ろ亭

慣れすぎた暮し小波待っており
あま過ぎる義歯口中に弄ぶ
俗物視していて俗物化を憂い
あり過ぎる閑ゲートボールしても余り
粗大ゴミ扱いされていっそ楽

姫路市　大原葉香

之で赤字納得いかぬ満員車
素晴らしき沈黙守る星月夜
体重計増える不安の針動く
チクタクと音する時計僕に似る
舌出して貝の惰眠に日はまろし

浜田市　中川幸一

退屈という贅沢な欠伸する
バスアルトソプラノもあり猫の恋
男女平等ハイハイ寝床上げましょう
古ムーン各駅停車がよく似合う
神さまの昼寝に邪魔な鈴鳴らす

神戸市　仲どんたく

又逢おね言うて別れてそのまんま
あの頃はよう待たされたなと夫婦
美容機が氾濫している平和かな
お中元隣のベルの方が好き

唐津市　木塚素石

中曽根もあやかりたいよ原人気
目新らしアドバルーンも選挙戦
辛抱の足らぬ涙の勝負ごと
世のゆがみ人間の壁繕わず

唐津市　久保正敏

靴の音夫の酒の量で鳴る
赦すとは限らぬ片目でする合図
衣替え一足早い水羊羹
七転びどころか二度目転べない

東大阪市　奥山弥山人

メモが来て答弁俄然活気づき
生甲斐を個展にかける老いの意気
コマーシャル程ではないが効く試薬
信号も青青青のうれしい日

島根県　山根峰雪

全線をグリーンで七日のフルムーン
わが事は二の次人の世話ばかり
中三で母を追い抜く娘の背丈
犯人は無罪殺され損となる

羽曳野市　佐野白水

客はみな仏住職合掌す
麦畑眺めて昼にする飛鳥
瓢箪の苗庭の広さへもって来る
忠魂碑へ素通り出来ぬ日本人

島根県　藤原鈴江

騒音の中で孤独の譜にひたる
すりへった靴が知ってる遠い道
心だけ走り歩幅がついてこず
労働歌似合う腕あり足があり

豊中市　田中正坊

しつかさや楓の下の芭蕉像（山寺）
旅路より待つ人のない家路つく
亡き妻が賞でた紫陽花咲き誇る
夏が来るキャラバンシューズ出番だぞ

貝塚市　行天千代

待ちかねた春特急で駈け抜ける
沖縄へ行った息子に雨ばかり
ミニはいて風のいたずら慌てさせ
若き日の思い出ばなしはいい匂い

枚方市　稲葉星斗

解禁日点景となる渓の釣り
球根に土の深さも五月晴れ
失敗の苗の植替えあきらめず
ふるさとの味一番の麦茶のむ

交野市　山本テルミ

それぞれにしたいことする老夫婦
五月の写経わたしを顧みる
電柱はこわいうわさを聞いている
生活のリズムを乱す孫が来る

奈良県　宮川古都路

約状は男まかせの盲判
耳の穴おとぼけの垢つまみ出し
菜園に一雨欲しい土の色
プライバシー貰い涙はふすま越し

岸和田市　吉水照江

健康と幸せつくる老いの坂
養老院にボスがいたある画面
ポックリ寺へ誘われるままた参る
子離れのひまを埋めて主婦パート

岡山市　行吉照路

神仏男の慟哭知らぬ顔
負け犬の家族傷口なめ合って
男の血標的求め突っ走り
空カンは蹴るべしストレス消えるなら

自選集

大矢十郎

お役人天国お手盛り目に余る
日本へキッス教えたハリウッド
格言も親の意見も世に遅れ
集金へくわえ煙草が待てという
金出して見に行くプロの金儲け

野村太茂津

あくせくと生きて捉えた協和音
歓声の波に馴れてる幕があく
人波に煽られいつも愚を重ね
伊豆の湯にふやけて灰汁が抜けてくる
心まで患い言葉鋭い槍となり

山内静水

一日一善ただ格好だけの私
両の手を合せばお恥しい己れ
妻が座すから私が座す仏壇
持っては逝けぬお金の使い道
六十と七青春はまだ捨てぬ

藤井明朗

人災の油断平和の隙を突く
次は教育　切開手術いそがれる
幽霊も美し過ぎる玉三郎
若返り法に川柳の艶を説く
川柳のスタミナ妙薬も悪くなし

水粉千翁

雨宿り他生の縁を温め合い
今朝もまた初歩締め直す靴の紐
メンデルスゾーンへうなずく見栄を張り
もの足らぬ日々これでよしこれでよし
老いてよし夫婦は杖を磨き合い

金井文秋

運命をころころ変えて行く出合い
はげましを受ける立場になるひとり
いじめることの快感が遊びにも
かっこよさの為には銭を惜しまない
退職金ひとごとだから腹が立つ

やっと朝ゴキブリスタイルから脱し
入知恵が暴れ好ましくない人にされ
年回を寺も知らして来た葉書
広辞苑読めても書けぬ字へルーペ
想い出の女も白髪背も丸い

市場没食子

久々に見れば雑草花が咲き（退院）
退院後嫁には言わず拭き掃除
退院を知ったか電話又かかり
退院を近所又来て長話
冬春夏と退院何もせぬ内秋となり

新岡回天子

ボールペン嘘が上手に走りだす
善人の胴疼き出す梅雨はしり
サラ金の怖さは知らぬ方がよい
賽銭も投げずに長い掌を合わせ
一本もなくて散髪屋の得意

月原宵明

ロボットは入浴闘争などしない
思い出し笑いをさせるカバの顔
さて若菜　江夏　田渕になれるかや
商人の胸に勲章似合わない
服装の指定ディナーへ仮病する

大坂形水

決断は妻に委せて恙なし
鍵握る男ピエロの仮面着る
孝行の真似ごと階段に手すり附け
しだれ柳がみごと蛙を釣り上げた
飾り気がないからぞっこん惚れました

本田恵二朗

ひとり身で笑い袋をもて余す
フルムーン出来ぬひとり身さびしとも
片手だけ上げた別れは又逢う気
望遠で撮った女と宿で逢う
全盲の瞼にたしかな地図がある

黒川紫香

近づけば山藤うごく風があり
坂のぼる夫婦を風が押してくれ
物喜びしない女が遠くなる
月の影ふんで女は云い慕り
ゆっくりとお寺の鐘に従いてゆく

正本水客

まだそばに叱れるひとが居てくれる
腕組みは解かず盃伏せたまま
内職に凝る母ちゃんは大嫌い
段鹿の子お七へ江戸の夜が燃える
切かむろおぼろ月夜の文使い

若柳潮花

反核や子孫長久たらしめん
鞭ふってチーチーパッパ首にされ
縄のれん梁山伯となっている
背中にも目のある人で恐がられ
茶の好きな亡妻へ新茶を買ってくる

工藤甲吉

入院をのばさせ遠い句座で選る
付き添いの愁眉がひらくパン一つ
順調な病後にかるくでるジョーク
きょときょとと夢も生活の中を出ず
地方区は左派政党は右を選り

河村日満

紙風船みな翔びたがる参議院
公約がみんな熟れたら木が折れる
望郷よちまきの笹が鼻を刺す
かたつむり日照りつづきを石になる
三角を育てパートに風が抜け

尼緑之助

なかんずく紫式部むらさきに（城北菖蒲園にて）
佐渡にて
睡蓮はわれの化身よ誕生日（妙宣寺）
風と波男同士で来べき佐渡（尖閣湾）
天に星地に蛍地は仮の世か（相川大浦）

橘高薫風

浜田久米雄追悼川柳大会

日時 **昭和58年8月28日(日)** 11時開場

会場 国際観光ホテル烏城
岡山市駅前町1—3—10 岡山駅より徒歩5分

兼題 雑吟（岡山）大森風来子選
発展（鳥取）尾崎泰山選
窓（泉佐野）阿萬萬的選
妥協（広島）石原伯峯選
苦心（吉永）横山一声選
恵む（相生）中塚礎石選
教える（藤井寺）児島与呂志選
酒 謝選 行吉照路選

席題 なし

会費 各題雑吟共2句・12時締切
2千円（発表誌、記念品呈）

賞 三才に呈賞（出席者優先）

投句 500円（発表誌呈）
〒701-01 岡山市久米392—8
行吉照路あて
8月23日まで

※昼食は各自でお済ませ下さい

主催 川柳後楽吟社
後援 国鉄川柳人連盟

秀句鑑賞

―前月号から―

傍島静馬

―同人吟―

いつまでもロマンチストなくすり指

小出智子

指それぞれに持つ個性、一連の指の句楽しく拝見しました。

無理矢理に遠出をさせる万歩計

高杉鬼遊

万歩計を頼っていたばかりに余計に歩く羽目となった。

切札は一枚もない母の愛

遠山可住

言わば日常母の言動のどれもが母の切札だ。

化粧などいらぬ若さと健康美

高橋操子

いつまでも斯くありたいとおもう。

手術後の父おしゃべりになっている

小島蘭幸

こんなだったらもっと早く手術をすればよかった。

宮参りこの子をいくさにやるものか

羽原静歩

親御の気持がよくわかります。

弱虫へ殊更きつい風当り

野坂なみ

風は平等に吹いているのだが。

おべんちゃら麻薬のように効いてくる

香川酔々

うっとり夢心地で聞いている。

註文が無くても歌うバスガイド

西森花村

バスガイドに与えられたつとめだ。

フレッシュな気分漂う嫁がくる

内芝登志代

いつまでも初心を忘れないように。

合部屋の見舞客なく寝た素振り

坂部紀久子

病院ぐらしの長かった者には一応おばえがある。

新築へ祖母のタンスが落ち着かぬ

杉浦婦美子

骨董品のような祖母の大切なタンスである。

普段着で話せばなんでもない話

妹尾春江

よくわかっていながら、つい他所行きになるから話が固くなる。

幸せは喧嘩の出来る妻が居り

大江秋月

何歳になっても妻は有難い存在である。

咳一つぐらいじゃ妻は動かない

森脇善太

図太くなって近ごろは一ぺんぐらい呼んでも素直に立ちあがらない。他に、

喜びのおすそ分けなら遠慮せぬ　堀端三男
弱点に互いに触れず平和です　菅井とも子
笑っても泣いても一人長い道　赤川菊野
朝を出るときに男の顔になる　牛尾緑良
紫陽花の性持つ女に惑わされ　直原七面山

詩は川柳の
「コート」？
「ランジェリー」？

寿馬

川柳太平記 (63)

川柳の群像

吉川雉子郎

東野大八

吉川英治（本名英次）は明治二十五年八月一日、神奈川県久良岐郡中村根岸に生れた。阪井久良岐と同郷である。父は旧小田原藩士で直広、母イク。明治維新の武士廃業で零落。一家をあげて上京。雉子郎はろくに小学校にも通えず十八歳の年齢を偽り、横浜ドックの塗装工から活版工、行商、漆塗り職など二十余種の職業を転々とした。

兄の政広（異母兄）は、雉子郎十一歳の時に家出し行方知れず、家運没落を酒に紛らわせた父はアル中が昂じ、家計は貧窮の極。七人の子沢山で十二歳の長女は子守り、九歳の次女はおしるこやの下働きとなる

「売る物も質物もすべて食べ尽し、父の飲酒癖は昂じる一方で母は冬へ向って着るものまで剝れてしまった。家賃、酒屋、米屋はいうまでもなく、近所の店屋には何軒も小さい借金がたまってしまい、嘘のようだが、工場へ行くぼくの弁当箱に母は御飯を入れてくれない朝もあった。そんなとき、もちろん母も朝飯を食べていない。それでも働きに出るぼくには二銭銅貨一枚を託びるように握らせて出してくれる。ぼくはそれで焼芋を買い、半分は途々食べ、半分は昼食時の為に残しておいた。ほかの仲間の手前、何も食べずにうろついているのは、空腹を我慢している事よりもその時間が辛かった」（吉川英治〝忘れ残りの記〟）

―貧しさも挙句の果は笑いあり　雉子郎

「僕は同時代の日本人のなめたあらゆる経験を一身で行ってきた。ある意味において自分の青少年ほど惨胆たる苦悩にみちたものはなかったと思う。自分は強盗、強姦、殺人を除き同時代の日本人の行ったさまざまの一切を経験してきた。何回か絶望に打ちひしがれ幾度か遊侠の群れに身を投じ、太く短くと思ったかしれない」（半自叙伝）

このチンピラやくざに陥ろうとした少年英治をぎりぎりの線で救ったのは、持って生れた文才を活用した投書マニアの道だった。

「投書は十二歳ごろ、時事新報創刊の『少年』に短文が当選し銀メダルを貰ったのがやみつきで、金港堂の『少年界』『ハガキ文学』『女子文芸』『中学文壇』と手をのばし、しまいには『文庫』だの『明星』に迄詩や歌などを送った。（略）雅号でないと文学気分がわかず霞峰と名づけていた。投書にも霞峰をつかってやたらと出しまくったものであった。女子文芸や女学世界には女名前にした」

「明治38年十三歳の折夜店で表紙のとれた『芭蕉句抄』を五銭で買い、それを暗誦し句作に役立て二十歳頃まで身から離さず、休日に句会などに出はじめる。（略）俳句や川柳の会へ初めて出かけたが、川柳で雉子郎とつけたのは、焼野の雉子夜の鶴という古くさい

昔の言葉通り、母に対して自分も古いこどもでいようという気持からだ」(「忘れ残りの記」)

雉子郎の父が死んだのは大正七年三月。

―**男親死んで見せたのかも知れず**　雉子郎

母を失ったのは大正十年六月である。

「講談社等諸雑誌に応募した小説・童話等が七百円の賞金となったがすべて母の葬費となった」(「太陽」吉川英治特集号昭48)

―**世の中におふくろほどの不倖せ**　雉子郎

この敬慕一方ならぬ母を失った雉子郎は、大正十一年「東京毎夕新聞」に入社する。営業局長矢野錦浪の紹介である。この錦浪はきん坊の名で通る川柳人であった。

投書マニア時代独活居の柳号でいた彼が、正面切って雉子郎の名で柳界に登場したのは明治四十四年二月二十日付の「日本」柳壇で

―**桂庵に踏み倒される頬の痩け**　雉子郎

であった。剣花坊選である。桂庵とは口入れ屋の俗称で通る職業紹介所のことだが、この雉子郎なる投稿家に剣花坊は注目した。剣花坊好みの世長けた新川柳に惹かれた剣花坊は自ら雉子郎の住居を訪れ、若い雉子郎を感激させた。このことから雉子郎は柳樽寺川柳会の実力者としての川柳人となる。

剣花坊は「日本」柳壇の投句者を糾合して明治三十八年十一月柳誌「川柳」を創刊。同四十五年大正に年号が改まるや「大正川柳」と改題。柳樽寺は東京柳壇の一大拠点となった。川柳人雉子郎として川柳に最もみがきをかけ、あぶらの乗り切った時期はこの頃で、「大正川柳」の編集まで手伝っている。

この頃からの親友に川上三太郎がいた。「東京毎夕」の同僚であり、その上柳樽寺派の同人でもあったことによる。さらに三太郎はユーモア作家を志し、後の吉川英治たる雉子郎の天分を刺戟する悪友でもあった。この二人はかくして、吉原や十二階下の傾斜の巷に出没し「漸く遅き青春と遊蕩の気生ず」(「吉川英治自筆年鑑」)で、酒と女は三太郎がその本領を発揮しての兄貴分だったらしい。

しかし剣花坊が傾倒した好作家吉川雉子郎が川柳界からの訣別の時がきた。その転機は関東大震災とその後に勃湃として興った大衆文学の波濤の昂りであった。

雉子郎が「東京毎夕」に入社した頃おい社中には三上於菟吉、尾崎士郎、椋鳩十、岡鬼太郎、渋川玄耳、楠田敏郎、宮尾しげお等の後年名を成す作家や各芸術分野の数多の人材が溢れていた。また柳樽寺の本拠たる剣花坊宅では笹川臨風、倉田百三、松林桂月、小山内薫、木下杢太郎などと面接交友したことが後年の文豪吉川英治としての作家的生成に大きな影響力を発揮した。

「(川柳界からの訣別後も)川柳はその後も英治の体質としてのこり、吉川文学に色こく川柳は尾を引いているが、しかし川柳そのものは肯定しても川柳界にはあきたらなくなっていた。震災以降は川柳人二、三人以外を除いて疎遠となる。ただ震災にあった師の剣花坊を杉並馬橋に誘ったのは、先に高円寺に居を求めていた英治であったという。(略)しかし昭和三年になり英治は下落合に越し、五年末には芝公園に移りいくうち自然疎遠となり川柳界との交渉は全くなくなってしまった。」(「作家以前の吉川英治」城塚朋和)

「宮本武蔵」「新平家物語」等々数々の大作を世に残し「私本太平記」を最後に吉川英治は昭和三十七年九月死去。享年七〇。従三位勲一等に叙せられ晩年に文化勲章受章。

―きりぎりす半分啼いて風が吹き　雉子郎

―江戸は江戸京は京なる絵看板　〃

―死んでみた翌日はどんな道を行く　〃

―あめつちの中に我あり一人あり　〃

★次回は「**浅井五葉**」

誹風柳多留廿六篇研究（十二丁）

石田晋一・南　得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木　黄・多田　光
故岡田　甫

187　**あんころを引ッさけて来てもう出るな**

南＝『平凡社大辞典』によると「あんころ」は①餡転餅の略、餡をぬりつめた餅をいい、②泥土の上に転倒して全身泥まみれになることにもいう、とあって②の例に本句があげられている。

ぬかるみで泥まみれになった幼児を亀の子の様にひっ下げて、眉をしかめ、もう外へ出るなと叱っている。親の気持もよく汲みとれるし、なんとも気の毒な様な、またおかしみのある句。

ぬかるみのあんころ母ハ餅につき　五七・20

多田＝賛。現在の都会の子供は、あんころにもなれず、むしろかわいそうです。

岡田＝同。

188　**麦の後チずいきの中で又はしめ**

南＝麦畑での出合の句は、川柳には類句も多く、素朴、長閑か、そして微笑ましい恋の場面がさまざまに画かれている。

是からはどこですべいと麦をかり　七・42

案じられた次の出合場所は、広い葉が屋根になって覆い隠してくれる芋畠が恰好の地として選ばれ、そこで恋が続けられるとのこと。

鈴木＝賛。麦と芋との時期的なズレについて知らないが、そんな所がこの句の面白い所なのでしょうか。

多田＝賛。麦は五月ごろ、里いもは九月ごろ。

岡田＝同。

189　**おめかけの威勢ハ股て風を切り**

南＝「肩で風を切る」という語がある。本句「股で風を切り」は、お妾なれば肩でなく股でと置きかえて洒落た、只それまでの句。

御妾のいきほひ股で風をきり　拾二・23

の先行句がある。

多田＝賛。
岡田＝同。

190　**三階て姫君肌をぬいて居る**

南＝「三階」は、芝居小屋における三階で、通常この三階に楽屋があった。

そこで句解だが、楽屋の三階でお姫様姿の役者が、大肌ぬぎになっているというもの。

もう少し詳しく説明すると、普通女形は中二階であり、三階は立役の楽屋で、『川柳江戸歌舞伎』に於て、西原柳雨翁が説かれたように、昔の女形は平常挙措動作悉く真の女の如くであって、楽屋でも肌脱ぎは考えられないし、それに三階であるから、本句のお姫さまは立役者の加役でつとめる女形であろうとの推考をお借りして、私の解とします。

多田＝「三階」を「三界」と掛けて「三界に家なし」の諺をふまえ、端役的のお姫様が決まった居処なくほんとうの「三階」でなくとも、空いた部屋で楽な姿になった——とのんきに考えていたが、もっと厳密にすべきであろう。

岡田＝大たい礎稿でいいと思いますが、「二階」では句調が悪いので「三階」としたか？お姫様が大肌抜ぎというのが狙いの想像句にすぎないかと思う。

191　**鳥籠の中に髪切虫が居る**

南＝「髪切虫」は、馴染客が、手切れの挨拶もなく、他の妓楼の遊女に通う時、その客を捕えて不義理を責め、その髪を切る、吉原特有の私刑を加えることから、その遊女を髪切虫に例えたもの。

吉原という鳥籠の中に、遊女という髪切虫が居るということになる。

待ぶせハ髪切丸をときすまし　三一・4

多田＝賛。

髪切はいづれ狐の仕業なり　九〇・28

岡田＝賛。

192　**けふも又留守てござると諸葛亮**

南＝劉備玄徳が新野の城に在った時、臥龍先生孔明の出廬を促して三顧の礼を尽した故事。

さて、本句では孔明自身が「留守でござる」と居留守を遣っている様に解せられる。市井の講談・軍書語りで、三国志演義のこの場面がどう面白可笑しく語られたものか、孔明が居留守を遣う場面があるかも知れない。とすると詠史句となるが、どうも納得できない。

で、いやな訪問者にぬけぬけと居留守を遣っている、今様自称孔明の句と解しておく。

本多＝今様孔明説とらず。やはり孔明と玄徳との三顧の礼を詠んだ句であろう。直接孔明が玄徳に言ったのではなく、孔明に仕えている下僕に伝言させたのであるが。座五「諸葛亮」から知者の居留守と解するのは穿ち過ぎであろう。

多田＝賛。ほんとうの孔明であろう。

帆柱で寝てけつかると張飛いひ　四三・3

岡田＝小生は本多説を採ります。

193　**しんじつさ櫛巻キで来る薬取**

南＝一般婦女の外出に当っては、元結を〆め相応の髪形髪飾りするのが、女心であるのに若い婦女が、早朝に髪も素早く櫛巻に束ねて薬取りに来た姿に、病人に対する心実があふれている。

石田晋＝礎に言うように、髪も整えないで、病人のため人目もはばからないでくる女の姿でよいと思う。

本多＝単に櫛巻姿のという表面的な形容だけでなく、女房の心情を詠んだ句と解すべきだと思う。

多田＝賛。「嫁の髪巳午の間にやっと出来」（二一・1）というくらい時間がかかるのでそんなことをしないで来たのであろう。

岡田＝諸説に尽きる。

黒川紫香選

悪役を演じて靴の底割れる
うつらうつらと昔駿馬であった夢
一つ二つは伏せて男の自負とする
B面に聴くは暮らしのよいとまけ
つながれて鎖惰性を飼い慣らす

名古屋市　藤井高子

手袋の指が漏れてるのも便利
電卓で割れば余りのないゆとり
中流がそれぞれ乗ってカーラッシュ
造花ではないよほらほら蜂が来た
出世せぬ同士で呑んだクラス会

熊本市　高野宵草

かけがえのない愛だから無駄にせぬ
天上天下独りになったらどないする
許しあう心で切符二枚買う
父の日の父からお小遣もらう

西宮市　紀市郁栄

臆病な男が地雷を抱いている
自動ドアちょっと遅れて開く不安
揉み消した筈の火の粉がしゃべりだす
想い出の駅のカンナが燃える頃
何となく嬉しい日には散らし寿し
隙だらけの姿で昼寝できる幸

尼崎市　角野かず子

沿線のフェンスに布団干す暮らし
かくれ湯に紙漉く女の束ね髪
からす勘助高圧線で母を呼ぶ
びわ湖借景図画亭に苦吟して静か
床の百合けさはそっぽを向いている

尼崎市　春城年代

袋かけ二の腕白い桃畠
マンガ好きそして哲学もっと好き
疎開地の献立しるす古手紙

西宮市　奥田みつ子

好きな色着れば十ほど若返る
淋しくて淋しくて買う赤い花

八尾市　高杉千歩

一つしかない命です歯を磨く
浮き沈みいつも隣に鬼が棲み
少し酔うて酒呑みを理解する
つまらない女が翳す空財布
鳴らぬ笛いまも左のポケットに

尼崎市　丹下玉子

偶然を装う腹が見えすいて
白い花好きな女でひとり住む
偶然を拾えなかった春の旅
鮮烈な沖の夕焼船帰る
愛の私語消えて静かに席を立つ

水戸市　上鈴木春枝

お互いに気取り疎遠となる隣
用件が済んでお尻が重くなり
諭すことなくサラ金の気前良さ
老母からの電話へまずは孫を出し
話しても無駄かも知れぬ話する

熊本市　有働芳仙

吹き溜り落葉は過去を温め合い
窓少し開けて和解の風を入れ
見渡せば僕だけ仮面つけとらず
ペン胼胝へ育ち盛りの子の寝息
中立が不覚な拍手して終い

富山市　舟渡杏花

身構えたすがたで沈む川の石
今朝の夢仏へ花も水も替え
ポスターの笑顔暗示にもうかかり
口上をうしろで糸引く電話口
影武者がメモを落した朧月

尼崎市　西村かすみ

叱る子がいて家中の賑やかさ
よさそうな人だと母が先に惚れ
妻病んで妻の財布で市場まで
隅っこのお地蔵さんに訳があり
冗談に鍵をもらってみたものの

西条市　片上明水

加害者として人垣に縛られる
日曜日父の財布が空っぽで
言訳をする影小さく小さくなる
お役所を辞めて少々左寄り
流されてから知りました社の流れ

大州市　米澤暁明

標準語に直し味ない座談記事
帰郷して空気のうまい深呼吸
ここだけの下世話飛び出す屋台の灯
目を閉じて雨に聞き入る詩心
妻のいぬ自由ながらも不自由な

尼崎市　山田保蔵

音大も出てない歌手がよく売れる
そんなとこ歩きなはれと叱られる
無理やりに飲まされ罠にはめられる
タクシーで帰ったわりにもてもせず
どうしたの片袖ぬれた俄雨

藤井寺市　赤木和子

白ワイン魚は平目でないけれど
振りむけばいずこも同じ風が吹く
まんざらでないのにからかうなと怒る
アラレちゃんに会いに日曜の遊園地

尼崎市　田中晴子

虚しさを埋めるための身を飾り
後添いの遠慮が少しある仏
女ひとりガラスの風鈴買ってゆく
ひと皿が口止料になる話

東予市　小山悠泉

宅急便で故郷から届く田舎味噌
二人三脚夫婦で小さい店守る
廃坑になった線路に詩がない
車検までローン息子の自家用車

尼崎市　伊藤春子

咳払い軽く自信をのぞかせる
杉山に祖父の目があり風があり
色眼鏡通して敵にしてしまい
古釘の値打をあげる茄子の色

尼崎市　関口幸子

気にかかる手紙机の上にある
食べる事ばかりで終る日曜日
ウインドに飾る定食立派すぎ
虫干しのつもりで着物を着て出かけ

今治市　矢野佳雲

真実を言うと失う席にいる
道を聞く人がよく来る角の店
叩かれてやる気を出した紙角力
大勢順応悲しくても笑う

高槻市　竹内花代子

勝算のない小細工をする女
はっさくの匂いがぬける初夏の窓
チャンネルはナツメロ妻も歌い出す
極楽はこんな所か耕三寺

寝屋川市　平松かすみ

鬱鬱と電話で鬱を売りつける
お遍路さん嫁の悪口言うてはる
壁に当ったら私はシャボン玉
ご近所に鬼が三匹住んでいた

岐阜市　市川鱗魚

過去伏せて呉れるふる里海がある
人の背はすがると風がよくわかる
切札をちらちら女河内弁

なしくずしですねと覚悟からかわれ
京都市　松川芳子

ハイヒールちょっぴり抵抗ある夫婦

髭剃って今日一日へ身構える

ダンディーで通し八十ベレー着る

プッシュホンちょっぴり先取りした気分
和歌山市　中尾まゆみ

そっとしておこうよ泣き虫のママだから

王女になった夢のページは白いまま

指切りのゆびから飛んだ夢もある

少しずつ加速してゆく夏の風
大阪市　津山刀水

ふるさとへ帰るに口実などいらず

野良犬に鎖を切った過去があり

ただ黙ってキャディが歩く青い空

エレベーターの中でなんでもない二人
鳥取県　中原諷人

優しい感触母の乳房へ戯れる

鯉のぼり父になる日は遠くない

夕焼けを愛する月が背に居た

弾丸こめる女一分間の隙
鳥取県　森山盛桜

矛先をグラスに軽く受けておく

病院の椅子にいつしか座り慣れ

とまり木に無邪気な嘘を聞きに行く

風ある日人恋しくて旅に出る
伊丹市　樫谷郁子

母の日の贈りものあり神に謝す

カーネーション捧げる人なく瓶にさす

花菖蒲一株だけのほうが好き

孫一歳笑って居れぬ車好き
岡山県　吉末謹太郎

切花の真紅の彩に攻められる

白墨の匂いが消えぬ父の掌よ

木挽唄一途に過疎を守りぬく

写経百巻まだ善人になり切れず
西宮市　朝山千世子

舟乗り込み芝居の好きな亡母想う

「つづく」と字幕余韻たのしみテレビ消す

新茶の香帰省話に花が咲く

余生にも未だ夢がある趣味多彩
兵庫県　森脇和子

言い訳が上手になったふところ手

ボーナスに縁ない朝の庭を掃く

補聴器の老母へ訃報を告げかねる

蝶も又ゲートボールのあとを追う
豊中市　満仲きく子

梅酒作るといつもの夏になってくる

味噌汁もスープもさめるから平和

愛は不変などと枝豆食べながら

何事もなかったように海のいろ
松原市　本多洋子

話しているとやっぱり昔の友になる
お世辞だと判っていてもゆるむ頬
通りすがりに審判してゆく草野球
嫌がらず雑用していて認められ
尼崎市　吉永伊三郎

独り者さんまを二匹焼いている
六十路からみつけた径の鳳仙花
この頃は妻と並んで般若経
うんうんと頷いて謀叛考える
鳥取県　林荒介

貧しさに十本の指みな使う
等身大の鏡を少女朱に染めて
何の種子服についてた二つ三つ
華やかに葵祭を見て帰る
守口市　結城君子

ストレスを長距離電話にたたきつけ
倒産のそれから誤算チェックする
開発の中で案山子の思案顔
ベテランという靴音でやってくる
西宮市　津山冬子

子つばめの顔いっぱいに口をあけ
竹林に響く嵯峨野の鐘をきく
茶柱をよろこぶ朝に老夫婦

人工受精愛の絆が冷えて来る
西宮市　藤村宏子

石庭へ驕ったこころ捨ててくる
去年今年紫蘇もむ幸をかみしめる
入道雲山の家から便りくる
もみじの手噴水の虹のぞき込み
西宮市　西口いわを

続柄にすべてをあずけ妻と書く
再会へ今更ながらと来た手紙
縄のれんビールが取り持つ友が出来
二歳児の片言主役の座を占める
唐津市　浜本ちよ

吐気あり宿の料理を粗末にし
何もかも未熟なガイドのいい笑顔
岩風呂の全面積に伸ばす足
力強いかぼちゃの花に救われる
尼崎市　矢萩貞子

衣替え通学路にある笑い
宅急便浴衣も添えて娘に届け
雨蛙鳴いてみたけど雨降らぬ
風呂屋さん煙に匂いつけて出し
和歌山市　福井桂子

離婚にもよう踏み切らず梅雨の入り
年金をきれいに掏ったパチンコ台
相槌はこだまにまかす一人言

熊本県　大川幸子

或る日から娘減点パパにする
女です殺し文句に酔ってみる
雨続き二三日書く事ない日記

名古屋市　越村枯梢

アルバムのあちらこちらに箸袋
鳩に餌やれる位の余猶持ち
貧乏だと言えば子供はうつむいた

山口県　高崎雀声

金かけた程に選手は働かず
産休がすんで化粧も本格化
恋愛で結ぶ仲人座るだけ

吹田市　栗谷春子

何かしらつぶやきながら日記書く
窓の陽へもろに疲れの見える午後
水まけばすぐに応える雨蛙

大阪市　萩谷まさ

島国の周りを動く黒い雲
花々の満開告げる電光ニュース
お喋りの何処に句読点付けようか

竹原市　佐藤令子

ひっそりと生きたい夏に白を装る
酌み交わすお猪口どうやら妥協する
無償なる広がり四季の太陽よ

尼崎市　大江かね子

恋文を落としてしもた京の坂
背をのばし隣の表掃いておく
孫のいぬ静かな部屋でひと昼寝

大阪市　堀いくの

自立など言わぬに猫が戻らない
母に似た人に出会うた余呉の湖
遅れるよ目覚し時計のひとりごと

大阪市　野村八重

亡母の味思い出させる竹の皮
青竹に花一輪の四畳半
夢のような話ですなとひやかされ

富田林市　藤田泰子

山彦と話したくなり山歩き
三行に片付けられている自殺
娘の古着もらって少し若返り

吹田市　井上照子

お茶の後電気のこぎり悲鳴あげ
スニーカーいつの程にか蟄居の身
ひとり娘の嫁ぐ日迫り灯がにじむ

松原市　佐藤藤子

茹で玉子の堅さは朝のバロメーター
盲導犬走らせてやりたい広い野を
新調の水着に夏を若返る

高槻市　笠嶋恵美子

荒削りだが力作と自惚れる

ペンペン草も飛びたくなって風に乗り
制服に着替えて名前思い出し
羽曳野市　麻野幽玄

番犬注意表札よりも太く書き
お隣も向いも巨人勝った記事
一病へ五色の薬桶とする
竹原市　石原淑子

晩酌の夫の溜息ふっと聞く
お豆腐を見つめ直して台所
こだわりを捨ててダルマは起き上がる
寝屋川市　岸野あやめ

だいどこで肥えたゴマメが歯ぎしりす
戦前派値段何でも千で割り
上天気わたくし不貞寝しています
新潟県　高野不二

警察へさっさと入る出前持ち
司会者より新婚きわどい事を言う
三人の部下でも長がつく机
高石市　浅野房子

薪能ゆらぐ炎に面を染め
眉太く男ざかりが香に迷う
冷房をウンと効かせて浴衣着る
守口市　森川まさお

気が遠くなるどのはたけにもれんげ咲く
公衆電話切って妖しい笑みもらす
足元に鞄を置いて縄のれん
弘前市　田中叶

菜の花が咲き津波から経つ月日
いつとなく寺のはなれで鳴るピアノ
少女歌手一億ぐらいすぐ稼ぎ
芦屋市　上田佳秋

大阪の句を大阪駅で考える
何時の世も恋はやっぱり中之島
現代っ子ケツネうどんよりラーメン屋
鳥取県　灘尾民子

家事多忙苦にせぬ妻の手ぎわよさ
貧しさの波にも岬堪えている
弱虫は金で決着つけたがり
大和高田市　岸本豊平次

蛇の目傘似合う家並の先斗町
週刊誌の知識で妻のおつき合い
大の字に寝るとごめんと跨れる
宝塚市　丸山よし津

ビル伸びて大阪の空狭うする
通勤に指定席ある始発駅
長雨に隣家の電話なり続け
尼崎市　佐藤美代子

フルコースナイフ間違え持ちさられ
新聞少年自分は雨にぬれている
父よがんばれ今日一日で終らぬよう

人見翠記

姫路市　人見翠記

入相の鐘に法念院はもう閉まり
バックミラー運転手の目と出遭い
楽しみは京の都の京べんとう

広島県　望月晴彦

棺を出す家はゆったりした間取り
チョコレート若い心が固まらず
手相から見て結婚をあせらない

枚方市　二宮山久

焦点のない話で人前立ちたがり
靴みがく内助の功は敵を知り
縁を切る言葉探しているコーヒー

出雲市　河原恵美子

結局は恵まれすぎて愚痴も出る
ある時は糸を切りたい凧もあり
小銭まで右往左往する月の末

八尾市　宮崎シマ子

エンジンで目覚める故郷港町
虫図鑑子の寝てる間の下調べ
ラッシュアワー目礼だけの彼に会う

大阪市　稲本凡子

選挙日は夫婦でも絶対妥協せぬ
梅漬けて悲しいことを聞く今宵
マドンナも健康診断受けている

岡山県　石黒若恵

臑かじる子が父の日のプレゼント
やがて巣立つ燕を家族として祈る
着飾れど腰を曲げての同窓会

鳥取県　石谷忠良

靴の底斜めに頑固な父の汗
公約とバラはきれいに飾られる
クレーターに童話が一つ消えました

泉南市　板根流水

天災とおろおろ逃げる人の知恵
減税と補償がいつかくせになり
夏の麦焼くけむり目にしみる

大阪市　山脇正之

夢に見た母は笑顔でいてくれる
いつとなく女房に財布にぎられる
人並にローンで家を建てました

羽曳野市　田中隆二

どの色にも染まりますとうまいこと
愚痴一つ言える相手が欲しい夜
この指に馴染まぬ札が一つある

寝屋川市　立床晴風

儲かった話に耳をくすぐられ
謀反の眉と鏡にうたぐられ
又来ると月と別れた宇宙服

愛媛県　八塚三五島

上品な患者ばかりの歯科医院

作句三昧生きる苦労を忘れさせ

観光地誰か知人に会えそうな

鳥取市　野沢大漁

マル適の宿で斬の難に遭う

里帰り即席カレーにまた出会う

供養する線香無縁の墓を這い

八尾市　椎尾公子

カラオケで歌えば歌える面白さ

裏方の最後の釘で幕があき

裏町を行けば子供の多いこと

熊本市　北川一進

座布団曰くこの娘ほんとに重たいね

お偉方来るから下見する役所

数字だけ儲けさしてる机上論

青森県　波たただお

日本海中部地震

津波来るまだ生きたくて山に避け

余震の間に雀も庭で戯れる

地震と津波がなければ平和な鰺ヶ沢

諫早市　江副二牛

松風の私語聞えそう過疎の島

御目出度へ昆布も一役買って出る

ものたりぬ朝だと思う休刊日

大阪市　古川美津枝

瀬田の橋手甲脚絆で渡りたい

勝っても負けても絵になる高見山

髪染めて鏡の中へ年を置き

大阪市　大塚節子

鏡台に亡母の手くせの油じみ

様々な人生が有るクラス会

食卓にメモの連絡母の留守

島根県　岩田三和

不変なり神代の村に雨しずか

ほうき星放浪ぐせが直らない

無人島だからとっても美しい

高槻市　芦田静江

土の奥こだま聞える兵舎跡

資料館歴史の重み丸瓦

前後して白い蝶来る墓の道

岡山県　藤瀬比沙子

手を振った人は味方と選挙カー

自分だけ頼り荒野のど真中

ようやくに番茶の味も出た夫婦

米子市　宮本佳女男

生き甲斐を暗中模索する余生

来るものが来た一瞬の声を呑む

物置に省エネの品溜り過ぎ

西宮市　草川堕駄

駅頭で人さまざまな姿みる

冷凍のまぐろ丸太か積み重ね

花火みた帰りのバスに稲光

大阪市　平井露芳

大阪ボイラー技士協会より表彰受く

ボイラーを守りして無事故二十年
表彰状額に入れろと額もくれ
アクティ大阪兎も角上まで上って見

弘前市　真喜内實

今日もまた神にまかせた丸い顔
どっこしょの掛声味方にして座る
水田で悟った水に嶽映る

松江市　福間芳枝

薬屋根にお伽の花が燃えに来る
節くれた指が唱える人生論
うるさいと言いつつ軌道修正し

岡山県　土居耕花

引き返す気にした父の弱い咳
まじないの事も書いてる母のメモ
寺までに丁度なくなる飴ひとつ

島根県　岩佐富子

米がよく減ると嬉しい悲鳴なり
雨止んでやっぱりきれいな星のかず
薄い髪飾ってくれる美容院

藤井寺市　前山とみえ

美しい夕映えなんで核軍備
山裾に落書してるローカル線
ライバルに小差で負けている平和

藤井寺市　前山美恵子

子の検診母の虫歯も指摘され
不妊症いやに目につくマタニティ
玉葱に悲しい話聞かせ泣く

守口市　岸野キミ

クラス会五十年目を抱き合って
古希迎え亡夫に愛を打ち明ける
すずらんが孤独な場所にそっと咲き

益田市　里本たかし

英会話パス中年の憂さ晴らす
待合室の蛍光灯が白い雨
風船が手から離れる春の風

大阪市　堀口欣一

上野駅ぼくもさびしい人と知る
トンネルの名が美しいハイウエー
春の雨富士の姿は見えぬまま

八尾市　松下蕉露

古稀迎えても紅一点に変りなし
マスコミが到頭二人離婚させ
又来ると宿の女中に約束し

大阪市　松尾柳右子

大阪で育って迷う交通網
炎天に赤い顔したスイカ売り

鳥取県　羽津川公乃

ニンニク炎臭いもしっかり効きそうで
嫁ぐ気がないのか娘マイペース

鍵っ子は親の代理も巧くなり　尼崎市　繁野貞吉
コンコースどの人もみな落着かず　竹原市　岩本笑子
見わたせばるいるいると墓の道　兵庫県　円増貞子
ほほ寄せて双生児天使のごと笑い　泉佐野市　大工静子
晩酌へ孫はしぶしぶ座らされ
飲めるならここらで欲しいコップ酒
音立てて釣人送る初夏の朝　岡山県　池田半仙
一泊の名残り田辺湾は眠る
雨垂れのリズムに狂う朝の靴　吹田市　茂見よ志子
時間待ち駅のポスターみんな見る
バーゲンで夢中になって掏摸にあう　青森県　岩淵一星
打水に精気戻した庭の苔
病妻の小言をハイと聞いてやる　和歌山県　山田久子
ガラクタな人間にする三次会
雨かしら足のうずきが予知をする　指宿市　渡辺伊津志
待つ身には遅々と進まぬ腕時計
空壜に菜の花を挿し友を待つ

場所により音色が変る浜の波　大阪市　服部頼一
妻三日臥してがたつく台所
捕り過ぎた雑魚は隣の膳に出る　兵庫県　脇田米朝
口下手なくせに文章冴えている
一合の酒でその日の幕を閉じ　大阪市　北山悟郎
相談役粗大芥とは露知らず
ネクタイの日だけ律気な顔になる　和歌山県　寺田裕美
鼻息の荒い女へ道あける
蚊張つった紐に昔がぶらさがり　大阪市　渡部里美
五百円です言うてから硬貨呉れ
土曜の夜こっそりニンニク効かしとく　大阪市　今西静子
宝石を前に貧しさ意識する
誕生日夫のきげんについてゆく　大和郡山市　岡田すみれ
母の日のカーネーションはとても綺麗
夕暮れの涼しき風に生き返る　大阪市　吐田公一
どれもこれも夢一ぱいの児童画展
ジョギングのコースに四季の花の色　吹田市　西岡豊

その気持わかるわかると酌み交わす
受話器に聞いてほしいの逢いたいの
寝屋川市　堀江光子

白いバラ形見の壺がよく似合う
美しい花咲かす手が荒れている
守口市　長谷川司

時どきはふくれる妻で味がある
時差勤務日暮におはよう言う仲居
島根県　北川民子

一時打つ隣へ気がねのしまい風呂
栓抜きも行方不明になる暑さ
守口市　結城敏夫

泥鰌汁とすっぽん好きで好かん蛸
大袈裟な準備して朝顔の種子を蒔く
和歌山県　北浜二郎

ゴキブリを叩きまわして老いの妻
おしん今若き苦労に花が咲く
鳥取県　福田あや子

年金が下りて優しい顔になり
夫婦橋渡るメガネは無色選る
島根県　藤原秀穂

六十年のドラマまだまだ続くらし
貧しさへ耳をすませば天の声
八戸市　島田昭治

捨鉢になったら運が向き始め
ポックリを願う老母も入院す
兵庫県　奥野テル

前向きの無口な人に従いて行く
だませない静かな母の瞳の光り
西宮市　松尾志保

夢たくし買ってはハズレ宝くじ
夢みてるあの子の頬はキューピット
泉佐野市　真崎浪速子

ハンドルへ妻の干渉多過ぎる
船陸に上がる津波のエネルギー
河内長野市　糸谷春草

春闘がすぎて野球の夏が来る
公害の川掃除する隣組
高知県　曽我部裕

押すと出るポットを側に老夫婦
ナイターが終るとすぐに寝る夫
愛知県　国分甲子郎

六十の口紅おんなの狂い咲き
絵日記の母の涙は青く描く
鳴門市　八木芳水

上ずった投手サインを見失い
腹いせも混ぜて噂に尾ひれつけ
八尾市　葛幸子

あれこれと明日の旅路のまくらもと
挨拶の声も明るく旅立つ日
鳥取市　若林一止

道を問う人に優しい白い指

いと優し電話の声を警戒し
大阪市　小野風童

一つずつ親の見込みとずれてくる
言訳に嘘と本当がからみあう
大阪市　長岡周太

年金の暮らしに孫が遠すぎる
子に残すものは辞世の一句のみ
島根県　大浦ふみ

夕闇が庭へ蛍を誘いこみ
独り居の淋しさ電話に救われる
大阪市　松本ただし

手品師の鳩窮屈な顔もせず
踊る輪が広がりご飯運ばれる
大阪市　権安達一郎

高い税退職金にもってかれ
夢に見し地中海への旅に出る
島根県　田中ヒデ子

秋田沖波に叫びを投げつける
健康のあかし今朝も床をあげ
大阪市　板東倫子

恰幅は見劣りのせぬ我が総理
川柳党などいかが全国区比例制
鳥取市　武田帆雀

ライバルは強いが短所に傷がある
お前もかセールス涼しい場所を知り
大阪市　塩田新一郎

それぞれの顔で驚く千鰈
馬の汗一筋光る初夏の馬場
大阪市　山本炉斉

五月雨の音窓に聴く四畳半
選んだがコースが悪く落ちました
富田林市　植松慶子

寂び寺も観光ブームで朱の御門
安定剤で変る世の中でなし
島根県　東原福子

ぐみ苺ふくめばホロリ夏匂う
梅雨入りへアイドル顔の雨蛙
大阪市　野田君枝

みちのくは悲しリュック打ち寄せる
顔知らぬ孫も交えて三回忌
高知県　小沢幸泉

コップ酒注いでやりたい父は亡く
県高校体育大会終る
応援に負けた時間をもてあまし
大阪市　村島秀村

菖蒲園花の数より人の数
今日もまたみじかきコース走りゆく
千葉県　中村有人

お手植の松も松喰い虫で枯れ
遠くなり近くなるのも里の灯で
東大阪市　三宅旭

手指までいたわるようにする化粧

何もかも気になることが多すぎる　高知県　山下登舟

花活けて一夜の宿を雨蛙　〃　〃

一人背に一人手を引く俄雨　和歌山県　中屋好夫

違反者の自覚罰金支払い日　橿原市　西本保夫

聞き流す小言も知って年長児　〃　〃

昔なら住友マンにある誇り　〃　〃

老人のコーナーか定年の机置く　高知市　北川竹萌

今日の塵落して明日へ鎌を研ぐ　〃　〃

巣から落ちたのが親雀との別れ　岡山県　山本玉恵

出まかせを言うてずっしり残る海　〃　〃

或る時は風の女になって翔び　大津市　安田静子

祭気分洗いながして雨が降る　〃　〃

目立ちたいギャルでクイズ花盛り　藤井寺市　楠昭子

夢を見た亡母は私より若くなり　〃　〃

五つ児がだんごになって朝を出る　兵庫県　山根左春

社長より同僚の訃報知らされる　八幡市　(小二)結城千枝

きりのはがけんかをしてる夏のかぜ　〃　〃

一周忌を迎えて

故若本多久志さんを偲ぶ川柳会

日　時　**昭和58年8月8日(月)**　開場12時30分

会　場　西宮中央公民館2階会議室
阪急神戸線西宮北口駅下車、南改札を出て球場前踏切を渡り直ぐ

話　題　「若　い」　渡辺三笑子選
「タクシー」　堺谷伊升選
「　志　」　黒川紫香選
「　髪　」　西尾栞選

特別兼題　各題三句、席題一題あり

会　費　三〇〇円（軽食呈）

◎当夜川柳塔本社句会開催のため〆切を1時30分とし閉会4時の予定

投　句　欠席投句の時は投句料一〇〇円（郵券）を添え左記へ

〒662　西宮市広田町八―一五
妹尾春江方

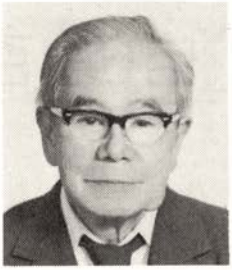
主催　西宮北口川柳会

自選百句

黒川紫香

さびしいね　蜂も飛ばずに秋の壁
人間の世界へスルリ蜘蛛が下り
綿ぼこり裾の動きについてくる
飛び込んで来た虫つかんで去ぬ女中
一軒をつぶして二軒建てて売り
清水引く庭も京都にある田舎
女の意地は蛤の舌に似て
来年も来るぞと補欠土を蹴る
はんなりとしてますなあと窓を開け
底減ってからが自分の靴になり
鉋屑敷いて大工の昼になる
拝観謝絶と書いて竹の鳴るお寺
夫婦して母呼び寄せる話する
亡き妻に逢える鐘ならつづけよう
ウインドで人形の一つ脇見する
カラス一羽波の高さを計ってる
日付変更線に雲ばかり飛ぶ
ゴチャゴチャでマラソン出発してしまい
天の声まだまだ君の席はない
寒蠅よ動くな外は吹雪だよ
なんの薬やと覗きこんで言う
十円を拾うと寒い道になる
飛瀑玲瓏として不動に似る
蠟人形愛の瞳が見つからず
四季の花咲かせ一軒立ち退かず

死角にいると敵の矢がよく見える
ローマ字があるから駅の名が読める
一と筋の滝があるので祭られる
蜜蜂が来るよと花と花話す
水平線なんぼ漕いでも行きつかず
ビル伸びて来ると地球がこけそうで
湧き水が小さな魚呼んでいる
鱧の皮きざむ母あり冬動く
集金に来れば線香の匂いする
桶持って転任先の土を踏む
かえっても篭の世界に居る卵
爺ちゃんにお子様ランチあげたいね
一本の八重歯が抜けて母になる
信心をしても亡妻には近づけぬ
竹の寺風の音だけ灯が洩れる
ゴキブリの長寿にっくきまごの色
名君も馬鹿殿さんもいたお城
軒借りてこども相手の店を出し
仔犬みな貰われ雌犬日向ぼこ
参道の砂利にパチンコ玉一つ
塔の影京の甍を越えに越え
日照権老樹そ知らん顔をする
負け犬がもう飛び越せぬ水溜り
人妻とコーヒを飲んで別れたり
アリバイのない一日の恐ろしさ



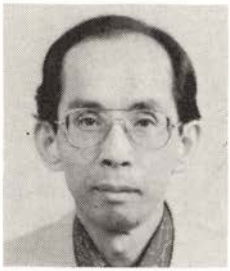
流れ星明日は外地に居る私
ガス自殺出前の鉢を置いたまま
てんでんばらばらに春を吸うて来る
老犬に重たくなって来た首輪
出て来いと夫機嫌のよい電話
テープカットちっちゃな社長に髭がある
幽霊がいるから此の世だと思う
老樹いま眠ることしか考えず
家出した少年の持つハーモニカ
豆の木がないので天に昇れない
風船の悩みは空が高すぎる
軍艦が並ぶと空が黒くなり
スケッチをするベレー帽に来る蜻蛉
折鶴をもらい外人ひとり病む
一＋一　三になりそで式を挙げ
城門に今の掟が書いてある
天馬かな白い夏雲よく走る
電柱に登ってみたい熱帯夜
フルートが森をすこしずつゆする
寒い日は鼻水たらす鬼瓦
手話と手話電車の中を明るくす
シナリオを書き終え鬼の面はずす
脱ぎ捨てた靴が疲れた顔をする
女医が来て明るい島の診療所
雑巾をしぼって嘘を聞いておく

海燃える向うに裸の国がある
受賞式今日の白髪が美しい
こそ泥がついでに盗む風邪薬
愛人でいいわと怖いことを言う
いっぺんは毛皮も着たい若い尼
何気なく見逃がす駅でロケーション
散る花を敷くと野犬も眠くなる
あんたまだ一人だっかと亡妻笑う
地球儀のどっかで雨の音がする
馬鹿になるときはこの歌唄うだろ
暑いのかいつもの犬が顔出さぬ
鉢巻を陽気な章魚は欲しくなる
身ごもった蛙矢鱈に飛びつかぬ
裸婦の絵が独りの僕を責めたてる
風紋に消えた女の白い肌
どぶ板に人情噺が一つある
がむしゃらに母なる川に戻る鮭
何か言うたかと寝汗拭きながら
過去帳に情死したとは書いてない
止ったら少し拗ねてる夫婦独楽
幸せがあるから切れる花鋏
豪邸の表はいつも閉めたまま
いつ来ても象は昼寝などしてず
一丁目一番地に住む蛙
飾るものなくても尼僧美しい

自選百句

谷垣史好

独身万才ベンチで酔いが醒め
手術日の外はうらら春の風
白雲悠々あてなき旅に出てみたし
散るときの木の葉は風にさからわず
ヒヨコの雄がこんなに安いとはショック
ひからびた心へ夏の陽は真上
無影灯　心の傷は探り得ず
軽薄の風まきあげてスポーツカー
ええかっこ云うなともうひとりの僕
両手があるから左手怠けてる
混浴と聞いて眼鏡のまま入り
この家の重みか釘箱ずっしりと重し
唐草の風呂敷持ってると嗤う
この女の静けさ空気も動かない
棺覆うとき最も星条旗らしい
嚙めば蜜したたりそうな耳たぶよ
ウインドウに僕の軽さが映ってる
妹の乳房は模糊として眩し
シュークリーム朝のセックスにも似たる
八字髭悲しいときもピンと立て
断崖は女を置いて見る景色
愚兄賢弟いっしょに風邪を引き
恋のしこりはアーモンドチョコに似て
制服を着て気味悪い大学生
家は西向き犬小屋は南向き
朝顔が咲いてるうちのひと仕事
閏年一日さみしい日がふえる
夜桜は妻に云えない人と行き
河馬悠然と四次元の顔である
水道の検針ですと長い髪
街道に一つ灯がある何でも屋
秋の酒恋しがんもどきが煮える
植木屋が来る日の小春日和かな
権力のイヌになってた拳法部
きょう一日を笑わなかった守衛
除夜を待つ炬燵に万太郎句集
世界地図　日本は力んでるみたい
鉄橋に夕日倖せまだ遠い
人恋し天津栗を焼くにおい
春の宵お前理屈が多すぎる
したたかな女スルメで酒をのみ
標的を狙うあいつを狙う気で
天地悠久　月と駱駝と旅人と
夏風邪が治らぬ地球冷えている
炎天や精子少なき男たち
八月の最後の週のさみしけれ
青春が欲しくて麦藁帽を買う
阪妻の人を斬る目と恋うる眼と
ポケットに密柑が一つ落ち着かぬ
待ち呆け酒饅頭を買うて去に



空瓶のフタのないのは寒そうな
啓蟄や寝起きの悪い虫もいる
庭の八っ手のアナクロニズム
向い風捨てた女の仕返しか
かぼちゃの絵仲良きことはむつかしき
ギヤマンの妖しき光秋となる
烏だけが親身に泣いてくれている
曳船がゆっくり帰る午後の愛
生年月日だけは素直に信じよう
旧街道の少し傾いているポスト
巻頭の一首きびしき冬木立
わが道は愚直コトコト豆を煮る
町工場の硝子こわれたまま二月
体制の外へはみ出る長い脚
獰猛な兵士はいらぬ自衛隊
税金が戻る今年も冷夏かな
懐しき小使室の大薬罐
核弾頭のような乳房が迫るなり
何もかもあげた男の絵そらごと
笠智衆も僕もうとうと秋日和
アランドロンと僕の違いを考える
死んだ筈の女が匂う闇の底
キリン悲し背い高のっぽなお哀し
八百屋より優越感は果物屋
父ひとり娘ひとりの木の芽どき

男装の麗人が飲むレモンティー
小さめの乳房好もし秋のひと
壇上の主役ボタンが外れてる
春になると文房具屋になりたくて
田吾作も与太郎さえも嫁がいる
人類の未来を案じ肥えられぬ
土建屋のセンスで国を治める気
甲虫　意地の固まりみたいなり
播但線　風も都を落ちて行く
駄菓子屋へひとり来る子は哀しい子
何かいい匂いも春の夕暮れ
ワニ園の鰐動かない真昼
武者飾る飢えも戦さも幻に
弱い男と甘い林檎が多すぎる
人生のゴールを飾る美辞麗句
潮がひくとき一通の置手紙
人妻になっても君の稚い字
会う場所は少しキザだが紀伊国屋
君の不幸は社内人事に詳しすぎ
人の情がふつふつ煮える関東煮
ロボットも少しけだるい月曜日
雨や憂し家庭医学の赤い本
ユタンポのやさしさが君分るかい
抱擁の目のはしに入る天守閣
京塚昌子の胸に抱かれて眠りたし

愛染帖

橘高薫風選

労働の血を吸うごとく札が消え　島根県　小砂白汀
人妻の想いカンナに燃えうつり
いつもの人がいつもの位置にいる呼吸　岡山県　白岩文衛
犬の眼の位置から見れば傲岸な
悪いやつ守る法律ばかりある
チョロッとは曲がった僕のカーブだが　高知県　山下登舟
一徹の双手に膝を鷲摑み
値を聞いて懐を撫で品を撫で　青森県　工藤甲吉
ほとばしるいのち満目萌え出ずる
土たのしトマト五本に茄子五本　京都市　松川杜的
後向きになると暗示がかからない
首欠け地蔵の方が賽銭ちと多い　寝屋川市　堀江光子
たそがれの紫いろの桐の花
声持たぬ虫を憐れと蜘蛛逃がす　吹田市　横山青果

働いて帰る我が家の格納庫
アイロンで夫のくせを直そうか　鳥取県　鈴木村諷子
野の果ての一穂の煙人が死ぬ
マッチする弱い人間より添うて　八尾市　高橋夕花
梅干の色に男は妥協する
傘さしてやさしい女になってゆく　笠岡市　木山遠二
清貧に徹し八十路へ辿りつき
若い気の妻も参じぬ敬老会　米子市　野坂なみ
雛段のおとど蹴鞠を恋しがり
泣き虫の屋根を夕立又叩く　和歌山市　浦野和子
ほんとうのわたしでいたい花薊
なまこ塀人それぞれの夢芝居　大阪市　小出智子
素晴らしい水着を誰も見ていない
雑用はみんなすませてある机　富田林市　藤田泰子
安堵感八手に染まる青蛙
古本と散歩が好きなメランコリー　米子市　八木千代
どの風も許そうとして蜘蛛の糸
人形に祈りおしえている少女　豊中市　田中正坊
王将というホテルあり天童市
記念館茂吉の歌と英治の句　京都市　山本規不風
男同士の話にどちらも亡母を言う

こんな事遠い易者の方がよい　貝塚市　行天千代
十五年嫁も娘と変りなし
買物へ娘と待ち合わす花時計　寝屋川市　平松かすみ
おばあちゃんの意見を通すお石塔
正論をはいたがノックダウンされ　岡山県　池田半仙
病妻の愚痴が出はじめ安堵する
柳吹く風の風情は夏のもの　島根県　松本文子
菊鉢に移植これからひとりぼち
点字打つ音コツコツと訴える　大阪市　江城修史
夢ひとつ心に朽ちてゆく月日
口害と言いたい程の饒舌よ　大阪市　津山刀水
原爆忌まことに静かな火がありぬ
花にだけ見せる顔して一人居る　弘前市　真喜内實
葬儀には艶っぽ過ぎるナレーター　宝塚市　丸山よし津
湖を安眠させぬボートあり　大阪市　松尾柳右子
甘えてはいても見るとこ見てる孫
ロボットの国で人間に縋りつく　今治市　矢野佳雲
ある焦り夫婦終日顔を見ず　大阪市　川口弘生
　富田林市　岩田美代
　西宮市　草刈堕駄

科学には曼陀羅ほどのドラマない
大阪市　神夏磯　道子

よく見れば毛虫の顔も悪くない
西条市　片上明水

エプロンの白さが目立つ城下町
大阪市　市場没食子

気に入ったのか入らぬのか値札は見
西宮市　松本一郎

明日からはこのラッシュにはもういない
岡山市　川端柳子

晩酌のここでは奥さん奮闘記
伊丹市　樫谷寿馬

姥捨ての背に乳房の平たかり
今治市　月原宵明

釣書き書く短大へ入れておく
鳥取市　河村日満

オイコラの人へ民主の瞳をかえし
守口市　結城敏夫

老人会投票所からバスツアー
島根県　堀江芳子

おしっこの犬に会う会う朝の土手
唐津市　浜本ちよ

灼熱の恋の年輪墨彩に
名古屋市　藤井高子

流れ星重き祈りに墜ちにけり
大阪市　朝倉利義

そのうちに会おとは会う気無いと見た
松原市　佐藤藤子

蛍光を父の灯と決めている
青森県　岩淵一星

現実とノルマの隙間鳴る軍歌
鳥取市　武田帆雀

仏壇の造花を祖母は嫌いぬき
倉吉市　奥谷弘朗

言いたいこと言えない同士と子猫なで
東大阪市　三宅旭

雨遠く夕立ほどの水を撒く
尼崎市　春城年代

憫みの瞳を組し易しと見
益田市　里本たかし

電灯を全部点して我が家かな
松山市　谷真風

出合いかな火に燃えて土の転生
鳥取県　林荒介

穫れたより沢山食べたサヤニシキ
和泉市　岡井やすお

狂いたいときもあったろひとり独楽
尾崎市　田中晴子

ゆとりなど無いのにゴルフ誘われる
奈良市　森田カズエ

稲妻の青よ命を宿そうか
海南市　牛尾緑良

損得になれば手強い幼な妻
尼崎市　西村かすみ

子離れの蔭に打ち込む趣味を持ち
西宮市　朝山千世子

剪定へコーヒーブレークしませんか
豊中市　満仲きく子

慎重に読んだ芝生に侮られ
高知県　赤川菊野

頑固爺の味方は酒と庭木だけ
高知市　北川竹萌

眼鏡拭く間に決断をつけて絶つ
唐津市　今里一竿

後向け前向け孫の背の丈
島根県　堀江正朗

物忘れ指の先から抜けていく
唐津市　浜本義美

素っ裸でひねもす老いの夏はよし
羽曳野市　麻野幽玄

見舞わるる驕る心のありありと
尼崎市　伊藤春子

仏の目心を軽く堂を出る
吹田市　栗谷春子

植えかえた桔梗気になる猫の声
奈良県　村上春巳

雨男通り雨ならゆるされよ
唐津市　木塚素石

鈍行で故郷の匂い深く吸い
吹田市　井上照子

夕焼けが望郷の念かりたてる
唐津市　松高多々子

主権在民胸張ってゆく投票所
島根県　福間芳枝

棘さざる事を覚悟の役を買う
大阪市　西森花村

館内の一望されど立見席
堺市　大道美乙女

ライバルの仕掛花火が胸に炎え
米子市　林瑞枝

大志抱く窓は故郷の山へ向く
富田林市　植松慶子

紫陽花の雨に打たれて彩の数

人形の謀反ひとりで歩けます　米子市　政岡日枝子
結婚へハネムーン先をまず決めて　水戸市　上鈴木春枝
肩寄せて失意いたわる熱いお茶　兵庫県　森脇和子
高層ビル空から見ればまだ低い　藤井寺市　楠昭子
別れる日のために香水買って置く　八尾市　松下蕉露
待望の雨ぞ浄机に筆をとる　羽咋市　三宅ろ亭
ちぎり絵の花にも四季の風当り　米子市　寺沢みど里
都市砂漠花いっぱいの夢を見る　羽曳野市　田中隆二
淋しさはおしんと会えぬ日曜日　吹田市　西川景子
かすみ草活けたら花嫁さんが眼に浮び　島根県　榊原秀子
水着一枚えらぶ詩人に夏がある　和歌山市　中尾まゆみ
死化粧するまで女髪を梳く　唐津市　久保正敏
相聞の鈴むらさきの闇を這う　和歌山市　松原寿子
構想の突如と湧いて天馬征く　西宮市　林はつ絵
思い出を深く沈めた老母の毬　米子市　雑賀美世
　　広島県　望月晴彦

派手だった注文やはり金がない　島根県　木村はじめ
石垣の大小積むも理に叶い　藤井寺市　前山とみえ
白じろといちはつ咲いて子規想う　枚方市　二宮山久
自信ある男やっぱり動かない　堺市　高橋千万子
独立の今日から私の印生きる　西宮市　奥田みつ子
祖母（ばば）馬鹿になってみるのも幸せか　米子市　青戸田鶴
八月の海はきびしい貌になる　大阪市　上江洌勝子
スタイルをモード聞ききき悔しがる　兵庫県　脇田米朝
ていのよいお世辞わろうている柩　西宮市　津山冬子
六月のもうボーナスを弾く妻　米子市　菅井とも子
貧しさが同じで戦後耐えて来た　和歌山市　若宮武雄
野良犬は誰はばからぬ大欠伸　大阪市　中野忠廣
雨男降り込められて自慢する　岡山県　山本玉恵
女の役終えて余生を花と生き　大阪市　萩谷まさ
温もりと情緒に薄れ荒んだ世　大阪市　竹中綾珠
冗談のわからぬ人と居て疲れ　守口市　岸野キミ
ボーナスだ働きたいな六十五　高槻市　田崎あき子
甘柿の生るを信じて買う苗木　大阪市　中西兼治郎
登山歴物物語ってる破れ地図　弘前市　田中叶
持ち主の来ぬ自転車とお月さま　和歌山県　山田久子
足洗う波にまかせて歩を進め　寝屋川市　宮尾あいき
雨蛙お前も齢か色あせて　岸和田市　原さよ子
先生もだまって読んでる漫画本

★投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13—15　橘高薫風（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題　「海岸」　選者　森中恵美子

締切　**8月10日**（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43NHK大阪放送局〝老後をたのしく〟係

発表　8月28日（日）ラジオ第一放送　午前10時から

秀句鑑賞

―水煙抄―

―前月号から―

小林　由多香

共稼ぎせめて夜風の窓明ける
西村かすみ

共稼ぎしても楽ではない家計である。せかせかとして朝を出る。夕食をすませてやっとくつろげる情景が描かれている。

着飾ってほんねの吐けぬ場所にいる
春城　年代

時と所によって人はいろいろ制限されることが多い。言いたいことが言えないもどかしさ、うまく表現されている。

適量を超えて仮面がずり落ちる
山崎　広風

「ずり落ちる」がおもしろい。仮面というからには見せたくないすがたであろうが、戒めとしたい。

看護婦の白衣を脱げばジャズが好き
小山　悠泉

白衣を脱いだ姿、情景を下五に置き換えられるが、「ジャズが好き」でこの句が成功している。

隣席の美女が赤旗読み始め
麻野　幽玄

一つの発見と驚きである。赤旗であるからおもしろい。

お隣の荷物あずかり動かれず
関口　幸子

よく経験することであり、時計を見ながらいらいらさせられる。

繁昌の店ちぐはぐな昼を食べ
今西　静子

ゆっくり昼もとれない忙しさ、今日一日だけのことではない。それでいてぐちもない。

補聴器で福祉後退聞いている
山田　保蔵

だんだん遠くなって来た耳、福祉は切り捨てられる。明るい話のほしい補聴器である。

大根の白さぽっくり折れ易い
矢野　佳雲

新鮮な大根ほど折れ易い。おもしろい着想であり、うまい表現。

ブラジャーの下で妬心がむれてゆく
藤井　高子

女性でなければ経験のできない作品。特に「むれてゆく」など。

五月晴れ高層ビルの窓を拭く
糸谷　春草

スケールの大きさを感じさせる作品。

咳一つしても顔見る妻がいる
朝倉　利義

こまかいところまで気を配ってくれる妻であるが、ときにはうるさい妻でもある。

第七回　茗人忌川柳大会

とき　昭和58年8月28日(日)　午前10時

ところ　鳥取市富安
鳥取工業福祉会館「鴻南閣」
鳥取駅南口　徒歩五分
（電話）二三―三一八一

お話　河村　日満氏

兼題　「英　雄」　黒川　紫香選
「　式　」　香川　酔々選
「和　紙」　沢　車楽選
「喘　ぐ」　河内　天笑選
「なだらか」　小林由多香選

席題　当日2題・各二句

会費　三、五〇〇円
（作品集・懇親会・昼食含む）

投句料　八〇〇円（作品集呈）
当日欠席投句の方は八〇〇円同封で8月10日までに左記へ。

〒680　鳥取市相生町三丁目二〇四
（森田熊生方）
うみなり川柳会
（電話）二三―四六七二

八月の空

西尾栞

今年も森田茗人忌の八月が巡ってきた。来る八月二十八日に修されるそうだが、生憎大陸川柳会と一緒の日になって、第一回より六回まで欠席したことのない御縁を初めて破ることになって、誠に残念至極である。

昨年は私のライオンズクラブの朋友熊谷勇氏の口次と、鹿野町のみかづき川柳会の方々のお世話で鹿野温泉の国民宿舎で約二十名の者がご厄介になった。鹿野町は町ではあるが、亀井公の御城下で彼の有名な山中鹿之助のお墓のある、古い屋並の山間の小京都というたたずまいの落ちついた町である。

山中鹿之助といえば私達幼少の頃より尼子十勇士の一人として非常に憧れていた英雄である。昨年八月、その碑前に於て、みか月川柳会の会長山下以草夫氏が私達にお話して下さったことをつくづく思い出す。

「私（以草夫氏）はこの碑前に額ずく時、何時もカルタゴの名将と言われるハンニバルの事を思い出さずにはおれないのでございます。幼時よりローマを畢生の敵として誓わしめられてより、その終焉に至るまでローマを亡ぼさんが為にのみ生き抜いて連戦連敗、『ローマの血に飢えたるカルタゴの志士よ』と叫んで、アルプスを越え、終いには刀折れ矢尽きて憤死したハンニバル将軍の生涯は余りにもよく鹿之助奮闘の歴史と酷似しているからでございます。

鹿之助幼時より尼子家臣として、不倶戴天の敵として毛利に挑み、百折不撓、終いに岡山県の高梁川の辺りに於て三十四歳を一期として散華しました、その姿こそ武人の鑑と申しましょうか、最後の死闘に至るまで抱きつづけた敢闘精神こそ山陰の麒麟児とうたわれた所以であると思うのでございます」

熱血溢るる声は八月の空にこだまして、辺りに鳴く蟬の声も何時しか静まりかえりました。

「我に七難八苦を与え給え」と神に祈り、「憂きことの尚この上に積れかし限りある身の力試さん」と詠んだそのファイトこそ、その敢闘精神こそ今猶生きているのでございます。東西古今英雄と呼ばれ、豪傑と称されるものは数々ありますが、鹿之助の如く武将として珠玉の言葉を残し、自らファイトの権化と化してその一生を貫き通した武将というものはまだ聞いたことがないのでございます。

不可能という文字は予の辞書にはないと豪語したナポレオンも、その権力を恣にしたアレキサンダー大王も、ユーラシアを席巻して飽くことを知らなかったジンギスカンもフビライも、その豪快さはもっておりましても、鹿之助の如く自らを見つめ、自らに鞭打ち、自らの人品を高めんとして、その思索するところその次元の高さに於て、何れの国の英傑も遠く及ばないものがあったと信じているのでございます。

今英雄とされている太閤秀吉もその臨終に

当っては、秀頼を頼む頼むとその側近へ哀願して息をひきとったと言われていることは、心理学的には退行現象と言われておりますものの洵に女々しい限りで、英雄としての色も香も褪せ果てた憐れさに較べまして、鹿之助公の生涯こそ武人の規範であり、真の英雄の姿であると思うているのでございます。

勝手な独断に過ぎるところもあろうかと存じますが、私は鹿之助公をこのように観ております」とここで山下さんの熱弁は終りました。私達は夢から醒めたような、まだ現に帰らぬ気持で、再び公の碑の前に額ずき、深く合掌しました。

山陰の麒麟児今も生きており　以草夫
八月の空英雄の物語り　栞

この時、中原諷人さん初め、みかづき句会の皆さんに大変お世話になりまして遅まきながら篤く御礼申上げます。また鹿野郵便局の思い出も今尚生きております。多謝。

（この稿、昨年中に発表したかったのですが、原稿が輻輳して今日になりましたこと、山下会長はじめ皆さまにお詫び致します）

出湯ありて英雄ありて鹿野町　栞

高橋操子川柳作品展によせて

植山武助

展示室に入ると、正面右側に「ちっぽけな善意でもよし心満つ」左側に「舞妓さんの涙か京の五色豆」を中に左右に額、色紙、短冊を壁に吊るし、机上には色紙、短冊を並べる。何しろ初めての事とて全員の頭を借りる。掛軸十二本、額が大小共含めて五つ、色紙・短冊掛けが三十余り、その他色紙が百二十枚余、短冊が百五十枚余りが展示された。それでも展示し切れない色紙・短冊が数多くある。

これが十四日の準備日で、準備完了午後五時過ぎ、早々と市議会議長、市議、市役所の部課長が次々と陣中見舞を兼ねて作品展場を見て下さる。第一声は、展示された数量に驚かれ、内容に感嘆される。大きな体の操子さんは小さくなって恐縮しきり。文化協会長もこの日から連日出向いて下され、何かと心を配って下さる。

いよいよ十五日十二時開場、心配された出足も上々で貴名帳トップに市長・原舜氏、そして教育長、教育委員の方達が錦を添えて下さる。ウイークデーとあって老人や主婦の方達が次々と来て下さる。閑古鳥が鳴いて恥をかく事だろうと言っていた操子さんの心配も吹っ飛んで、接待に忙しい程のうれしさ。川柳人以外の皆様のこんなに関心を持って頂いていることが殊の外うれしい限りである。一句一句を熱心に、そして係の者に色々と句について質問される熱心な方もある。夕方にはお勤め帰り学校帰りの若い人達が目立った。川柳人のトップを切って川柳「わかやま」の皆様がお揃いで来て下さる。

初日より十九日まで五日間に延べ七五〇名余りの皆様が御来館下さった。

西尾栞主幹はじめ橘高薫風氏、富田林、八尾、大阪、堺の柳人が次々と、本当に有難い事で操子氏の人徳がまのあたりに見える。そして諸氏からの第一声も展示品の数量に驚かれたものだった。出品句は句集「千亀利」にも発表された句もあり、柳人の方達には馴染みの句だったが、一般の方達は「よくもこんなに句が出来たものですね」と感心、柳歴五十年の一部の句ということで、又々感嘆の態でした。私達同人でさえ、何時の間にこんなに沢山用意されたのか、句の量に驚いている次第です。

展示と同時に課題「女」の投句を募り「N

HKラジオ川柳選者の橘高薫風氏選」の張り紙と共に投句箱を設ける。控室の方で、お茶と饅頭を前に作句される方達、句数一八〇句程集まりました。お求め戴いた数多くの作品の包装やら接待やらで、係員のうれしい汗と共に五日間は天候にも恵まれて幕となりました。

二十三日操子さんは岸和田市長を訪れ、公共施設へと売上げの百五十万円を寄贈され、私もお供をして市長に手渡しました。

終了後も売り切れた句の追加、作品の作成一五〇点余り、お疲れの出ないようにとの暖い皆様のお心遣いを心に頂いて、盛会に終らせていただいたことを心から厚く御礼申し上げます。

高橋操子川柳作品展
課題吟「女」応募作品
橘高薫風選

極道の果てを悪女に養われ　赤塚　楽天
一言が女眠れぬ夜となる　堀端　三男
女性から見たネクタイを買ってくる　植山　武助
言い勝った悔いが女を女にし　児島与呂志
強がりの女にもろい涙あり　林　春栄
一本の傘で女に騙される　岩田　美代
宇宙船へ笑顔女がためらわず　深日白光子
糟糠の妻が持ってた果し状　深日白光子
演壇を降りて女に戻るお茶　内藤きさ子
名優の素足女がこぼれ落ち　内藤きさ子
五十年女のドラマギャラリーに　西出　漁波
或る日ふと女に戻る母悲し　冨上　光代
ちぐはぐな返事が美人見つめてる　中島　正博
お互いに美人と思っている不仲　中島　正博
化粧する女いきいき逞しい　内芝登志代
紫をまとう女の血は真っ赤　若宮　武雄
遺産分けとかく女が口はさみ　狭間希久志
病んでても妻は女でいてくれる　児島与呂志
花しょうぶ女の詩がたんとある　児島与呂志
旅に出ても何時も財布とにらめっこ　上塩入育子
日によって一致がかわる女達　河合治三男
3DK主婦は女の顔で出る　半井　甘平
みずくきのあともすずやか古稀の人　野田　繁枝
玉手箱開けてはならぬのも女　板尾　岳人
内助の功女は強いものと知る　吉水　照江
女三人寄ればメルヘンに遊ぶ　西田柳宏子
鏡から始まり終わる女の業　安宅川　治
おばあちゃん病忘れてだいふんとう　平田　京子
美しい女で釣った視聴率　横井金三郎
理屈には負けても涙で勝つ女　宮園射月芳
しがらみを解かれ女に夏がくる　宮園射月芳
おくれ毛がほのかに匂う十八娘　原　玲風
紫陽花の花にも似たり女の路　原　玲風
女には女の気持ち分けて泣き　金崎　謙
しあわせを語る女のみだれ髪　高橋　雅子
本当の色気を女形にきく女　植山　武助
装えばやはりおみなの集いなり　東　町子
化粧品小さくなって買う齢に　東　町子
湯もどりの桶抱くおんな夜店みる　西浦　昭美
おくれ毛に女の愁いなしとせず　西浦　昭美
〈佳作〉
女対女招待席の風　坂本　郁子
女性誌に女読むのかなと思い　佐々木莫平
夕やけに染まりきれずにいる女　藤田　泰子
女から女が見えた恐ろしさ　高橋千万子
すきのない女紫よくにあう　赤塚　楽天
情熱を秘めて祭りの好きな女　塩満　敏
市長さんも一目女史の肝っ玉　梶川雄次郎
いのち生みいのち育てて女地味　中原比呂志
女面修羅場を抜けて垢ぬける　浦野　和子
そのわけがみな面白い女へん　榎本　聡夢
(軸)しとやかに生きる花の名付けられて

高橋操子さん(岸和田市)より
川柳作品展を記念して
金一封
拝受致しました。
川柳塔社

「テン」と様にならない話

旅で拾った……

● 黒川紫香

谷川岳の登山口、水上温泉からバスで北へ登ると熊の入湯そして数多い露天風呂で知られ、テレビにも放映された宝川温泉を左に見てやっとの事で終着湯ノ小屋温泉に着く。

ここは上州でも北の端、坂東太郎と呼ばれる大利根川の源、奥利根湖も近い。少し手前に洞元湖と洞元の滝があり、一軒の温泉宿が建ち、その名も狸のお宿と言う。

道路から見えそうで見えない大きな露天風呂は滾滾と透明な湯を湛えている。秘湯にしては気の効いた設備と、山菜と川魚をあしらった料理は満足させてくれた。それより番頭が真っ先に言った。

「夜八時十分になると狸と狐と貂（テン）とがやって来ますよ」

の言葉に期待を持つ。誰かが、

「八時十分とは半端な時間やな、狸も時計を見て来るんやろか」と言うと、

「いや、きっと狸の腹時計やぜ」

と洒落にもならない事で笑う。

部屋からも見えるそうだが、狸見物のためにガラス張りの部屋が設けられ、八時頃になると集って来る。余り多くもない泊り客だが、それでも部屋はいっぱいになる。

「来た、来た」

誰か第一声を上げる。ちょうど計った様に八時十分である。一匹の大狸が辺りを伺いながら庭園の真ん中にある一灯の薄明い誘蛾灯の下を廻り出す。しばらくすると雌狸らしいのが子狸を連れて来る。宿で用意されたらしい餌を漁りはじめるとやがて尻尾を心持上げながら狐もやって来た。一灯の薄明りの下で仲良く餌を食べているが、一向に貂は来ない。

「貂はテンと来ないな」

とつぶやいていると、一匹の黒い動物が現れた。

「貂だ！」と声が走る。

「いや貂にしては尻尾も短かく色も黒い」

「しかし黒い貂も居ると言うぜ」

と果てしがない。みんなが見ているのを知ってか知らいでか、別に動物同士争いもせず食い終ると引き揚げて行った。一応黒い動物は貂という事にして部屋に戻りかけると番頭がやって来て、

「今日は貂は来ませんでした。黒い動物？あれは家の飼い猫です」

にみんな大笑い。

「狸でなく猫に騙されてしもた」

翌朝は素晴らしい快晴になった。上州名物の空っ風も五月は緑の風となって湯上りの肌を撫でてくれた。

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町田中
山内静水方

会長　山内静水
副会長　小島蘭幸
副会長　時広一路
計　山内房子
石原淑子
佐藤令子
古田比呂子
古田鈍舟
岩本笑子
岩本文晴
八木秀水
古谷節夫
槇田英詩
三宅不朽
森井菁居
ほか一同

川柳わかやま

1983 盛夏

橋本紀水川柳会　森脇善太
由良ゆら川柳会　寺田裕美
川柳わかやま　野村太茂津

はねぶとん

—田中淑子遺句集—

白岩文衛

同人田中淑子遺句集「はねぶとん」が、六月十二日に発行された。

この句集は、その生涯を平凡な主婦として過ごし、病いを得てわずか十一ヵ月の闘病で亡くなられた田中淑子さんの病床で綴った句——その五百余句が彼女の作ったすべての句であるが——を遺族が編んだものである。

五十二歳にもなって、しかも病いの床で、初めて鉛筆を握り句箋に対した彼女の句は、ひたむきではあるが、何の技巧も知らぬ素朴な句である。また、ノートの端っこに走り書きした句まで余さず集められている。だからこの遺句集は、すぐれた作家の、すぐれた業績を世に表わし、残そうとする一般の遺句集とは全く異なる性格のものである。

だが、彼女がひそかに師としていた橘高薫風先生は、この書に序文を寄せて、その恩師の遺訓「いのちある句を創れ」に触れ、「いのちある句」とは、その作品の卓抜した芸術的永遠性を言うのでもあろうが、作者自身のありのままの生活の一瞬一瞬をとらえ、燃焼させることにもつらなっているとして、田中淑子さんは、初心の短い作句生活ながら「いのちある句」を残された、と称え、作品ににじみ出ている彼女の人柄にも触れておられる。

句集は六章から成っている。「紫陽花」の章は、入院、手術の頃、「ナポレオン」は、いったん退院して自宅療養を始めた頃、「注射針」は、病状が悪化しはじめた頃、「水仙」は、再入院してから亡くなられるまでの句を集めたもので、「剣」は時事吟、「柿」は題詠の集録である。各章から一、二句を抜き出して紹介しよう。

潰瘍であってくれよとカメラのむ
思いきりトイレでおしっこしてみたい
点滴中ごめんねテレビ足で消し
退院の窓いっぱいに開け放ち
秋が来る　注射通いの何時までか
五ヵ月目　針さす皮膚も固くなる
家ひとつ持てず島買う夢を見る
鏡の中にとんがってくる頬を見る
人生の師に囲まれて生きている
羽ぶとん　家族のぬくもりフワフワリ
伊予柑の皮傷つけて香を賞でる
防衛費　治山治水をなぜ言わぬ
寒空にどこかで嘆息聞こえます

田中淑子遺句集
「はねぶとん」

序文　橘高薫風
函入　二百五十六頁
頒価　二千円（送料共）
発行所　〒560豊中市旭丘八番87—2
とよなか文庫
☆本社でもお取扱い致します。

川柳翠洋会より
金一封
拝受致しました。
川柳塔社

吟題課

コース

柳楽鶴丸選

負けおしみコース順が悪かった　一竿
転落のコースにサラ金待っていた　ただし
どちらから決めるともなくラブコース　登美也
慾のないコース天寿までゆっくりと　芳枝
近道のコース危い橋があり　道子
コース順電話も書いて母の旅　久子
ウップンを晴らすコースへ意気投合　喜酔
ライバルが同じコースにいる動悸　三吉
登山コースはずれ遭難と間違われ　綾珠
エリートコース鬼が棲んでる檻の中　悟郎
天下りエリートコース折り返し　久仁於
定年のコースを終えた粗大ゴミ　みどり
背に立つボーイ気になるフルコース　裕
観光コースどこにもひとつ置く目玉　代仕男
コースに乗ったが油きれていた　新一郎
エリートのコースへあえて逆らわず　保夫
一人旅のんびりコース変えて行く　まさ
フルコース料理にカタツムリの夫婦　規不風
現実と理想の谷間を行くコース　弘朗
四浪になっても医者の道捨てず　七面山
コースちと外して夢をみてみたく　文子
コースからはみだしたがる子の育ち　山久
出直したコース意外と性に合い　本蔭棒
一万歩コース扁平足の母　甲子郎
川渡る蛇の幅だけ水が揺れ　伊津志
かたつむりコース違えた竹の先　胡頽子
コース地図心に刻む膝枕　素石
エリートコースはずれたけれど親思い　たず子
楢山はコースに入れぬ観光地　雄々
教育ママが一人走りをするコース　優
地図にないコース秘境のひとり旅　静子
長髪を進路の途中きり落す　はつ絵
どのコース行っても妻の目がとどき　花子
それからのコースに迷う葱坊主　冬子
賽の目に委せ気楽なコース行く　虹汀
あこがれは雲のコースに合す旅　四郎
コースからはずれて謎が解けはじめ　和子
母の書くコースに子らが手をつなぐ　与呂志
いつか来たコースを走る防衛費　裕
逆コース辿れば火薬のにおいする　素身郎

夢

岩田美代選

朝令暮改コース又変り　軸
太平洋ひとりぼっちにでかい夢　比呂志
マイホーム夢をチクチク刺すローン　優
切り捨てた夢に哀しい蔓がまき　三五島
札束でものを言いたい夢も見る　慶子
楽しみの海で悪夢を背負て来る　三千代
夢入れるハンドバッグは手放さず　三和
ふるさとに安堵の日あり夢の道　伊津志
アルバムの小女の夢はどこへ行った　満津子
夢ばかり見せて株式評価欄　雅風
倖せは一味ちがった夢を持ち　弘朗
水すまし入れて金魚に夢を見せ　里風
白状をすれば笑われそうな夢　明水
まさかとはテレビで会えた尋ね人　正之
ETの出現バクの数が減り　武水
夢捨てて父が残した田に戻る　素身郎
新幹線ソフトな夢をそえてくれ　胡頽子
夢一つ郵便配達持って来る　実男
草庵の夢追いかける古都の梅雨　喜酔
設計図書いては消して夢を積む　雄々
しばらくの夢を抱かして消えた人　ゆう也
潮騒に育った夢のたくましさ　軒太楼
どんぐりも小さな夢を秘めている　豊
疑えば夫が夢で又笑い　耕花
五月晴れ夢買いに行く白い靴　洛酔
正夢になればいいがと箸を置き　登美也
夢を見る四千万に予約する　かすみ
夢見てる娘に本当のこと言えず　あやめ
母の味夢の中までよく匂い　義美
積む夢に少女が知っている蕾　与呂志
晩成も大器もならず夢終る　正敏
夢のまま眠ったように母が逝き　久仁於
税務署へ行く日の夢が悪かった　木魚
結ばれるまではバラ色だった夢　刀水

夢楽し夢また悲し老いの坂　新一郎
熱燗つけ夕べの夢を供えたり　晴子
夢でよいいつかこわれるしゃぼん玉　和子
夢袋さげて女の一人旅　景子
裏道で夢を抱いてるこぼれ種　森脇和子
一人住む一人の夢の鍵の音　重人
大盛の飯少年に夢がある　可住
いい夢に朝のコーヒーすばらしい　宵明

佳

反骨は夢を抱かない男です　悟郎
いい夢を獏に喰わせたこともあり　泰子
夢持たぬ男の好きな軍艦マーチ　英子
生き難くせめて大きな獏を飼う　枯梢
石女の乳ふくませた夢を見た　玉恵

人

八月の夢にときどきうなされる　はつ絵

地

夢いつも泡雪となっている惰性　道子

天

どの夢を柩の土産にしようかな　規不風

竹

古谷節夫選

竹藪で鳴く鶯のまだ音痴　右近
越境をした筍が膳にのり　義美
我家にも竹がちょっぴりすねて生え　美恵子
住む人もなく七夕の竹が伸び　幸泉
精いっぱい明日へ伸びる竹の節　春美
余生なお信念曲げず竹の青　伊津志
百までは生きる竹かご背負う母　芳枝
婆さんといい仲で来た火吹竹　代仕男
竹帛に残す名もなく年老いる　浪速子
箪笥に聞けばすなおな女です　重人
竹とんぼ飛鳥の里のみやげ茶屋　文子
竹林に響く嵯峨野の鐘をきき　冬子
竹藪の私語聞いている石仏　たず子
竹割ったような気性に親が惚れ　七面山
竹藪を抜けると庵主の目が迎え　博友
静寂を覓が刻む奥座敷　甲子郎
石段が急善意信じた竹の杖　三五島
竹垣は京の風情や流し麺　実男
亡母の味思い出させる竹の皮　八重
したたかの妻に青竹踏まされる　宵明
親方の竹刀が綱を締めさせる　四郎
竹割った気性ですねん金が無い　どんたく
竹槍はまっぴらご免と竹はのび　静水
竹藪を逃げるビルマの負け戦さ　正敏
竹光も研げば魔女を斬れるかも　ゆう也
一徹な一言居士で竹が好き　弘朗
竹林の葉ずれに謀議はたと止み　本蔭棒
舟竿が矢切りの渡しから唄う　規不風
民芸が故郷に残る竹細工　悠泉
縁遠い娘へ箪笥は頼られる　花子
竹雲斉の竹篦だけで床に映え　綾珠
藁屋根に飛んでたままの竹トンボ　素身郎
湯加減を訊ねてくれた火吹竹　赤木和子
竹笛で呼べば雲雀は舞いおりる　里風
竹槍のかなしき日記母が持つ　明水
竹細工阿波のおどりは腰を曲げ　明水
大地震のうわさで竹は伐らず置く　やすお
贅尽す四角な竹の床柱　一止
竹踏みをトントントン与作が好きな父　景子
竹取りの翁の夢が見当たらず　文子

佳

竹筒を振ると銅貨の音ばかり　カズエ
竹を踏む足で始まる母の朝　英子
竹かごを編む手静かに過疎守る　森脇和子
竹林に美女を添えたい雨上り　恵美子
竹馬の高さに夢を弾ませる　豊

人

正論を吐いて男は竹で居る　洛酔

地

銀婚の妻へ着せたい竹の柄　喜酔

天

十戒を背負って雪に耐える竹　雄々

軸

一坪の庭へ竹の子背伸びする

川柳塔柳箋
一冊　二百円
送料　二百四十円

初歩教室

題 ― 人 気 ―

本田恵二朗

お茶の間の人気さらったおしんの目　玉恵
（おしんちゃん茶の間の人気一人占め）
芸人の人気落した白い粉　峰雪
（芸人の人気さらった白い粉）
失った人気返らず消えた星　照子
（失った人気は流れ星に似る）
（流れ星のように人気が消え落ちる）
のびのびと育った腕白人気者　よし津
（腕白です人気者ですよく育ち）
人気者陰で大きな荷を背負い　年代
人気など意識せぬからある人気　同
（あの笑くぼの底に人気秘めている）
おばあちゃん可愛ゆく老いて人気者　与志子
サインする数が人気のバロメーター　同
（人気上昇サインの数が物語る）
下積みの長い努力に咲く人気　晴彦
（下積みの長さへ咲いた人気花）
風見鶏人気の風の向きを読む　同
（人気風の向きを読みとる風見鶏）
竹割ったようとは人気者の謂い　一止
（竹割ったような男で人気者）
団地妻人気とりたさ厚化粧　わたる
（厚化粧で人気とりたい団地妻）
人気者という看板が重くなる　幸泉
（人気という看板そろそろ重くなり）
人気振り捨てて主婦の座守り抜く　芳水
（いさぎよく人気振り捨て主婦に生き）
この店の人気の秘密はかくし味　柳五郎
人気が出コマーシャルにも顔が出る　同
（CMに買われるほどの顔になり）
作られた人気におぼれ罠に落ち　貞子
人気者いつも話題の中に生き　同
（人気者活題の海で抜手きり）
ここ一番人気力士に熱こもる　まさ
タレントの人気ばかりが先行し　同
（先走る人気へタレント乗りおくれ）
人気絶頂原点忘れてすべり落ち　あや子
爆発的人気津波のように引き　同
（津波的人気津波のように引き）
特種に追い廻される人気者　キミ
人気出るまで忍耐という敵に勝ち　同
（血と汗でつかんだ人気で敵を抜き）
マスコミが人気スターを作り上げ　保夫
（マスコミが人気スターをでっち上げ）
裏口から人気スターが雲隠れ　同
つまらないことがニュースになる人気　武水
作られた噂へ人気上下する　同
（作られた噂が人気値踏みする）

安藤寿美子さん（豊中市）より
亡父満中陰の御供養として
金一封
拝受致しました。
川柳塔社

人気とは突如吹き出し消える泡　やすを
（泡のような人気背負っている不安）
好調に乗った人気の勇み足　同
ブロマイドの売上げ人気のバロメーター　美恵子
サーカスの人気を二分するピエロ　同
（サーカスの人気ピエロが盛り上げる）
会長がナウイ夫婦で慕われる　ちよ
人気あり努力は知らず妬み持ち　同
（努力で勝ちとった人気を妬まれる）
牓山の人気大麻に吸い取られ　忠広
政治家は橋と道路で出る人気　同
（橋と道路で人気を作る政治屋さん）
マスコミが巧みに作る人気者　春枝
無名校人気をつかむ甲子園　同
（無名校が人気つかんだ甲子園）
自販機の人気言葉を忘れさせ　柳右子
ネオン街ツケ廻りくる人気者　同
（ネオン街のツケに追われる人気者）
あいきょうと度胸に虚し人気者　わたる
笑わせて面白がらせるカラ人気　同

（笑わせるただそれだけの空人気）　久子
太目です美女ではないが人気者　同
鼻先に人気ぶらさげ歩く奴
（鼻先にぶらぶら安っぽい人気）
（安っぽい人気を鼻にぶらさげて）　三男
下積み耐えた人気は衰えず
（下積みに耐えた人気にある強味）
作られる人気に踊ったあさはかさ　同
（作られた人気に踊り過ぎて堕ち）
人気が出てから怖くなる私生活　刀水
（人気上昇プライバシーが気にかかり）
人気が出て来ている敵も増えている　同
（人気上昇敵一人ふえ二人ふえ）
先走る人気に実力ともなわず　山久
（先走る人気へ実力ついて来ず）
人気など気にせぬ実力底力　同
（人気など気にせぬ男の底力）
ファンをば将棋倒しにした人気　胡頽子
（長蛇の列将棋倒しにした人気）
人気に酔って初心が忘れられ　同
（酔いしれた人気が初心置き忘れ）
ミーハーの線香花火という人気　勝美
（ミーハーの人気は線香花火めき）
人気ある蝶々が花を選り好み　實
歌手の人気一夜で列島駈け抜ける　同
（人気歌手一夜で列島駈け抜ける）
人気絶頂あしたが怖い風の音　紀久子
金で買った人気はすぐに下り坂　同
慾のない子役に人気さらわれる　同
（慾知らぬ子役に人気もってかれ）　ふみ
アイドルの歌手の人気は命がけ　登舟
高見山勝っても負けても人気者　露芳
タイガースの人気に強さ伴わず　同
マスコミは子役のおしん放っとかず　兼治郎
歓声とテープが人気を盛り上げる　同　みつる
空港の出迎え人気のバロメーター
お医者まで人気稼業に数えられ
大麻の葉ゆれて人気を地に落す　同
雷のようないびきで人気者　同
当日券プレミア付きで翔んでゆく　寿美
プライバシーあばく人気の有名税　同
バトンタッチおしんは矢張り人気者　同
褒めたくはないがライバル人気者　幸子
底抜けのお人好しです人気者　同
人気者脳の切れ味別として　同
金無くも男らしさが人気呼び　昭治
人気者家に帰れば無口者　同
実力があるのになぜか人気なく　同
咲いて散るそんな人気にしがみつき　寿子
スキャンダル売って稼いでいる人気　同
一ランク置いて人気の灯を守る　同
一本のレールに賭けてみる人気　同

（恵二朗短信）

課題吟作句の場合、この題は類想句が沢山現れるであろうと思ったら、類想句は絶対現れぬと思える句材の発見に全力投球をせねばならない。

題―**楽**（らく）―**8月20日締切**（10月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
〒七一一　**本田恵二朗**

川柳塔社常任理事会（7月1日）

出席者＝栞・薫風・水客・紫香・潮花・敏柳宏子・形水・雀踊子・与呂志・岳人・寿馬
史好

〈議事並びに報告事項〉

★58年度大阪市文化祭川柳大会は11月12日(土)と決定。川柳塔社からの選者は西田柳宏子、田中笑風の両氏。詳細は追って本誌に発表します。（与呂志氏より報告）

★直原玉青先生の大作「大阪城四季図屏風」が大阪市立博物館に寄贈され、祝賀パーティが7月7日午後4時からアクティ大阪で開かれる。

★好評の朝日新聞大阪版「この一句」(月曜掲載)が6月で打切られた。残念至極。「なにわ柳壇」は続いているが、川柳の普及に貢献したこの欄、皆で大いに盛立てていきたい、と薫風氏より事情説明あり。

★羽曳野市図書館のすべり出しは上々と敏氏より嬉しい報告あり。

■**8月**の常任理事会は**1日**（月）

柳界展望

（原稿締切毎月末）

集録・香川酔々

■兵庫県民川柳山陰大会が左記要領で開催

時　昭和58年8月7日（日）11時開場・12時半開始

所　豊岡市日和山遊園乙姫荘

宿題と選者

かに　当日発表

方言　吉田　か代選

神話　鳥本　泰選

人情　室田　千尋選

叢る　小松原爽介選

風紋　大伴破智郎選

土産　吉田　湯北選

席題　なし・各題2句

締切り・12時30分

会費　500円・欠席投句

拝辞

表彰　各題優秀作品に賞を贈呈

懇親宴　会費一万円

（宿泊代、定食の他に蟹料理）

希望者は左記へ

（7月31日迄・30名）

〒669・61　豊岡市瀬戸118　吉田湯北宛

主催　兵庫県川柳協会

■柳都創立35周年記念川柳大会は7月10日新潟厚生年金会館で開催、二百八十名参加の盛会だった。本社から橘高薫風、板尾岳人、林はつ絵、奥田みつ子、藤田泰子の五氏が出席、泰子さんは十二位に入賞、岳人、はつ絵両氏は奨励賞を受賞

■日本川柳協会主催の第七回全日本川柳大会は6月12日静岡県下田市で開かれ全国から四百数十名が参加した。事前投句の三題には四千六百九十句が寄せられた。文部大臣奨励賞「髪洗う母におんなが残される・吉田秀哉」川柳大賞「何よりのしあわせ母乳ほとばしる・中村孤舟」大会賞「岩田帯締めて半分母になり・鈴木輝次」「勝連に乗ると相手が小さく見え・竹本瓢太郎」「古文書が語る本家の枷を知り・近藤紫風」「帯の下あたりに言いたいことを溜め・森中恵美子」「北斎の浪大胆に富士洗う・井村十万人」。

■川柳歳事記（奥田白虎編創元社刊）が上梓された。とにかく労作・力作である。やっと川柳人も俳人の前で歳時記だって、まさるとも劣らないものを持っていると肩を張ることができよう。本社同人の作品も相当数掲載されている。例句をあげてみよう。どこへ行く水かつつじの色を乗せ（潮花）若菜摘むしあわせそうな背を向けて（月子）おはぐろ蜻蛉川の流れに逆らう気（栞）等々。枚挙にいとまがない。同人誌友各位は是非一冊を机上に備えられたらよい。まさに「洛陽の紙価貴し」にぴったりの名編著である。

▽同人・柳友消息△

▼本田恵二朗氏（倉敷市）6月3日の山陽新聞に「人生を織る」と題する随想を寄せられた。

▼奥谷弘朗氏（倉吉市）鳥取県石ぶみ文学史に、弘朗氏句碑「北壁の男らしさを見て飽かず」が所載された

▼国弘半休門氏（下関市）の令夫人が心臓病のため、去る6月3日逝去。行年75歳。謹悼。

▼川上大輪氏（三重県）は勤務校近大付高新宮高校で新三年生対象に川柳教室を開設された。

▼山口美穂さん（神戸市）今年も「もえぎ会展」（7月7日―12日）に異人館を描いた日本画を出品された。

▽本社へお便り△

甦光、美智子、登志代、客遊子のみなさん。

▽句会案内△

■菜の花句会

時・8月10日（水）夕6時

所・高松会館（環状線寺田町駅下車歩6分）

兼題＝軍歌、花火、途中、峠、頼る。

■東大阪川柳同好会

時・8月27日（土）夕6時

所・東大阪社会教育センター（近鉄布施駅より北5分長堂小東口）

兼題＝言葉、おしぼり、昼寝、氷。

■駒つなぎ川柳会

時・8月22日（月）夕6時

所・高松会館（寺田町）

兼題＝新幹線、変化、洗う、地獄。

■南大阪川柳会

時・8月19日（金）夕6時

所・高松会館（寺田町）

兼題＝成り行き、日課、ぬくもり、猫。

■南海電鉄川柳部

時・8月18日（木）夕6時

所・南海会館ビル本社地下食堂

兼題＝テープカット、由来、鉄則。

第19回路郎忌

本社 七月句会

会場 なにわ会館
七日 午後六時

今月は都合で洋間の会場。結婚式に使われる広間で、豪華なシャンデリアが輝き、路郎忌にふさわしいというか、或いは路郎先生のこと、地下で苦笑しておられるやも知れぬ。番傘はじめ他柳社から多数ご出席を得て、華やいだ雰囲気は一層盛り上がった。

阿部柳太氏が「今日は保護者（花楢さんのこと）なしで来たら、おかげで会場を間違うて以和貴荘へ行ってしもた。あわてて駆けつけたところ…」と、のっけから笑わせ、路郎先生の想い出へ話が進む。戦時中、酒がなかった頃、路郎先生は清水白柳さんの家へよくやってきた。宮大工の白柳さんが仕事をしている傍でゴロンと横になって、酒が出るまで帰らない。奥さんとしては「人が仕事して汗かいてるのに、横で寝ることだけはやめてほしい」と白柳さんに愚痴の一つも出る。「いや、職業もなし、恐らくメシも食うとらんやろ、寝るのも無理はない」と白柳さん。路郎先生の人間的な一面を物語るエピソードである。

今月の月間賞は正本水客氏が獲得された。（史好記）

（受付―与呂志・敏）
（記録―射月芳・健司）
（進行・岳人）

出席者―操子・幸代・さよ子・英子・桂太楼・登志代・浦野和子・きみ・光代・武雄・喜酔・伸子・幸生・頂留子・度・赤木和子・重人・雀踊子・湖風・楓楽・小路・規不風・寿子・春巳・柳伸・入仙・元紀・満津子・右近・兼治郎・勝美・水客・眉水・綾珠・柳影・恒明・喜風・太茂津・白兎・幸・悦郎・柳宏子・たつお・三十四・狸村・景子・藻介・冬葉・トメ子・洋敏・吸江・萬的・柳太・勝晴与呂志・岳人・鬼遊・笛生・育園・寿美・滋雀・春蘭・美智子・郁栄・紫香・潮花・千万子・春江・はつ絵・白水・射月芳・史好・栞信治・酔々・凡九郎・山久・蕉露・風童・敏天笑・月子・いさむ・萬楽・恵美子・健司・薫風・文秋

席題「腹」　中尾藻介選

ボーナス期社長ちょっぴり腹を見せ　勝晴
腹の内読まれて言葉にごされる　トメ子
三段腹めっきり脚が弱くなる　信治
欲のない腹やと思うバイキング　洋敏
熟年の腹へズボンを買替える　勝美
腹の立つはなしを聞いたまねき猫　湖風
禁煙の効果ちょっぴり腹が出る　たつお
腹に巻くへそくり寝る時には困る　眉水
お目出とう腹の底から出た握手　滋雀
腹をさすってこれから鰻丼平らげる　太茂津
地球冷えて腹据えかねることばかり　浦野和子
詰腹を切らねばならぬ小の虫　たつお
夜間金庫の腹は時々嘘をつく　元紀
強い男が気味悪いほど腹立てぬ　郁栄
腹ポンとたたけば音がした丈で　凡九郎
空腹をこらえた頃の青い空　元紀
腹きめて受けるグラスを笑われる　小路
腹の中あかすと付が逃げそうで　山久
心電図の結果を腹の底に置く　白兎
腹痛で寝た日曜がアホらしい　眉水
ゴムひもの跡が残った腹の皮　酔々
企みの腹は和尚が見抜いてる　郁栄
砂時計の速さで腹の減る子供　英子
笑えない話は腹に溜めている　悦郎
横綱の邪魔にならない腹である　笛生
肚のある男居ねむりばかりする　武雄
仏壇の前で最後の腹をきめ　吸江
ありがたいことに腹がへってきた　重人
腹芸のひとつ女将は笑うだけ　萬的
腹の虫野菜サラダを欲しがりぬ　岳人
腹一ぱい食べたと子供正直に　笛生
腹帯をする平凡に育てよう　恵美子
満腹でいつも何かに飢えている　太茂津

ほていさんの腹だと妻に言い聞かす　度
腹の内読めて男について行く　幸代
持ちなれぬ札束を持ち腹が冷え　鬼遊
両腹が痛いとどういうことになる　眉水
腹八分では収まらぬ生ビール　右近
腹いせにけった小石がはね返え　柳伸
子の寝顔腹はたてないことにしよ　重人
腹立てるのを止めたのに腹が立ち　藻介

席題「特訓」　森中恵美子選

風止んで特訓の味噛みしめる　白兎
警察犬の手柄に特訓尚つづく　規不風
特訓に情けはかけぬ声が飛ぶ　喜酔
特訓はひっきりなしに花鋏　酔々
特訓の鬼を胴上げする歓喜　武雄
特訓のヨットをこわいとこと知る　赤木和子
特訓をするのは江川だけでよい　藻介
女弟子に特訓なにかありそうで　いさむ
特訓へライバルからの果し状　寿子
窓ぎわの椅子で特訓眺めてる　幸
浪人がはちまきをする塾の窓　鬼遊
夏山の特訓雪が呼んでいる　美智子
セールスの特訓足を棒にする　萬楽
特訓に途中下車などしない筈　白兎
特訓でやっとやる気が出たらしい　月子
障害特訓馬の哀しい目に出合う　信治
特訓のあとのビールを楽しみに　健司
特訓の疲れは正確に残る　藻介
特訓に堪えて将来約される　笛生
特訓の汗に焦りが見えてくる　水客
ダービーへしごきにしごく馬の汗　たつお
落ちこぼれトツカヨットが待っている　鬼遊
特訓が泣かぬ男をつくり上げ　蕉露
厳しいしつけで女のなさけ叩き込む　規不風
特訓を重ねて樹にはなれない木　はつ絵
特訓で崩れた積木積み直す　射月芳
なさけ深い特訓人がついてくる　郁栄
特訓に男の涙はいらぬもの　蕉露
特訓をさせてる方が疲れ切る　柳宏子
特訓を受けて特攻隊にされ　元紀
エデンの園に女をしごく罠がある　桂太楼
特訓の犬はかなしく痩せている　白兎
特訓へ父に借りたいものがある　小路
背を向ける妻の特訓かも知れず　規不風
特訓の男へ生卵を飲ます　重人
ライバルが100回飛んだ兎跳び　藻介
特訓は女性ファンが恐いから　柳伸
特訓へ飛ぼうとしない竹トンボ　元紀
七月のヨットは特訓から逃げる　幸代
特訓へ母の大きなにぎりめし　恵美子
特訓はハワイに決めてみたものの　文秋

兼題「いけにえ」　河内天笑選

合理化のいけにえとなる生き字引　正坊
肝臓をいけにえにして今日も酔い　耕花
女幾人いけにえにして文学碑　史好
いけにえにされた市民の票が減り　与呂志
いけにえの覚悟も出来たミーティング　小路
いけにえが出たので役所腰を上げ　酔々
いけにえになるのも知らずトコトコと　萬的
スポットライトへいけにえに似た少女歌手　凡九郎
君の顔ではいけにえになれまへん　狸村
いけにえの豚は静かに目を閉じる　湖風
月を背に座すいけにえが美しい　湖風
いけにえとなる黒髪をほどくなり　藻介
いけにえがブスで神さま怒りだす　湖風
いけにえのほしいネオンがはでにつき　頂留子
三年目の浮気いけにえの日々でした　栞
いけにえを喜ぶ神がいて困る　美智子
受験地獄のいけにえとして暴走死　楓楽
農薬のいけにえ蛍の情死行　寿美
訪う人もなくいけにえの碑は風化　右近
気の弱い人を白羽の矢が狙う　満津子
白い粉のいけにえとなる好奇心　景子
人身御供の少女はやがて神になる　たつお
花嫁の父いけにえの如く立ち　重人
いけにえの視点ずらせば虹が見え　光代
いけにえにされる蛙の目がまるい　鬼遊
いけにえになったなったと妻は言う　恵美子
コーヒーのいけにえのよう角砂糖　赤木和子
思い上っていけにえになりましょう　藻介
ウィルスと戦うあわれモルモット　入仙
いけにえを何人買うてきた財布　幸
いけにえに何時でもなれる位置にいる　白兎
いけにえにされ左遷地で生残る　柳宏子
伝説の沼いけにえの色を抱く　水客
いけにえのそれも十五の春とかや　栞

いけにえの木馬に誰も気づかない　元紀
いけにえにされてリンゴは横を向く　岳人
生贄の島血の色をした県花咲く　楓楽
少女Aの犠牲がいつか忘れられ　水客
いけにえにされる小さな正義感　満津子
いけにえは神と祀られ忘れられ　蕉露

兼題「転向」　香川酔々選

甘党に転向してから友が減り　どんたく
子を旅に出して突如と拝みだし　耕花
転向が富をきずいて愛国者　堕駄
変り身のよさ転向とは言うてない　凡九郎
転向がこうなりました別れです　小路
転向へ妻が早起きしてくれる　登志代
転向は香水までも変えたらし　恒明
転向して判った世間の温かさ　滋雀
転向はしないこの掌に期するもの　悦郎
あざやかな転向泥舟を乗り換える　水客
転向をしても末席に変りなし　赤木和子
転向の意志が鈍った流れ星　紫香
転向に踏切る男の子が生れ　潮花
転向の舵は妻子にさわらせぬ　滋雀
転向を余儀なくされたカタツムリ　柳宏子
転向をして憑き物が落ちたよう　右近
転向をうながすような花の色　白兎
転向を思う尾灯は赤である　白兎
子が出来てから体制の旗を振る　たつお
宮大工から建売りの釘を打つ　恵美子
転向へ一ぺん来いと師の電話　小路
転向したそうな金貯めているそうな　浦野和子
転向の作家ポルノがうけている　いさむ
賞をとりそれから作家になる女優　景子
道具だけ揃えて趣味がまた変り　春巳
転向の男むかえる吊し柿　信治
マルクスをいつか忘れて父となる　たつお
転向へ思わぬ知恵が湧いてくる　登志代
甘党に転向アミダの線を引き　春巳
転向の妻特高を忘れない　柳太
転向を自分自身に言いきかす　柳宏子
六道の辻で転向考える　幸栞
鮮やかな転向年上の妻がありアルバイトニュースを買いに行った釘　健司
転向をすると嘘だけ残される　与呂志
生きるため踏まねばならぬ日の踏絵　たつお
転向を他人は金のせいにする　幸生
死刑囚の鬼から神になる聖書　鬼遊
転向をしたらウナギが食べられる　藻介
踏み絵からころび伴天連無口なり　鬼遊
肝臓のせい甘党に票を入れ　酔々

兼題「貫く」　磯野いさむ選

終始一貫頑固で通し蚊帳の外　幸一
父の胸長持ち唄に貫かれ　耕花
貫かねばならぬ男の地図がある　寿子
勝算はどうあれ貫く労働歌　恒明
独身主義を貫く人の遠い傷　たつお
言い出せば貫く意地がある亥年　文秋
補聴器を貫く厭な言葉尻　太茂津
貫いて野球の虫と言うもよし　柳影
家建てるまでぜいたくに振り向かず　月子
信念を貫く彼へ首ったけ　光代
突貫へ甘い言葉を拒絶する　千万子
朝茶粥貫き通すパン嫌い　太茂津
貫いた男まさりに更年期　入仙
若さよし初志を貫く眉やよし　幸生
男四十初志貫徹にある惑い　眉水
サラ党で終始一貫青木八木　萬楽
甍二丁僧洞門を貫通す　右近

第19回水府忌
番傘8月句会

とき　**昭和58年8月6日(土)　夕6時**
ところ　大阪市立労働会館
国鉄大阪環状線・地下鉄中央線・森ノ宮駅下車すぐ
かいひ　５００円
お話　正木素娥
宿題　南出陽一選
波　森中恵美子選
姫　玉野可川人選
いたずら　橘高薫風選
覚悟　磯野いさむ選
いい人
席題　一題（三句）締切七時

番傘川柳本社

凡夫婦一夫一婦のお茶を飲み　鬼遊
貫いた意地を噛っている辞表　武雄
初志曲げぬ浪人ぐらし三年目　英子
信念の再審最高裁で勝ち　三十四
綱取りへつらぬき通すがぶり寄り　小路
男なら否認し通すこともある　藻介
鳩が舞い上る中国縦貫路　景子
貫けた初志反対のおかげです　頂留子
半生を貫き通す嘘一つ　水客
ほしいもの手にするまでを泣き止ます　柳宏子
初志貫徹ひとり芝居がまだ続く　水客
北浜で一銘柄に勝負する　萬楽
風に乗る噂は胸を貫通す　白兎
焼とりの串で貫く天の川　恵美子
貫いた初心を風はわらうけど　はつ絵

水煙抄《追加》

島根県　堀江百代

真実一路生きて来た道悔いはなし
人生のドラマの道はつづら折り
年輪を重ねかさねて仰ぐ月
地球儀を廻し日本をさがす一家
振り向いたとたんに笑顔が返って来

貫いた芸へ国から文化賞　三十四
貫通の発破地底の男泣き　たつお
大西部ただ一本の道貫けり　史好
参議員当選女優はやめませぬ　吸江
独身を貫き通す総婦長　笛生
桂浜意志貫いた像二つ　信治
青函トンネル日本人の意気を見せ　勝美
貫いた恋は王冠ポンと蹴り　酔々
この愛を貫く誰が泣こうとも　赤木和子
花道に寛美貫くものを持つ　信治
マラソンへ完走出来た七十五　操子
目の黒いうち守り貫く赤字線　小路
グラウンドに生きる一生高野球　いさむ

兼題「ボタン（釦）」　西尾栞選

馴れ初めはカフスボタンを褒めてから　幸一
貝釦やさしい母の瞳と出合う　紫香
天皇の釦落ちてた二重橋　岳人
倦怠期オヤジのボタンとれたまま　月子
とれかけたボタンで今日も逢いにくる　英子
憎らしい男に釦はずされる　郁栄
ボタン三つ出て来た洗濯機の修理　兼治郎
七人の敵七色のボタン持ち　千万子
貧乏も楽しからずや釦付け　勝美
ボタンひとつ胸の鼓動を聞いている　寿子
アルバムに七つ釦の亡父がいる　柳影
袖ボタン一個はとうから取れたまま　与呂志
万一の一が不安な核ボタン　文秋
女秘書ボタンのゆるみ見逃さず　与呂志

この事件の決めての釦光ってる　柳影
ツッパリのピカピカ光る金釦　柳宏子
逢えそうでアザーのボタンを押して見る　潮花
ボタン掛け直して話改まり　滋雀
密室の証に落ちていたボタン　小路
閉のボタン押してしばらく孤独なり　景子
とれそうな背広の釦に似た夫婦　萬的
ボタン付け慣れて下宿の子が戻り　喜風
エリートのカフスボタンにある誇り　伸子
貝ボタン少女の胸に海のいろ　鬼遊
けなげにもボタンをつけてくれたひと　天笑
自閉症あかいボタンと対話する　寿子
針箱に亡母が残した貝釦　笛生
内ポケットの釦まだまだ酔うてない　小路
流れ星胸のボタンが遠ざかる　柳伸
ボタン穴掛け違うたままの人生譜　寿美
言い訳のボタンかけたりはずしたり　恒明
きっちりとボタンをはめて行く戦　美智子
ボタン外したら汚職の誘いが来　三十四
釦一つ落とし落目な男とも　笛生
二つ目のボタンを外してから本音　幸生
着古したボタン大事にとっておく　さよ子
窓際でボタンを一つ付け替える　太茂津
新任地ボタンをかけて駅降りる　はつ絵
かけ違った釦のような夫婦です　綾珠
穴のないボタンは悪魔が持っている　眉水
かぐや姫釦も上手に付けました　岳人
飾りボタン男嫌いと言わせとく　水客
似た釦探してくれている寒さ　栞

勝山双葉川柳会　　鈴木　節子報

本箱を満たして心憩う日々　　寿美
純潔をなくしてたくましくなる女　　柳伸
店閉めて今日一日をふり返る　　ふみ
憶測にドアは黙して語らない　　頂留子
本棚へ飾っておこうと思う本　　芙佐女
失うた愛も自分の勝気から　　ハル子
失うた若さいとしく喜寿祝う　　勝子
ほほ笑みを失ったのは風のせい　　智慧子
輝きが欲しく本箱友にする　　楓楽
夜具の中今日一日を反省す　　喜美子
本箱に子供の吐息も籠ってる　　いくの
緊張してドアの開くのを待っている　　藤子
本箱のわが青春は閉じたまま　　好子
新幹線の別れをクールにするドア　　洋子
縁うすき姉へ今夜も電話する　　千里
反省をゆっくりさせる終い風呂　　智子
泥んこの汗は反省などいらぬ　　節子

聴障川柳　　稲田　豊作報

来客に母よそ行きの顔になり　　文吉
暗い日は母の笑顔が灯を点す　　豊作
難聴は顔を見ながら声を読み　　一眹
何くわぬ顔反省の影もなし　　承平
夜の街に生きて素顔のない女　　皷草
聴障の友の心の温い顔　　八重美
顔よせて昼寝している双生児　　たみ
貧しさを笑顔で埋める嫁がいる　　たかお
気疲れの顔も知ってるコンパクト　　和江
笑顔すると人も笑顔をして呉れる　　春一
生ぬるい風が福祉の顔をなで　　とみ江
ペダル踏む笑顔笑顔とすれ違い　　睦美
只今で顔がほころぶ子が戻り　　早苗
不用品断りかねる顔見知り　　行江
菜葉服働く男の顔になる　　常雄
困ること言わない母の丸い顔　　民栄
牛市の戻りは皆んな暗い顔　　紫葉
逆境に母は笑顔を忘れない　　珍顔
忍耐で獲ち得た今日の笑顔です　　三代子
親の顔小さく見える大学出　　案山子
顔役の妻です家計簿赤字です　　千代女

南海電鉄川柳部　　広井すえお報

血圧か地震か天井揺れている　　雅風
人間が小さく見える地震事故　　花仔
切り方で決まる料理の上手下手　　さゆり
演技派と呼ばれる過去は切られ役　　覚然坊
盆栽の一枝切るに小半日　　千万子
人物を斬る評論家もてはやし　　さよ
首を切る通知人事課譲り合い　　綾珠
病魔から縁を切りたい百度石　　東雲
親子です名乗らなくても判る親　　すえお
話し合い世代のちがい知る親子　　とし子
四十越し蔦がたかを生みました　　いづ枝
屋台守る母子の動作が瞳にしみる　　悦郎
泣きにきた子へ鬼になる親の愛　　春蘭
あこがれの私鉄に入社母安堵　　百梅
不通になって私鉄が感謝され　　圭水
他社よりも数分早いダイヤ組む　　さだお
国鉄やれぬ経営私鉄やり　　信江
私鉄にはそれぞれ自慢の顔がある　　勝美
京阪が俺らの足となる勤め　　山久

岸和田川柳会　　植山　武助報

用意する手際も亡母によく似すぎ　　真柳
勝負師の夢ひきずったちびた靴　　由高
水郷の昔のままを自慢する　　狸村
茜雲明日へ夢をふくらます　　ひで
利己主義の男に燃えるものがない　　射月芳
恋唄のアンコへ御神火燃えている　　ゆづる
電車賃高いようでも安いもの　　希久志
ふるさとを出る背に母の瞳が痛い　　こう
サロンパス貼って手作り陽が沈む　　せつ子
ツバクロは育った家の単に帰り　　佳生
倖せを背中合せにいる不幸　　春栄
女の子一人はほしいと思う日も　　さよ子
古傷が親子の名乗りさせた孤児　　浪速子
残り火を燃やすうれしい趣味が出来　　武助
それなりに写る鏡が気に入らず　　甘平
燃えていた頃懐しいひとり酒　　世界人
御無沙汰はお互いさまの筆不精　　白光子
美人とは言わず化粧をほめて去に　　富志子
日曜を兼高さんと旅をする　　操子

打吹川柳会　　奥谷　弘朗報

ボーナス日妻が朗らか酌をする　　吉朗
朗らかが苦労の波も受けて消し　　梅朗

朗らかさ度がすぎ妻を案じさせ　孝美
老妻は極楽トンボの名で呼ばれ　節子
朗らかさ小利口よりも尊ばれ　亮二
朗らかさに振舞う今日も寡婦の意地　たけの
朗らかな嫁で家庭は丸くなる　高代
朗らかでいいねにぎやかすぎる子に　宗則
朗らかに暮さな損と踊りの輪　寿満湖
この机喜怒哀楽を知っている　幸枝
もみじの手机に頬杖パパの真似　ゆり子
苦悩積みやっと手にした朗らかさ　康子
又座るつもりの机連呼聞き　柳風
口惜しさを机のきずに思い出し　佳成
青春の夢を机に問うてみる　松女
窓際の机人生見えてくる　弘生
美辞麗句不沈空母の机武者　三男吉
朗らかな男に明日の顔がある　弘朗

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

缶コーヒー孫とわけ合う動物園　弥山人
この恋は実るコーヒー知っている　　度
味園のコーヒー老妻との出会い　三十四
コーヒーカップ二つドラマの幕があく　孤舟
初心の頃を思い出しつつ弾くお琴　綾珠
ヘルスメータおのれにっくきカロリーめ　頂留子
カロリーはチンプンカンプン生きてるよ　恒明
カロリーは孫のお皿に盛ってやる　良京
カロリーはカロリー私の好きなもの　凡九郎
好きな酒パパカロリーと一人決め　喜風
カロリーの過保護肥満の子が育ち　慶三
カロリーを気にするママの肥満体　白屯
カロリーはどうあれ美味いチャンコ鍋　滋啓
カロリーの不足は焼トリ屋へ通う　かずを
つまみ喰いしてもカロリー知っている　柳伸
カロリーを使いはたした茜雲　鎮彦
難民の母の乳房は涸れていた　湖風
とまり木でカロリー計算はしない　律子
カロリーは充分腹に満ち足りず　柳宏子
祝膳今日はカロリー無視にする　千代子

うみなり川柳会　小林由多香報

声ハスキー黒ぶち眼鏡にある笑顔　雄人
子に追われなぎさの蟹が縦に這い　芳泉
中東の渚使えぬ油浮き　豊一郎
渚からメダカの学校始められ　静生
一歳の孫にも意地が向きを変え　華子
ゼロある日一になりたい野心抱く　盛桜
一プラス一を三にもする男　葉士人
ああ夫婦亡夫と逢う日の花を買う　とし江
遺言の墨は夫婦で別にすり　洋々
過疎の村太鼓も老いの音で鳴り　希満子
春場所の音も晴れやかふれ太鼓　貞山
家訓まだ父の太鼓の音で生き　熊生
五線譜に太鼓は暇な役でいる　日満
激流の根源たどって過疎に佇ち　富美湖
否応もなく源泉の税とられ　一止
源氏名を改め過去の傷かくす　大漁
根雪からポトリ大河へ旅に出る　天涯
源平の戦い平家村残し　由多香

ハワイ川柳ウイロー社　市岡暁舟報

油断なく人生航路に棹さして　公女
あの美人油断しないぞ手が出ない　秀山
油断すなおべんちゃらが多過ぎる　十吉
油断して転んだ痛さ泣き笑い　香夢女
冗談を言っても女油断せず　拝山
油断さす智恵の動きの鋭い目　暁舟
油断してる間に他人どんどん金をため　梨花女
初手に負け油断身にしみ蘇える　黄塵
油断したばかりに生活裏となる　三石
天才も油断し凡夫で世を送り　嗣栄
自己過信油断大敵又落第　カロ女
一寸した油断一生棒にふり　紅渓
油断してこぼした酒をなめる癖　蒼生
一家の破綻は油断積み重ね　彩民
油断せず石橋叩き目もしばり　三十四
石橋を叩いて渡れば立ち遅れ　万里歩
人生は油断の神がつきまとい　高原子
油断せず頑張り通せとさとす母　雪女
油断して汽車に遅れる旅の道　虹宵
油断すながっちり組んだ闘志燃え　張賀

NHKテレビ全国ネット放送

〝よめやうたえや川柳天国〟

日　時　8月16日(火)午後8時から50分間
テーマ　**親　子**
選　者　森中恵美子・橘高薫風その他川柳塔社から大勢協力出演します
☆当日午後七時から電話50台を備え、兼題「**親子**」の作品を受け付けますから多数ご応募下さい
電話　〇六・九四一・九九〇〇番

いずも川柳会　板垣　草丘報

スーパーは女の財布空にする　正江
飛びついて三段跳びの青春譜　孝太郎
広島の空へ少年鳩を飼う　九二老
肩書と一緒に雑費増えてくる　与根一
やりくりの雑費内緒も嘘もあり　秀子
又とないチャンス出番と心得る　軒太楼
スーパーに先取りされた造成地　芳枝
手弁当飼い慣らされて朝の靴　きみえ
御仏へ供える雑費なら歓迎　鐘堂
へそくりを雑費と記帳妻の知恵　ちかし
咳払い父の出番が座を締める　多賀子
出番まだ遠く素振りの日が続く　健太郎
スーパーでやっと役立つ金壱円　幸一
スーパーのサービスタイムいつも妻　草丘
飛びついた欲に煮湯を呑まされる　夢酔
補欠にも出番が廻る負けいくさ　代仕男
六十年明治の味に飼育され　独仙
飛びついて金の成る木の枝が折れ　緑之助

にた川柳会　西村　早苗報

化かせぬと知って化粧のはずまぬ手　夢酔
一仕事終るたんびに腰たたく　三和
出る杭を打たれ強さを身に憶え　裕
ふところを線香花火に狙われる　栄
温室で育ち損ねて少年A　幸一
襟足の白さ位に傾かず　独仙
点滴になって付添い飯にする　亀甲
ものしずか紬の似合う人といる　きみえ
釣銭に時々困る小商い　登美也
年輪へ嫁は家風の味に染み　孝華
野仏も狸ばやしを聞く月夜　花子
涙腺が涸れてピエロが化粧する　多賀子
八百屋お七に陶酔してる友の恋　景子
家を売る話を覗くおぼろ月　鉄花人
家風まで塗り替える娘へさからわず　雄々
とぼけ上手になった女が怖くなる　雀踊子
土塀から昔の声が聞こえそう　〆女
六月の風従えて旅に立つ　寿美子
どしゃぶりに足にぶらせる石だたみ　早苗

富田林富柳会　藤田　泰子報

一枚の紙がなさけを待っている　維久子
母の樹に父のなさけが少しある　岳人
居酒屋で拾うなさけがあるスラム　与呂志
老人になさけをかけて叱られる　トシエ
投げられた石の波紋の中にいる　ケイ子
石一つ生きた死んだと盤睨み　正信
石蹴りをしいしい登校の列みだれ　美津子
叱られて石けり上げて朝の道　森子
やけ酒は石も一緒に飲んでいる　治郎
山彦がわたしに石を投げつける　泰子
捨石がもの言うときを計算し　勇
世をすねて花に背を向け石仏　幸一
ここからは他人同士のスリガラス　澄子
げんまんの指から流れる四季の雲　美代
なさけには弱い男で的になる　花梢
又来ると出来ぬ約束する男　美佐子
約束は出来ぬとあじさい花の彩　慶子
約束をしてから鎖ほどけない　美房
投げつけた小石が妻の部屋にある　冬二

川柳堺学文路大師吟行　河内　天笑報

自我を捨て波乱の中で目をとじる　久子
断わりがポストに重い雨の音　豊太
環状線ぐるぐる思案まだつかず　たつお
車より電車が楽と孫も言う　東雲
水ばしょう今年も無事に咲きました　春蘭
徳慕いお水いただく南無大師　茂一
園長さん乗せて元気な縄電車　柳宏子
一癖のあるが男の魅力かも　秋風
断わりが苦手で妻をやっておく　眉水
この先をどう断わるかで夜も白み　道女
急行が臨時に停る花の里　重人
ローカルの情けを知っている電車　浩一郎
断わりの言葉を探す風見鶏　紫香
朝の電車にエネルギー詰めてある　節子
一癖もお愛嬌だと親しまれ　修
あらたかなお水へ遠い切符買う　天笑
お神水しっかりかえて乗る電車　木魚
山百合が匂う学文路のお香水　酔々
とぼけてる顔に一癖のぞかせる　春江
断わりをさりげなく言う年の功　年代
幽霊が乗った電車にのり合せ　武庫坊
一癖ありそうな男の河内弁　〆女
墓石へ惚れてましたとかける水　千寿子
人妻を庇うてからのひと波乱　千万子
月給を運ぶ電車だ押されよう　キミ
断わると決めて仰いだ空の青　光代
美しく生れて波乱の道を行く　紀美女
朝の水ゆうべの愚痴をみな流し　月子
不気嫌な電車で今日はよく揺れる　金太
イエスマンばかりを乗せて出る電車　幸
善人の意外と思う癖を見せ　左久良
一癖に惚れた苦労に悔いはない　武雄
美しい断わりを言う泣きぼくろ　英子

井戸水でお粥を炊いて市民税　天彦
水面下の動きが明日をつくり出す　狂虎
土に生き水の命を知りつくす　一二三
波乱ありそうな序幕は闇になる　与呂志
他人様の水にもなれた無精髭　善太
終電にちょいと間があるのれん酒　萬的
お神水こんなに旨いにぎりめし　太茂津
悲しみのわかる子がいる縄電車　雀踊子
終電にたまには妻も乗ることだ　智子

川柳たけはら　蕎居報

がまんしたちゅうしゃおとこのこがないた（保育園）　あきみ
チクりちゅうしゃがまんしたんだよ（保育園）　はるみ
〝くす玉〟となかなかにうずに書けません　小三　純平
ふるぼけた家もまけずに笑い声　三小　方昭
一年生まだピカピカなランドセル　小四　美保
四年生もっともっと勉強しなくては　小四　亜貴子
手足とも指が五本という不思議　小五　恵子
夏間近素足に水が気持よい　小六　仁昭
じっとしているのが惜しい五月晴れ　中二　希世子
青春をさわやかに生きくいがなし　中二　紀
高二には関係がない子供の日　高二　愛
今日のこと今日成り妻と観るドラマ　静水
プレゼントやっぱり母の日は嬉し　房子
ニューフェイスのまわりはいつも風動く　蘭幸
草いきれする花園に夢を見る　鈍舟
三歳の反抗母の胸に溶け　比呂子
夜の深さへ人間廃業したくなり　笑子
線香の煙と語る母の日よ　令子
数学を子に試されて眠られぬ　淑子
変声期次男が妻へ矢を向ける　節夫
花言葉半分信じて恙なし　菁居
振る元気うせても旗は手離せぬ　一路
孫と遊ぶ一刻邪心などはない　貞子
付き添いの寝息に感謝の掌を合わせ　秀水
子と相撲一度は叩きつけてやる　白狐
やすらぎはひとりではない正信偈　シゲヨ

川柳翠洋会　中西兼治郎報

雨降ってアジサイ浮気な彩を出す　悦郎
虹の橋はるかに描きくにを発つ　いつを
待ちに待った便りは只の一くだり　仙吉郎
療養者寂しくなれば便り書く　あき子
その端の届かぬままに虹消える　光子
寺の屋根横切るつばめ解脱して　みつ子
五年ぶりぬれ手で開く子の便り　綾子
南国に別荘おいてつばめくる　照子
消えぬ間に急いで渡る虹の橋　泰子
雨だれにあせた記憶がよみがえる　宏子
スマートにつばめがすべる屋根の上　風童
タイプやってますとタイプでの便り　兼治郎
お便りを拝見荒んだ字と言えず　薫風

川柳ささやま　河原みのる報

酒断って男のネジが一つ欠け　貞子
一杯の酒で釣られた日の誤算　久子
追いかけて念一つ押すわらじ酒　可住
どん底を生き抜く鬼を妻がかう　文平
鬼解明学者が登る大江山　ひか平
鬼の母ニンゲンの恐さ子に訓え　みのる
子の巣立つ裏に堪えてる鬼の汗　法斉
指切りへ孫の瞳の生きた彩　テル
朽ちてても尚生きている仁王の目　エキオ
生きているよろこび今日を噛みしめる　米朝
孫抱いて笑ろた笑ろたと生きている　越山
ひとり言花の笑顔へ呼びかける　房子
楽しげに一人ごと言う千鳥足　八重
ペダル踏む軽さが通る一人言　美智子
頬なでる風にうれしいひとり言　五月

駒つなぎ吟行　里　小路報

湯の中に浮いた乳房を忘れたし　冬葉
タバコからシンナーに行くおちこぼれ　柳右子
鍵かけた娘の引出しに好奇心　小路
大好きな人の日記を見たくなる　浩一郎
仙人にまだ抜けきれぬ好奇心　柳伸
みの虫の冬に貌出す好奇心　美代
おみくじの一行に見た好奇心　規不風
好奇心海の青さにたどり着く　悦郎
転がったまりに何からたずねよう　冬二

佳句地10選（前月号から）　石垣花子選

友情が三分でマダム傘を貸し　喜酔
辛抱の限度を知らぬ母の背　素美
最後まで造花で欺して欲しかった　律子
泣き言をしゃべる小川が一つある　紫香
奥さんが裏で人事を指図する　みのる
服を着た六法全書のような父　克己
此の狭いところであちこち向いた屋根　一路
明日の朝きっと話そうかたつむり　冬葉
金魚ゆらゆら泣かせた女をフト思う　雀踊子
絵の奥のなみだが足を釘付ける　千代

地図にない穴場でさがす好奇心　桐下

南大阪川柳会　中川　滋雀報

竹細工越後に長い冬が来る　雀踊子
どう細工してみてもおかめはおかめ　あいき
細工師の指美しく喋りだす　浩一郎
小細工が好きな男の痩せた指　眉水
しんこ細工祭り囃子が耳の底　滋雀
セールスの鞄は小細工詰めてある　雅風
こうなるのが自然男と女です　律子
不動産屋に目をつけられている自然　恒明
自然の中で命は限りなく生れ　文秋
結局は自然に任せて恙なし　覚然坊
自然がだんだん消える造成地　節子
冬眠へ自然のリズムがノックする　寿美
篭の鳥自然に還る日の不安　公一
風見鶏素早く向きを変えている　酔々
てんびんに素早くかけた眼のうごき　頂留子
飼い猫となって忘れたすばしこさ　やよい
年寄りの素早く拾う一円貨　喜風
隅に席とって企み考える　勝美
好きなこと好きにいうてる外野席　智子
末席の意見に右の耳動く　凡子
天国で呼んでくれない指定席　柳伸
空席へみんなの目玉光ってる　春蘭
老人が乗った途端に目をつむり　蘭
招待席舞台が小さく見える席　喜美子
七ころび八起き男の席が出来　重人
頼もしい友に染って知恵を分け　悦郎
一色に染める世論がこわくなる　美房
多彩な男で染替える色がない　柳宏子
手を藍に染めて代々継ぐ職場　千代三
二度染の彩は深みをそっと抱く　凡九郎
白壁が夕日に染まる里景色　善信
夫婦とは梅と紫蘇との様なもの　綾珠
悠久の自然へ人の小さよ　楓楽

川柳塔からつ　浜本　義美報

歯の抜けたように菖蒲を挿す家並み　虹汀
駈付けて呉れる医師ありまだ死ねぬ　素石
憲法の隙を窺う赤い紙　正敏
偶然で始まり業をみて夫婦　四郎
朝寝ぐせ自家菜園に癒される　紫泉
夏に訪うアルペンルート冬最中　ちよ
趣味多彩齢のゆくのを忘れさせ　義美
御飯粒拾う育児に日を負われ　久仁於
孫たちの殺し言葉にいつも負け　一竿
判官が未だ生きている選挙戦　多々子
コースからはみ出しそうな積木箱　一彦

川柳大原　白岩　文衛報

茶柱が沈んで弱い声になる　みさえ
弱い糸よせて綯い足す母の紐　やよい
弱いとこ触れねばそれで済むものを　幸子
筆跡の弱さに姉の身を案じ　ゆくよ
嘘一つそれから男弱くなり　寛平
弱い者同士の知恵をありったけ　宮子
弱い子はひとりもいない米を研ぐ　寿恵子
五十路来て人間忙しいばかりなり　理恵
じゃがいもの皮の弱さをいつくしむ　かずこ
弱いはね風にまかせて蝶の舞　玉恵
宗教論僕のはすこし少女趣味　ゆきお
坂道のなかばで犬の気がかわり　文衛
陛下にもホクロがあって楽しいな　いさむ
父の手のほくろも戦争知っている　妻子
よう笑う顔にほくろがよく似合い　元江
裏切らず生きた証しの泣きぼくろ　ひでの
わたくしの太陽などと言うてたに　耕花
いつまで寝てるかと窓から陽が覗き　天信
太陽を背に一生を米作り　はるみ
陽当りを選んで籾の種浸す　睦子
太陽の恵みうれしい老いの背な　たけよ
聞こえない耳にしてから楽になり　辰江

城北川柳会　神夏磋道子報

親の夢幼い背に重すぎる　三十四
日歩に追われるのも生きがいか　静歩
やる瀬ない恋に破れて夢路ゆき　炉斉
和田金で何故か空しい貧乏性　ふみ
想う人と夢路で逢えて春なごむ　すみれ
終止符を打つ人生がバラを剪る　千世子
相続のもめ事知らずつばめの巣　婦美子
幸之助みたいになりたい僕の夢　重彦
堕ちて行くコースシンナー白い粉　右近
すやすやと何を夢見る笑い顔　星斗
余暇生かす百のコースが用意され　節子
フィナーレ爽かなれと老いの夢　満津子
子が走るコースへ未来図を乗せる　テルミ
来世紀へアクティ大阪夢をかけ　ただし
円高も我が家の暮し変りなし　悟郎
ごくらくの夢を見て居る日向ぼこ　笑風
菖蒲園花の数より人のかず　秀村
出世コースすねた歯車噛み合わず　志保
七十を過ぎてコースを立て直し　八重
ガンダムの正義へ孫が抱く夢　公一
エリートのコースにあった落し穴　頼一
ロボットが町の散歩も夢でない　茂樹

人並にローンで家を建てました　正之
それぞれの顔で驚く干鰈　新一郎
アクティ大阪ヤングに染まる軽い酔い　静子
夢で見た地中海への旅に出る　達一郎
菊植えて今年の花に夢をかけ　晴子
夢にまで休む暇無くミシン踏む　左春
極楽を夢見て余生生き抜こう　午郎
晴天が続いて梅雨の暦くる　そとえ
強がりを言ってよろめく恥しさ　きくみ
反戦を叫ぶタンポポ土の中　美恵
よく見れば毛虫の顔も悪くない　道子
夢見てる方が良かった月旅行　倫子
蚊の事は言わず竹林愛してる　弘生

尾浜川柳会　黒川　紫香報

俄雨傘をさしかけ友となる　よしつぐ
雨雲が駈ける私を追ってくる　江美
雨の夜が好きで電話をする女　清太
雨の夜もう嫁だけのぬるい風呂　寅之助
雨やどりするまに伴れの気が変り　牧郎
保育器に見る生命の素晴しさ　寧一
露天風呂夕日に肌をぬすまれる　光重
古時計ネジ一杯でも遅れ出す　弘治
真ん中に住んで隣の愚痴を聞く　紫香
順番がきて責任を持たされる　すみ
無責任水子地蔵が増えつづけ　真吉
村芝居主役を喰った馬の脚　いわを
つけ馬と知らずに妻は礼を言う　夢之助
たずな取る馬主へ馬冷たい瞳　佳秋
がまんするおしんの心子に聞かせ　かつみ
夜の団地同んなじ幅の灯がともる　昌子

川柳わかやま　堀端　三男報

さよならの余韻旅路を刻み込む　正子
こけしの目書棚で旅情温めてる　克子
アルバムを繰って二人にある旅情　天彦
篝火を焚いて迎えた宿に着き　きみ
旅情ほのぼの少し多弁になってくる　幸
傷心を癒す青葉の道を撰る　太茂津
アルバムが忘れた旅情呼び戻す　信秋
悲しみのわかる男の思いやり　雀踊子
美しく退場するも思いやり　寿子
糸だけは切らずにおこう奴凧　桂子
時々に電話で見舞う老いの母　庄平
日曜の妻へそーっと床をぬけ　紀久子
若い芽を陰で支える思いやり　英子
古傷へ触れず話題をそっと変え　光代
思いやりだけはロボット真似られぬ　武雄
青い海いつかは帰る母の胸　三男
未来図の白さへ飛ばす青い鳥　緑良
叩かれた西瓜青いと音がする　忠雄
青畳恋しくなったパスポート　登志代
美食して肥満の果ての青野菜　正博
青い実がたしかな主張持っている　稚代
青梅の一つひとつにある主張　照子
信号は青なのに歩かぬ人もいる　凡九郎
河鹿鳴く旅情が胸を突き上げる　狂虎
旅先で一人コーヒー飲む旅情　紀美女
踊り子もお吉も友に旅ごころ　和子

尼崎いくしま川柳会　角野かず子報

Tシャツに歌手の素顔が生きている　君子
上役へ逆ろうている腹の虫　定人
引越しに釘の穴まで数えられ　幸子
しなやかな指がもの言う酒の味　春子
わらべうた今日も聞こえてゆすら梅　静江
白い旗男は腹に巻いている　伊三郎
漫画よむ若者達の静けさよ　かず子
赤紙の記憶の中の鎮魂歌　牧郎
一本の釘薬人形が哭いている　伊升
紙吹雪舞って女は幕を引く　貞子
男の手欲しいと思うせつに思う　年代
着道楽陽の目をみないしつけ糸　かすみ
四季咲のバラに珍らし黒い花　すえ
野仏が噂をじっと聞いている　美智子
いっぴきの男に高い山がある　紫香
ささやいて本気ですよと夜の蝶　保蔵
仲の良い友がいちばん敵であり　佳秋
針箱に祖母の形見の紙人形　美紀子
割勘を越えた分だけ二日酔　一郎
金槌のこころ解らぬ釘二本　ハツヱ
千代紙を一ぱいため少女逝く　玉子
影武者をはなして敵の目をそらす　郁栄
赤紙が世界の地図をぬりかえる　美代子
のぞかれて肱で壁する答案紙　かね子
枇杷むいてむいて悪女になりたがる　水声
味方が少々手薄の想い家を出る　一掬
箸紙も二日三日の連れになる　晴子

川柳ねやがわ　高田　博泉報

たとえばの話の中にいる私　紫香
気の早い蚊が春眠をさまたげる　まさ乃
キッスした時は一枚だった舌　覚然坊
お悔みに議員は票の胸算用　一笑
花吹雪風のいたずら聞いてやる　てまり
色々の芽吹きが光る山の春　静江
幸せな切手美人になめられる　かすみ

一言へ三言もかえす妻の舌　シマ子
宝石をめぐる女の躁と鬱　英比古
関取りになっても二十歳の顔である　博泉
舌の先ちょっと滑って出る本音　一途
全勝の綱を倒した恩返し　淳朗
肩のこらない話聞いてる紙コップ　度
酒癖が無けりゃ貴方と呼べたかも　晴風
人はみな疑い深し蛇の舌　麗水
ほとぼりも冷めた頃だと猫帰る　柳宏子
舌足らずの孫に年金せしめられ　右近
桜んぼの丸さを舌は知って居る　弘生
糠味噌を宝石の手が混ぜている　柳歩
四月馬鹿今日一日は不在にし　キミ
一人相撲いつも死角に居る男　満津子
土地だけの家であしたを待っている　鉱平
くつろぎの家にローンが従いて来る　光子
ほとぼりがさめて銀行襲われる　亜成
誕生石にわたしの命預けます　三千子
ほとぼりのままで胃散を放さない　亜也子
二枚舌の次に生え出す三枚目　あやめ
二枚舌お前に投票するものか　眉水
選挙演説大阪弁でしてみたら　静歩
黒ダイヤ愛をたたえている瞳　亜鈍
花散って女きれいな化粧する　鼓城
ほとぼりが覚めて見直す妻の顔　寿馬
宝石が転ぶ倖せ不倖せ　鬼遊
鼈甲のメガネで君は負けたのだ　藻介
眼鏡拭きほとぼりはもうさめたろか　薫風

倉吉川柳会　菩句報

母親の感化人情家が育ち　碧水
困りごと受けて余生に張りを生み　あや子
変る世に義理人情は空釣瓶　独歩
忘我の蝶人情の花見失い　ゆり子
人情に弱いわたしも日本人　菩句
札束に義理も人情も迷わされ　秋人
人情味いやとも言えず貸したきり　寿朗
聞いて泣き見て泣く妻で人が寄り　柳風
人情の厚いおしんに今朝も泣き　千枝子
人情は金のことからもめて来る　夕路
人情が紙よりうすい都市砂漠　御前
逆境に信じる友の手が温い　たけの
弱虫は金で決着つけたがり　民子
弱虫を許しはしない北の風　松女
真ン中の道負け犬は歩かない　おさむ
弱虫の殻をぬいでる大芝居　喜美子
おしんちゃん弱虫なんか寄せつけず　康子
弱虫が家にも一人のれん継ぐ　紫泉
見送りの列棒となり点となる　秋女
ご多忙と型にはまった前口上　みなと
共稼ぎ朝の多忙を児等に分け　満春
風呂上り姉も美人に見えて来る　寿満湖
サウナ風呂でもこの腹は引っ込まぬ　律子
裏町もいいさ人情ある町で　とめ子
握手され人情に票揺らぎ出し　しづ江
弱虫に明け暮れ当てる聴診器　千秋
弱虫がこつこつ貯めたマイホーム　宗則

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

心までぬすんだ果ての冬の蝶　保子
陽炎はせり合いながら舞いながら　敏明
不況風アドバルーンもつらかろう　英子
きりつめた人のこころを鬼が喰う　志保
陽炎がビルの上にも燃えていた　ヒデ子
見栄張った鯉を陋屋もてあます　恵美子
アドバルーン下界の雑音知らん顔　ふみ
意地通したばかりに強い風当り　秀穂
アドバルーンお前もやはりリース業　輝水
遅刻してどうもが上座へ押しやられ　民子
レフチェンコどうも気になる暴露記事　美栄
アドバルーンに見詰められてる盆の窪　はるみ
花生けてどうも気になる枝一本　鈴江
アドバルーン戻りたくない俗世界　清泉
どうもにはどうも手こずるエトランゼ　白汀

川柳はびきの　塩満　敏報

方円の器の水で疎まれる　寿美
老夫婦通院耳鼻科内科歯科　白水
いちにちで忘れてしまう他人の死　和子
焦点がすこうしずれているラッパ　与呂志
春眠をよろしく覚ます選挙カー　キミ
一息で愛の風船どこへ飛ぶ　隅谷義一
暑い夜飲みませんかと近寄られ　伴子
はてしない明日に背中をのばしとく　龍子
故郷が恋しく本籍山に置く　司
友情は美しいものと説く童話　美恵子
ライバルの涙で勝と見た誤算　隆
バーゲンを待って結局多く買い　美代子
髪染めて一家支える母が居る　隆二
妻の勘くるう飛石また休み　三千代
わがドラマ毎日書いて齢をつむ　忠宏
手土産の中にはさんだラブレター　恵美
長過ぎた風邪も春だと退散し　まさ
表札は大きな文字で便り待つ　末一
口ほどにピントが合わぬ針の穴　吐来
人生の余白を埋める日記帳　喜酔

二代目の紙冶が消えて三代目　喜代子
襟足の白さが光る衣更え　石橋義一
うしろ姿思わず声をかけそうで　胡村
ポスターの美人にほれて品を買う　みつる
娘の笑顔想いつ握る飯のつや　翠
裏表ないが機転のきかぬ奴　美房
裏表こなせる頃は隠居の身　志津
マスコミが暴くスターの裏表　良絵
故郷の幸重い土産へ逆らわず　伸子
転勤を見送るばかり平でいる　昭子

米子きゃら木川柳会　石垣花子報

宝塚へ少女は蟻の列となり　亜弥
少女の碑いまも尾を引く飛行雲　なみ
「おお宝塚」少女趣味だと言われても　伊都
澄んだ眼で少女善人知っている　とも子
もらい泣きさせておしんが摑む虹　花子
赤い服少女に明日もバラは咲く　あい子
美少女をもって不安がつきまとう　田鶴
少女期のふとした問いに時代知る　晶子
いつの間に父へきびしい少女の瞳　美世
ルノアールの少女に出会う初夏の街　千春
少女のカンするどくなった梅雨の咳　日枝子
パントマイム少女のひとみ珠を抱く　瑞枝
人形に繕りおしえている少女　千代

京都塔の会　松川杜的報

竹の青ひとときに座禅してみたし　杜的
フェリーボート荷の水仙の鮮やかさ　和友
落ちそうで落ちぬ鳥居の小さい石　紫香
パックした顔笑わせて叱られる　潮花
お隣は煙草絶やさぬ指定席　求芽
一枚のタオルを武器に露天風呂　英壬子
花の季節めぐりて思う人のこと　美穂
浮見堂に立って水の量など言う　春江
句碑に立つ影は私のものでなし　花代子
湖光るとてもうれしい地図もらう　はつ絵
京訛とてもきれいなひとに会う　〆女
湖で脚洗ってる浮見堂　三求
刈込みが続き飛石に導かれ　水客
句を作る暇なく吟行師と語る　客遊子
薫風はさわやか句碑へ背をかがめ　萬的
洗心の顔にうなずく満月寺　秀夫
木曽の山月が浮き出た茶事の宵　静江
潜水艦ゆったり浮いている平和　弘生
ふところも軽く雑踏に浮いてゆく　白李
当りくじ宙に浮いてるとは不思議　白渓子
浮き上る奴をひっぱる河童たち　武庫坊
旅の湯へ手足伸ばして浮いて見る　芳子
かたくなに守った自分の性悲し　如水
守られている掌の大きさを信じよう　年代
守備範囲守るガス栓確かめる　飛鳥
約束を守ると雨に雨おんな　酔々
守りぬく男の小さな約束で　雀踊子
雑踏をさけて快晴を一人旅　笛珠
快晴の空に噴煙直に立つ　孝江
ほう仙花快晴好きではじき出し　冬子

川柳大阪　田中笑風報

目白台裁判沙汰も春の風　二天坊
選挙済んで漸く吾が街取り戻す　貴麿
丸い背をもんで倖せ夜の宿　酔花
日向ぼこ働き者の蟻の数　キミ
風雪に耐えて年輪明日がある　伸子
不況風日本列島吹きまくり　天平
花一輪マスコミよりも早く咲く　だるま
久し振り逢瀬に早い花時計　道子
血統が賞金かせぐ皐月賞　比呂志
ふるさとは今日もやさしい風が吹く　金太
立ち読みが本屋の軒を占拠する　鉄心
カラオケで売上げのばす日本橋　三千雄
切り花の余命どうあれ水を替え　六龍子
展示会この花育てた汗がある　敏司
そよ風がそっとささやく花言葉　和世
体外に宿るベビーの灯がともる　みつる
死の灰を降らさぬ決意花を見る　与呂志
ごった煮が食べたくなった宿の膳　笑風
大安の花は両手では持てぬ　重人
野の仏開けば楽しい花の私語　洛酔
すんなりと下駄が揃って旅の庭　本蔭棒
痛いとこ狙うたように物あたる　喜酔
さそり座の女で怖い夢が燃え　健坊
この顔に似て欲しくない孫の顔　晃山
民宿に心の通う味を見る　末坊
花一輪季節料理を引き立てる　いさむ
ランドセル頭と手足出して行く

南海電鉄川柳部　広井すえお報

この汗は金で買えない意地　すえお
草野球ラッキーセブン皆が湧き　圭次
ラッキーも逃げて行くよな下り坂　とし子
知性ある女がラッキーをのがしてる　しづ子
落した財布帰って来たラッキーさ　綾珠
ラッキーなる話亀裂の嘘がある　悦郎
初辰さん商売繁盛祈る列　百梅
手をあわす初辰参りの赤い髪　山久
初辰の招福猫で家内無事　春蘭

初辰を信じて明治笑われる　圭水
願いごと叶えと楠にする合掌　川狂子
住吉さん念入り拝む初辰日　覚然坊
落ちついて商売できます初辰さん　雅風
初辰詣り張り切る母がいてくれる　花仔
初辰へ段々大きく招き猫　勝美
発展に初辰さんへ足運ぶ　東雲

川柳高知　松風報　広風

行き帰り二つの嘘を用意する　伸
初孫のしかも男児で酒うまし　草風
献体へまとめてしてるご奉公　千鳥
身の上を語る女の小さい嘘　紅雨
錠前のいらない過疎で犬と住み　佳風
負けた日の話はしない自尊心　春枝
日替りで日参させる市場籠　弘生
立てる顔一つや二つある現場　登舟
子が巣立ち加速度がつく老いの坂　桂緑
つり銭に困りましたと貯金箱　三吉
つり銭のないよう持たす子の使い　竹萌
親ゆずり短気損気と知りながら　幸泉
道端の石に短気を笑われる　菊野
気短い人だと思う言葉尻　岩男
川の字のくらしをしらぬベッド族　青果
恩人の在れば告げたい今の椅子　松風
腹立てた時に出てくる国訛　実男

川柳化粧櫓　植村客遊子報　さとる

子の買ったペットの世話をさせられる　悲子
発車ベル鳴ってから聞くいい言葉　大鷹
甘酒に舌が亡母恋う梅の里　和枝
洗い髪疲れは明日へ持ち越さぬ　若葉
冷酒が甘露にかわる野良がえり　永楽
馬鹿だから馬鹿になれずに左遷され　みね子
卒業までの学資なんとかするパート　伊江坊
頼りなく思う息子も管理職　朝翁
腕白の孫やって来る春休み　葉香
地図にない国へ妻だけ独り旅　礎石
戸締厳重電話で人が出入りする　岳詩
年金をへそくる女にある魔性　紅月
人妻の酔い大胆なことを言う　秋月
自分でも女に弱いなと思う　客遊子
手を焼いた孫二人とも保育園
新券で包む水引派手にする

オーエスケー川柳会　大坂　形水報　一念

トンネルを出ると緑が光ってる　百合子
刑事一人酒は屋台ときめている　てまり
雑踏でもう父でない刑事の目　一扇
時効まで秒読み刑事焦り出す　雅洋
うたた寝の夢をこわして電話鳴る　登
うたた寝を起こさぬ様に刈る床屋
一本の善意緑の国造り　秀泉
うたたねの母は仏の顔でいる　聖地
草の根をひろげる互いの手にみどり　博泉
うたたねを蚊一匹に起こされる　亜成
老刑事の温情見事に復帰させ　中野
光化学緑の木々も悲しそう　千夢
うたたねの間にドラマ解決す　雄峰
手錠かけ刑事の顔が違えられ　入仙
うたた寝で来た楢山にいた鴉　形水
チンピラが恐れ慕うている刑事

川柳後楽　井上柳五郎報　元一

言いにくい金の無心は郵便で　健一
朗報に無風の我が家風が吹く
ただ今も言わず郵便来ぬか聞き　柳五郎
世界中郵便葉書和で結び　定平
どうにでもなれと鳩に石投げる　玉水
核のない世界に鳩が飛ぶ平和　隆
祝典の鳩が日本晴に翔び　哲郎
広島の鳩へ平和が遠すぎる　草風
難問の答えへ重い参考書　幸好
手を振って答えてくれて票がない　恒洋
ウインクで二人に答えなどいらぬ　佐加恵
事勿れ主義の答えに脈がない　番茶
手加減をした顔隅でされた顔　たけ志
平手打ち手加減したのに分らない　照路
新米の巡査が手加減してくれず　博友
思春期へ小言手加減して諭し　秋月

西宮北口川柳会　妹尾　春江報　伊升

心機一転無口な父が庭を掃く　一郎
庭つきの住まいだんだん遠くなる　しげお
母が来て庭もきれいにして帰り　きよ子
庭付きの家夢だけで終りそう　みつ子
ひとり居の女の庭の白桔梗　紫香
ちっぽけな庭でも水を打っておく　春子
庭つづき今日は雨戸がまだあかぬ　隆子
一本のビール夫婦仲よく酔うている　右近
湿っぽい話はしない大ジョッキ　千世子
ビールで乾杯久闊の友に今日の地位　幽香
ゴンドラの唄が聞こえてくるジョッキ　飛鳥
二人だけのビールへ星が話しかけ　郁栄
土曜日のビールに解放感がある　水声
ビールで乾杯大屋政子に似た女　光子
本心はいつも言わない姑だった　美津子
親心子供に届け宅急便

京歩くこころの傷にひびく鐘　かすみ
本心を言えば傷つく人が出来　笑女
こころから愛したらしい人と住み　伊三郎
手鏡にこころの愚かさ覗かれる　〆女
さわやかな心を受けて客となる　年代
几帳面のこころが重荷になってくる　婦美子
口べたでこころの中をのぞかれる　春江
ライバルに負けて心が軽くなる　冬子
知床の海は核など知らぬげに　てる
喋り疲れて割箸が冷えている　文平
祈る事夫婦で違う鈴を振る　杜的
ウェートレスお盆の裏で文を書く　保蔵
霧晴れて山の木霊の喪があける　はつ絵
山門をくぐると消える夜叉の面　園歩
夜逃げする道がこんなに遠いとは　眉水
喜怒哀楽生きてる証し空の青　いわを
傘もたぬわけ氷雨になれている　堕駄
犬よりも綱曳く朝の顔なじみ　紀雄
赤旗に会社勤めも若かりし　日の出
稲光めぐる想いをひと裂きに　宏子
花影に佇つひとときの人を待つ　恵

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

落人の意識流れて同じ姓　芳枝
集落の同姓悲しい過去を持ち　与根一
屋上の二人夕陽がまどろしい　壮樹
屋上の風に歪んだシャボン玉　紫吻
屋上の風がおいしいノッポビル　登美也
こと金になると友人そっぽ向く　逓児
そっとしておこう友人のアデランス　鶴丸
病床の長きに友も遠のきて　雪美
友人の司会が湧かす披露宴　秀子
友人を一人拾った縄のれん　正朗
恋人と友人うまく使いわけ　愚童
同じ趣味持つ友人で腹を割る　多賀子
横文字にだまされ国産買わされる　満江
使い捨てされる豊富な国産品　芳子
国産という名のもとに買わされる　春楠
国産の粉少しまぜいずもそば　寿美子
目かくしをするてのひらのやわらかさ　舞吉
てのひらに農夫歴史を刻み込み　ちかし
てのひらが一番先に口惜しがり　鳳人
手のひらが温い無欲な父である　雄々
だまし舟手のひらの中で人堕す　きみえ
握手した腹をてのひら感じとる　由郎
てのひらを見せぬ男で距離を置く　孤呂二
てのひらに子らの未来が画いてある　叮紅

高杉　鬼遊報

菜の花句会

弁当に定位置がある卵焼き　健司
羽根がふと重荷と想う日の孔雀　頂留子
カメラ買うつもりの金が酒に化け　みつる
乱れ雲遠い絆は遠いまま　糸葉
羽根閉じて孔雀哀しい顔をする　美幸
清水谷うかってカメラ買わされる　勝美
孔雀のきまま小半日をぼうに振り　冬葉
新幹線過密ダイヤですぐ乱れ　柳宏子
孔雀のように着飾って行くクラス会　シマ子
胃の痛む話が続く乱れ雲　悦郎
泥船に乗せる男を数えてる　雀踊子
二子三子だんだんカメラが鈍くなる　幸生
定年になってすっきりした名刺　鬼遊
船脚の速さ鷗に丁度よし　栞
この愛をどう打ち明ける乱れ雲　鎮彦
肩書がついて四角い人になり　射月芳
窓際の男うつすと首がない　度
保津峡の船は木の葉の様に抜け　春蘭
派手なのも知能指数も孔雀なみ　蕉露
そういえば日本の国は船に見え　昭子
結婚式孔雀の広間の人生図　キミ
おもてなしその一品に卵焼く　司
一日のリズム乱した朝寝坊　三男
商戦の目玉にされる生卵　右近
のら犬も来て桟橋が活気づく　柳伸

川柳しんぐう　川上　渓水報

何もかもあなたにあげた空の箱　武雄
人形の箱には鍵をかけず置く　三男
四季四季に箱詰の届く里の味　花泉
夫にも見せぬ秘密の箱があり　潮花
いっぱいに箱置き船場朝動く　紫香
下積みの役目を負ってタイヤ舞い　八千代
ブレーキはここらで踏んだ事故現場　十郎
古タイヤ子どもと遊ぶ五月晴　信子
黒ぐろとタイヤの色も試運転　まさ子
ドライブのタイヤへ妬いた釘がたち　テルミ
桐の木が育ち長女も適齢期　幸
人恋し植木の新芽が競い合う　与呂志
我がままに植木と妻を曲げている　豊太
生け垣の植木鋏が蟹に似る　里美
針金が植木の心縛ってる　正子
一枚の紙でないたり笑ったり　澄孝
入園児白紙のまんまの目がきれい　富子
メモ用紙へのへのもへの長電話　正
人事異動紙きれ一つで人が飛び　大輪
紙一重だったと負けたほうの弁　渓水

本社八月句会

日時　八月八日（月）午後六時

会場　なにわ会館
天王寺区石ヶ辻町19―12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話06・772・1441番

兼題　おはなし　黒川紫香
「笛」　小出智子選
「割引」　神谷凡九郎選
「余波」　笠原吸江選
「信頼」　大坂形水選

席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守

会費　五百円

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

9月の兼題　「彫る」「びっくり」「汚れ」「浮沈」

9月の本社句会は7日（水）

募集

十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「支え」　松川杜的選
「命令」　川竹松風選
「宝」　川端柳子選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「理想」　里小路選
「プロ」　西村早苗選
「久しぶり」　高橋千万子選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

8月の常任理事会は1日（月）

暑中お見舞い申しあげます

川柳塔社　常任理事一同
参事一同
理事一同
句会部一同
編集部一同

定価　五百円（送料50円）
半年分　三千二百円（送料共）
一年分　六千三百円（送料共）
昭和五十八年七月二十五日印刷
昭和五十八年八月一日発行

編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社

〒545
大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六二九―六九一四番
振替口座大阪・三三三六八番

＝編集後記＝

☆七月七日の路郎忌句会は番傘川柳本社の礒野いさむ主幹の出席を得て盛会にして頂いた。その句会に私は遅参した。

☆直原玉青画伯の力作「大阪城四季図屏風」の贈呈式と祝賀会が大阪ターミナルホテル名庭の間で催されお祝いに参席したからである。☆四季図は大阪城を東西南北から眺めた風景の六曲屏風の大作で梅園や藤棚、黄落に雪景色が味わい深い色彩で描かれている。面白いのは、その春と冬の絵にはスケッチをする画伯ご自身の姿が描かれていることで甚だ川柳的でもある。大阪市立博物館で永久に保管され、秋には展覧もあることだろう。大阪築城四百年に際してまことに意義のあることであった。

☆画伯は今年数え年の八十才を迎えられたが、パーティーでの情熱には深い感銘を受けた。路郎先生の情熱はカンナの花が炸裂するような朱色であるのに対して画伯のそれは至って静かな桔梗の紫の情熱のように思える。瓢瓢とした静ひつは画禅一如から来るものだろうか。

☆カンナも桔梗も激しい炎天下に冴える花だ。（薫）

▼一匹の鬼から封書が届いた。「鬼展」への案内状である。その鬼は加藤公康と称し未知である。鬼を知らない鬼が鬼を見にミナミの画廊へ出掛けた。板塀の割れ目からひそかに覗く鬼、怖がらそうとすればするほどおどけて見える滑稽な鬼、生きていることが哀しくなってくる鬼、油絵の様々な鬼が私に語りかける。〝われや鬼なる烙印ひとつ身にもつが時に芽ぶかんとして声を上ぐ〟馬場あき子氏の歌が甦る。

▼鬼の画家と話をする。初対面ながら空虚な社交辞令は素っ飛んでいる。十年来の知己と云う情感とも違う何かを希求する意志の交錯が、線香花火のようにチカチカと光る。梅雨どきの一刻、商業都市の一隅で凡そGNPなどと関わりなく、浮世離れの内なる「鬼」を熱っぽく語る、正に狂気の沙汰である。彼は鬼を描くのに仏典を学んだと云う。絵と仏教とに直接的な関連はないだろう。すべて心の問題である。私たち川柳人にとっても川柳だけで学べるものでもない。〝遊狂の狂たり得ねばひたすらに夜の深みに書きうもれいき〟馬場あき子氏の歌が、怠け鬼の尻を叩く。（き）

▽ラン狂・ツン狂・シュウ狂（お分かりかな）を自負する編集子のこと。「一冊の本・句集」を探し出すのは、対象に接近したとき、第六感がパッと働くようである。書棚から、著者が「俺はここにいる。早く来て探せ」と言うのである。ケモノ偏の醍醐味はこのあたりにあるようだ。「番傘」編集長の岩井三窓氏や「川柳塔」の塩満敏氏にはお分かりいただけると思う。とにかくそこに古本屋があれば必ずのぞくという習慣をつけておかねばならない。そこで自慢話。

▽井上剣花坊句集＝出張中のこと佐世保駅へいそいでいるとき、右側に古本屋がある。さっと入って、上段の棚を見廻すとあるある、井上信子編の氏の句集の文字が目にとびこんで来た。旅人・福寿草・私達＝これはセットで、寺田町の石崎書店の上段にあった。大山竹二句集・延原句沙弥句集＝アベノの天海堂書店で発見。いつも通るのだが何か引っぱられるような気分ではいった。

小池鯉生句集＝東京出張中早稲田大学近くの古本屋街で入手。

▽目下の探書は川上三太郎の「孤独地蔵」と定本岸本水府集で共に豪華本であるとにかく苦労して収集したのでどの本にも思い出話がついてまわる。（酔）

★いわしばかりを食べさせる専門の店が近頃ふえてきた。大阪梅田にある、そういう店の一軒に仕事仲間と食べに行った。カウンターと、テーブルが五つほどの店で、カウンターの上の水槽には小ぶりのいわしが銀鱗を光らせて泳いでいる。

★定食は松竹梅の三コースあり、三千五百円の松コースを注文した。前菜から始まり、刺身、団子、焼物、寿司などじ品ほどで、もちろん材料は全部いわしである。メニューを見ると定食以外に一品料理もあり、その数の多さには改めて驚かされた。岩手県の何とかいう町ではいわしのハンバーグも開発されている由。

★消費者の魚ばなれが進み特に鯖、いわしなど青い魚は人気がない。何とかいわしを食べてもらおうと当事者の涙ぐましい努力には頭が下がる思いである。けれども三千五百円の料理を食べ終って腹は満腹したが、気分はもう一つ満ち足りぬ。

★あの、いわし独特の臭いを消した〝新しい料理〟は若い人には案外受けるかもしれぬが、いわし好きの僕には気の抜けたビールのような後味であった。（史）

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十八年七月二十五日印刷
昭和五十八年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻六七五号 川柳塔 八月号
定価 五百円（送料五十円）

暑中お見舞申し上げます

電波新聞社
東京本社
東京都品川区五反田二丁目一一一五
大阪本社
大阪市北区中ノ島三（朝日新聞ビル内）

投稿欄案内

川柳 選者 橘高薫風（掲載日）毎週水・土曜日

俳句 選者 小寺正三（掲載日）毎週火・金曜日

短歌 選者 佐々木信夫（掲載日）毎週月・木曜日

※優秀句には掲載紙をお送り致します。

〈投稿規定〉はがき一枚に三句（首）以内・自由課題。

〈投稿先〉〒530 大阪市北区中ノ島三（朝日新聞ビル内）電波新聞大阪本社学芸部あて。

（川柳・俳句・短歌を明示）

この夏、おいしさひとりじめ……

アイスキャンデー

宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン

高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドージカ店
近鉄（アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店）
サン・ストア（中之島・淀屋橋各店）
京阪モール 新川売店 虹のまち店
泉北高島屋 南海難波駅構店
国鉄大阪駅店
大阪・なんば

551 HORAI 蓬莱

TEL (641) 0551

雑誌 05703－8